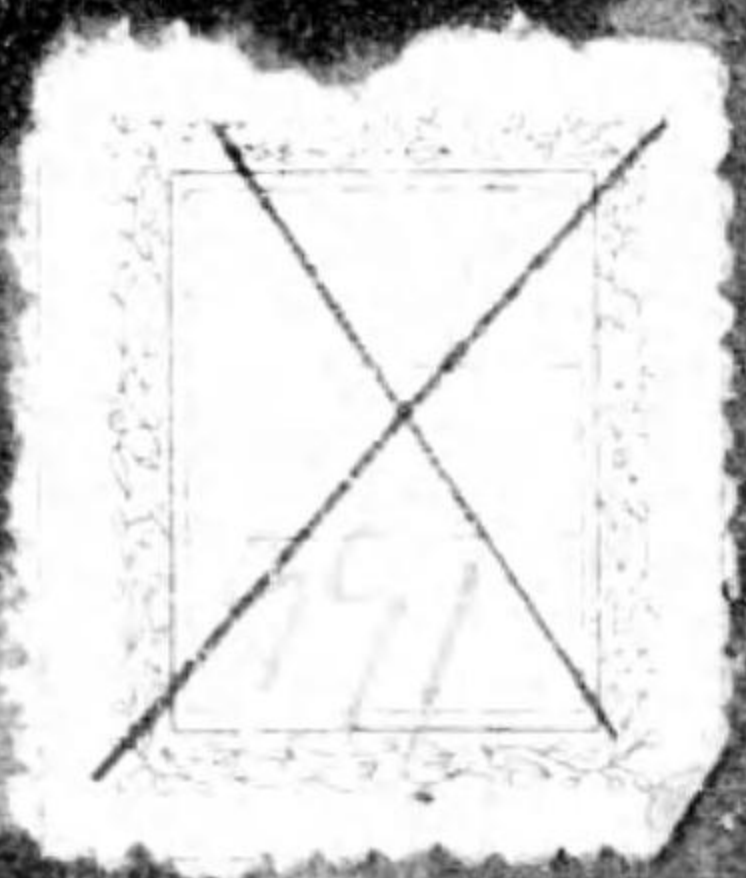
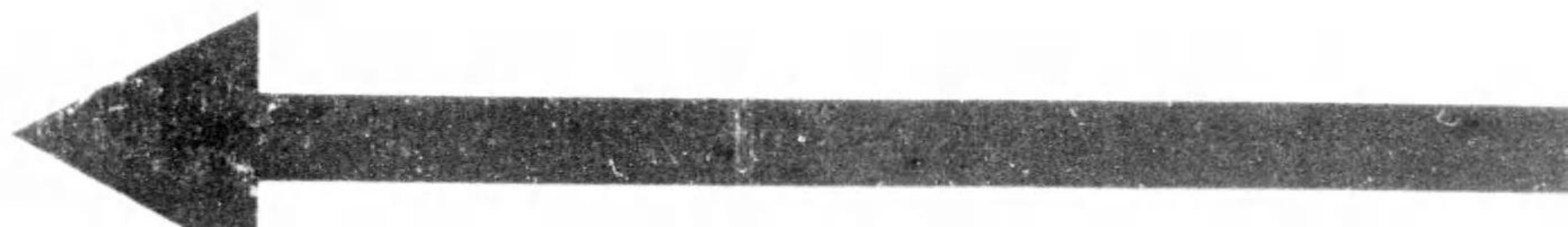


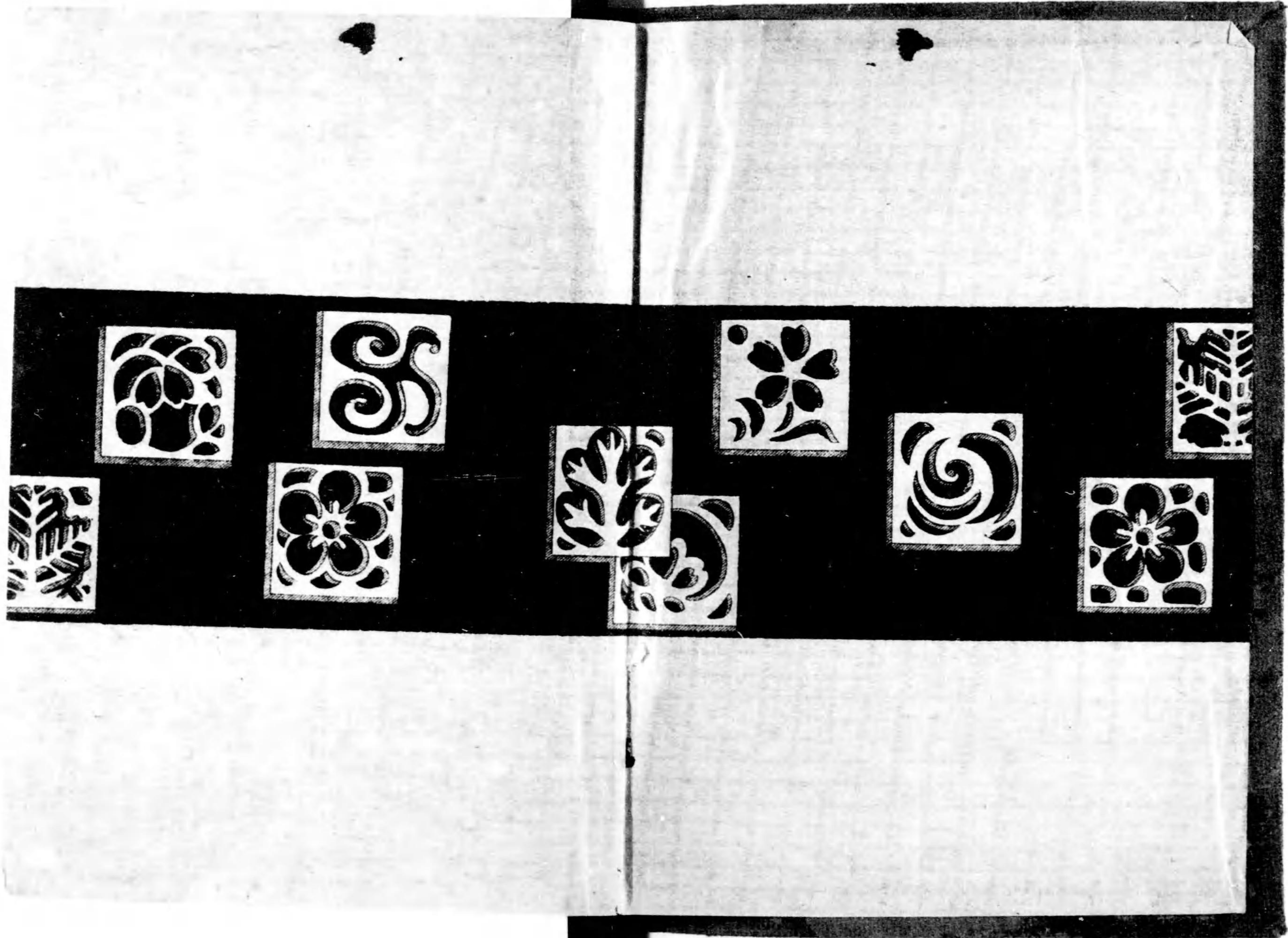
立 竹 川 文 庫
第 九 編
武士道精華
竹内加賀之助



0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

始





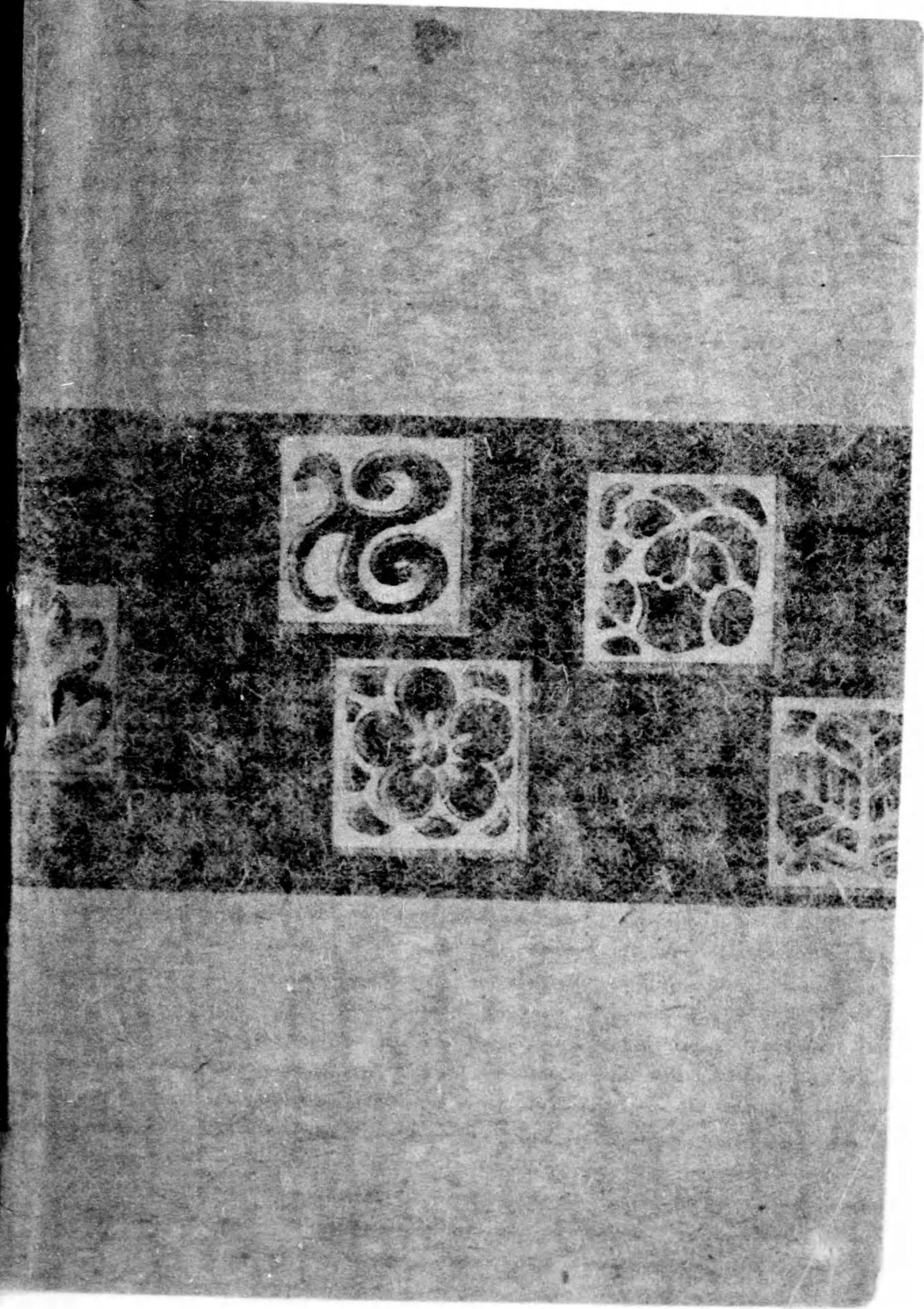
持100
26+



武士道
精華

竹内加賀之助

大正
3. 9. 12
内交





目次

○ 田を鋤のは牛の役ぢや	一
○ 馬鹿やーいッ	六
○ 君子は危ぶきに近寄らずだ	一一
○ 多勢は足手纏ひで御座れば	一九
○ 叔父さん何處から来た	二五
○ 瓜の蔓には茄子は生らぬ	三二
○ 是れから馬鹿は廢にする	三九
○ 昨夜から一通りの人間になつた	四四
○ 敵は雲野風右衛門	五二
○ 叔父さんは馬鹿だな	五八

目次

○己が手傳ふてやる……………六四

○動いちや危ふい……………七〇

○何れくらいに打ませう……………七七

○是れは怪しからん……………八二

○根氣よく土俵を相手に……………九一

○水呑み百姓の忤です……………九六

○蟻が芋虫をひくやうだ……………一〇三

○拙者は嘘は嫌ひぢや……………一〇九

○上々の首尾だ也……………一一六

○オーイ早く来いよ……………一二三

○さア樓家へ案内しろ……………一二九

○左様で御座いますかい……………一三六

○それこそ屈強な一策……………一四三

○鼻紙料に百石遣はす……………一四九

○安藝だから安藝助……………一五四

○強そうな相手も無い……………一六一

○柔道が勝つか腕力が勝つか……………一六六

○生れて以來初めての失敗……………一七三

○拙者の妙案は斯様だ……………一七九

○其役目は拙者だ……………一八四

○拙者の望みは横面三ツ……………一九〇

○拙者は按摩道引で御座るぞ……………一九七

○乃公の骨は大丈夫……………二〇三

○此の按摩の利目だ……………二〇七

○腰拔武士と町人はイヤ〜……………二二四

○燕雀とは何んだ……………二二〇

○今日は客だぞ……………二二六

○何方が勝つたらふ……………二二二

○とゑらいこそをやつた……………二二七

目次終

竹内加賀之助

雪花山人述

○田を鋤のは牛の役ぢや

泥水に咲けども蓮は蓮かな、其蓮の濁りにはわらぬ僻村の水呑百姓の子とし
て生れた身が、武技最も盛な寛永の世に眞揚流柔道の一手と捕縄を以て天下
無敵の名をなした稀世の豪勇、竹内加賀之助の物語や什麼に。

加賀之助は幼名を嘉一郎と云ふて父は豊前國小倉の東方二里を隔てた足立
山の山麓に幽かに浮世を送る嘉藏と云ふ水呑百姓であつた、水呑百姓と云へば
三文の價値も無いが百姓は天下の寶、否、當時こそ百姓となつて居つたれ其素

性を洗つて見れば嘗ては甲信の雄將として武威を關八州に振つた武田信玄の麾下でも一方の旗頭と聞けた山縣三郎兵衛の郎黨中、幾度かの戰場で勇名を轟かした竹内嘉兵衛の一子であつたが、父の嘉兵衛は武田家最後の一戦に討死を遂げ、嘉藏は弱年の身ではあり、母方の縁邊が現今の在所にはるところから母に伴れられて此地に頼つて来て以來、何日か百姓の群に混つて田を鋤き畑を耕す身となつて見ると、劍を取るよりも此方が心易く、其内知己の者から勸められるまゝに家内を迎へて嘉一郎を産んだ。

處が此の嘉一郎は生れて以來至極健全で虫氣一つ起らねば風邪一つひいたことも無かつたが母は産後の惱みから此の世を去る。後は不自由ながら男の手一つで育てられて居る内に骨格がムクムクと太れば力は飽までも強く、五歳六歳のヨチヨチ歩く頃から鞞なんぞを片手に持つて手軽く振り廻すほどだから父の嘉藏は内心大いに驚ろきもし悦びもした。「ホ、ホ、ホ、此奴こそ大きくなれば水

呑百姓を以て甘んじるものではない、必ず我が竹内の家を起す天晴の武者……と愈いよ可愛がるのはよかつたが、其八歳の時、大變な熱病に罹つた以來は骨格の逞しいのは變りはないとは云へ、何うしたと云ふと正氣をガリと失つて正眞正銘の呆氣となつて仕舞つたから嘉藏の失望落膽は一通りぢや無い、是れ迄は「嘉一郎……」と呼べば、「ハイ……」とした返事も此節は何處が風吹くと云ふ調子でケロリとして居るばかりでは無い、口の端には涎の水道を絶えず流し、鼻の穴から唇へかけて二本の青い運河が常に開通に及んで居ると云ふ有様、十歳前後の現今では尋常四年か五年くらいで偶には理屈の一つも云ふ年頃に及んで居つても、途中なんかで、「やア何處へ行くんだい……」なんかと云ふ者があれば、ケロリと其顔を眺めて、「馬鹿やーい……」と云ひ捨てたまゝ、スタスタと行つて仕舞ふと云ふ風であるから前途頗る心細く思はれたのは無理は無さ。

從つて土地の者は嘉一郎の名を云ふものは無く、「彼奴は馬鹿だ」「そらだ、馬鹿息子だ」と云ふやうなことから誰れ云ふとなく遂には、「馬鹿息子……」と云ふのが通り名になつて仕舞つたが、馬鹿は馬鹿でも力は又馬鹿に強い處から時には父嘉藏の手傳をして鋤を引ッ張る、何分にも水呑百姓だから牛なんかは飼つては居ない、そこで田を鋤にも親父の嘉藏はウン／＼云ひながら手鋤と云ふやつで突いて鋤くのを嘉一郎は何處から借り出して来たか牛につける本鋤と云ふやつを片手でチヨイと持つてグシ／＼引ッ張ると苦も無く鋤ける、牛ですらはそれを引くのにエンやらホイで汗だらけになるのに僅か十歳ぐらいの小供は是れだから在所の者等は是れを見て目を丸くして驚ろく、すると嘉一郎は馬鹿ながら夫れが爲め調子に乗つて益々手傳ふ、夫れのみでは無い、親の嘉藏が野良歸りの荷物を菰に入れるとチヨイと提げて持つて歸る、時には此の在所から二里計りもある小倉の城下へ米俵を運ぶのに五斗俵を二俵ぐら

いは兩の肩へチヨイと乗つけてヒヨイ／＼と歩いて行く、其様は恰と米俵が歩いて行くやうだ、其他力仕事でさへあれば云ひ付けもせぬのに見やう見真似で自分から好き好んで何んでもやれば又俵に繩を掛けるのが何う云ふ譯か大層好きと見えて親のするのを手傳ふばかりでは無く在所を通りかゝりに口締をやつて居るのを見付たが最後、ツカ／＼と其側へ行つて手傳ふてやる、然も天性と見えて中々上手なところへ仕事が早い。

さア此んな調子だから根が馬鹿息子と云はれて居る嘉一郎のことだけに是れも忽ち在所の評判になる、「何うも嘉藏とんの馬鹿息子は調法だ、彼んな息子を持つて嘉藏とんも氣の毒だと思つたが今では結局僥倖だない」「そらだ、生中智恵のあるものより百姓には彼の方がよいかも知れぬわい」「眞實だ、田を鋤のは牛の役と思つたが、彼の馬鹿息子が記録を破つた」なんかんと果ては嘉藏を羨やむものもある程。

○馬鹿やーいッ

嘉一郎は親父の手傳をする間には矢ッ張り腕伯もやる、然も其腕伯は又大變だ、在所の小供なんかを相手にせねば小供の方では又馬鹿息子と見て元より友達ともせない處から、結句幸と云ふ風で土堤や畦道を掛廻る、すると田舎のことだから所々に牛を放し飼にしてゐるが嘉一郎の相手は是れだ、と云ふて牛を友達にして遊ぶのでは無い、此奴を相手に腕伯をしやうと云ふのだからたまらない、其側へツカ〜と進んで突、然力を極めてドンと突く、何がさて性來の大力だから是れに突かれては如何な、牡牛でも横さまにドシンと例れる夫れも草原や田の中なぞなればよいが、河岸の土堤に居つては災難、コロ〜と轉げてドブンと水に落ちてむ、落ちぬ奴も夫れ切り逃げ出せば何事も無いが怒つて突つ掛りでもしやうものなれば此方は反つて大悦こび、待つてましたとば

かり力を極めて角でも鼻ッ柱でも横向でも肋でも當つた處勝負でパチリッとなん殴る、性來の大力、自分ながら奥底を試したことが無いと云ふ程の腕ッ節を喰つては如何な牛もたまりッては無い、角なればボキッと折れるだけだが其他の處なれば行燈を拳固で打ち破るやうなものだ、皮は流石に破れぬにしろバリツと音をたて、骨は木ッ葉微塵に打ち挫かれる、是れには牛もモ一懲々なんぞと洒落て居る處ではない、悲鳴をあげて其場へ打ッ斃れる、こんな處を其牛の飼主が見て、「己れ酷いことをしくさる、馬鹿だつて許さぬぞ」と何か得物を持つて馳せ付けやうとすると、嘉一郎は斃れた牛の死骸を兩手で提げて其馳せくる方を目掛けて投げつける、何十貫とも知れぬ死骸も嘉一郎に投げられては五六間かほどビユツと飛んでドシンと落ちる、如何な奴も是れを見ては怒りどころか臆つ玉を抜かれて思はずヒヤツと驚ろく、すると嘉一郎は夫れをニタリと見て、「馬鹿やーい……」フ、ンと鼻先で空囁きながらノサリ〜

助之賀加内竹

い歸つて仕舞ふので、運がに飼主も開いた口すら塞がれず、残念そうに倒れた牛を見て居るばかりである。

と云ふて牛は百姓の寶の一つだから中には親の嘉藏へ理屈の一つでも云ふものがある、嘉一郎は忽ち其家へ押かけて行く、押かけて行つて門のある家なれば門に手をかけてメリ／＼と打ち壊す、門がなければ納屋を引き倒す、若し作男なぞが怒つて飛び出そうものなれば愈いよ大變、柱でも米俵でも手當り次第ビュウ／＼と投げ付ける、此の損害は牛の一疋や二疋に代わられなから、遂には誰あつて理屈を持ち込むものもなく、大事の牛を張り倒されながら泣寝入となつて居る。

そうなるに嘉一郎の方では天下御免の牛殺し同様だ、時には親の嘉藏が見兼ねて意見をした處で何分にも馬鹿息子のことだから馬の耳に風、少しも利目は見ぬなんだが、併し馬鹿ながらも少しは心もゐるのか其張り倒すのも無暗と手を

助之賀加内竹

付けるのではなく、路端に放し飼になつて居る奴にのみ手をつけるらしい處から氣のついた村人は其後化怪にでも路に放さぬことにすると果して嘉一郎の悪戯はバツタリ止んだから、外には格別腕伯をせぬ様子に、「先づ／＼助かつた」と云ふことでホット息をついておる。

村人の悦びに引き代り嘉一郎の方では大層失望の体であつたが、それと云ふて納屋に繋いだものは元より境界内のものには更らに手を付けやうとはせず、只だ怨めしうに其姿を眺めたま、其後はセツセと親の手傳ひをして居ると人の氣と云ふのは妙なもので、又もや噂の種をまく、「オイ、此節は不思議ぢやないか」「何がよ」「何がよぢやない、彼の馬鹿息子さ、馬鹿に似合す神妙に嘉藏とんの手傳をやつて居るぢやないか」「違くない、己ア其お陸で親父からお目玉を貰つたせ」「何うしてだ」「親父め俺れに斯ふぬかすのぢや、貴様のやうに宜い年をして毎日ノラ／＼遊んで居つて何うなる、嘉藏とん處の

息子をチツと見習へ、世間では馬鹿息子だとか何んとか云はれて居るが僅か十歳やそこらで毎日、嘉藏とんの手傳をして能く働いて居るぢやないか、彼れぢや馬鹿息子どころか立派なものぢや、夫れよりも貴様は全体幾歳だと思ふ、少しは年に耻ぢる、と斯ふだ、成程彼んな奴と比べられては一句もないわい」
 なぞと云ふて居ると側から今一人の若者、「オイ、處が彼の馬鹿め一昨日の晩然も夜中頃に道で出逢ふたが何處へ行くのだらふ」「エツ、夜半に……」
 「フム、俺ア彌助をん所で何日もの通り夜更しをして歸り途だ、ヒヨツコリやつて来るものがあるから月明りでヒヨイと見ると紛れもない彼奴よ、彼奴の家の方から出掛て来たのだから彼の時分から何處かへ行つたのだらふが彼の馬鹿者が彼の年で眞逆夜這もすまいし何處へ行つたのだらふ」「オ、そう云へば昨夜已れの逢ふたのもそうだらふ、空は曇つてあつたから確と見ねなんだが、田吾作とん處の畦道でヒヨツクラ出逢つたのが彼奴によく似ては居つたが眞逆

彼奴めは夜更けに出る筈はあるまいし、若しや狸ぢやないかと思つたものだから其ま、歸つたが……」「エツ、われもか、そりや可訝しい、それぢや毎晩出掛て行くで見ねるなア」「フム、何うもそうらしいな、何うだ我れ〜で其行先を突き止めてやらふぢやないか」「ナ、行つた處で何うせ碌な處ではあるまい、剩つさへ萬一怒らしでもして見る、彼の馬鹿力で何んなことをされるか知れたものぢやない」「それもそうだな」テナことから噂をするばかりで誰れわつて突きとめやうとするものもなく、其噂すら一時はバツとたつたま、後は格別意にとめるものもなかつた。

○君子は危きに近寄らずだ

處が此の嘉一郎の居る在所のツイ側に足立山と云ふのがある、格別深山と云ふ程ではないが相當に大きな山で、昔から怪しいものが棲んで居るとか云ふ

やうなことで常には人の一向に登らぬ山であるから木も無暗と生れ繁つて居れば秋口になると松茸などが澤山に出来るが、それすら大膽な百姓などが時折に怖はく採りに登るくらいのこともある。

恰ど其年の秋であつた、或大膽な百姓が其松茸を取らふとあつて此の足立山に登つた、松茸と云ふ奴は湿地に生ゆるものだから、出来るのは山陰なぞに限られたものだが此山は見渡すかぎり樹木が生れ茂つてをるものだから山陰も何も採ふ處なく至る處に夥しく生れて居る、そこで百姓は先づ鄰近き方から採り初めて次第に奥へへと進んだが、フト附近を見ると一抱へもわる松の木や杉の木などが根付のまゝでグツソリ引き抜かれたのが彼方此方に轉がつて居るから驚ろいた、「おやッ、是りや可訝しいぞ、山崩れの爲めに倒れたらしくもなく、と云ふて人間の力では元より斯ふ旨く引き抜ける筈はない、然も其人間は滅多に登らぬ處として見ると尙更らのことだ、はてな、一体何んの爲めに

倒れたのだらふ……」訝りながらよく見ると、轉がつた木は引き抜いた穴から大分隔つて居れば又中には其奴が脇の木へ打つ突つて其木までもへシ折つたものもあるから愈いよ驚ろいた、「やア、之りや人間業ぢやない、たッ、大變だ、迂濶に斯んな處でマゴくして居つては何んな目に遭ふかも知らぬ、……」と常々變な噂のあるだけに松茸をころちやない、折角採つたものまで籠どもに捨て置たま、ドン／＼と逃げ下りると誰れ彼れなしに逢ふ者毎に顔色を變へて、「たッ、大變だ、世の中の噂と云ふものは争はれぬものぢや、足立山に天狗が居ると云ふのは嘘ぢやね、現に一抱へ三抱へもあるやうな松の木さへも根こそぎ引き抜かれて打つつけてある位ぢやから……」と輪をかけて吹いたから忽ち其事は夫れから夫れへ傳はつて、「違ひない、そう云へば己ア夜半時分に足立山の方で大きな音を聞いたことがある」「己れも聞いた、恰を木の打ち合ふやうな激しい音だつたが、矢ッ張り夫れだつたのかなア」「併

し何んの爲めにそんなことをするのだらふ」「さア、そりや何んだらふ、己の考がへるのにはまア天狗様が遊んでござるのぢやな」「エツ天狗さまが……」「そうぢや、劍術の稽古でもして遊んでござるのぢやらふ、人間なれば竹刀とか木太刀とかを使ふ處ぢやが、天狗様だけに竹刀の代りに松の木や杉の木を引ツて拔ツしやるのぢや」「成程……」「だが天狗様の遊び場へ泥足を突ッ込んで無事によく歸つて来たものぢや、中々生命冥加な人ぢや」「エツ、泥足を突ッ込んだら助からんか」「そりや知れたつちやないか、何れ天狗様が遊ばさつしやる處なれば淨い土地に違いはあるまい、其處へ我れ〱百姓の分際で行つて見ろ、恰ど立派なお座敷へ草鞋履で上るやうなものぢやからお怒りになるのは普通通ぢや」「なツ、な〱るほど、夫れもそうかなア」「だが其人は何も山へは残してこなんだたらふが、若し印のあるものを捨て、置いては可悲そうに助かるまい」「エツ、何うして……」「無論のことさ、天狗様は夫れ

を御覽になつて己れ不埒な奴……と云ふので吃度仕返しをしにござらつしやるに相違はあるまい」「フン、それぢや大變だ、其行つたと云ふ奴は隣り村の留公だ、それなれば捨て置ては可愛そうだ俺ア一寸氣をつけてやらふ……」「生物識が知つたか振に云ふのを聞た一人の瓢近者は廢せばよいのに其儘ス々〱と留公の家へ驅け付けた、「オイ留公、お前何んだらふな、山から降りる時には何も残して來なかつたらふな」「残すも残さんも己ア怖かつたものだから生命カラ〱よ、籠は元より煙草入まで置て來た」「エツ……、併し籠には記號を入れて無つたか」「記號はチャーンと山留と立派に書いてあるが夫れが何うした」「ナニ、記號がある……そりや大變だ、オイ留公、氣を付ねばならぬぞ」「ナツ、何がぢや、氣味の悪いことを云ふてくれるな、夫れでなくとも己アピク〱して居るのだから……」「何もお前を脅すのぢやない、お前の爲を思ふから親切に知らしにやつて來たのぢや」「己れの爲めとは……

では何か、己の託號の入れたものを残して置いてあつたら何うなる」「知れたことよ、天狗様のお遊びになる場所へ泥足踏み込んだ、不埒な奴だと云ふのでキツと其儘にはお濟ましにはなるまい、吃度無禮な奴だとお怒りになつて籠の印を御覽になるだらふ、處がお前の方の山留と書いてあつて見る、さては不埒者は山留と云ふ奴に違ひはない、此奴を詮議した上で……」「ちよッ、一寸待つてくれ、俺……俺ア氣が小さいからそんなことを聞いては……」

「そこぢや、聞ずに居つて、不意にギャツと云はされるやうなことがあつては残り惜いだらふから俺ア注意をしてやるのぢや」「そッ、そんな注意は何うでもよい、俺ア何んだか寒氣がして來たわい……」「ビク／＼もので夜着引つ被つて寝て仕舞つたが、親切に云ふた答の注意が反つて神經を惱ましたものと見て夫れから大熱を引起し、「お許し……お許し……」と吐鳴り續けた其翌る日可愛そうにト／＼亡なつて了つた、生理學者の話では、人間の身体に

病の出來ると云ふのは、悉く神經から起るものである、だから神經を惱ますぬ人は一生涯病氣なぞに罹るものではない、神經を惱ますに死ぬのは体内の有機物が自然に分離する結果であるから是れこそ病氣で死ぬのではなく天賦の一生を終るのであるとのことだが是れは眞實かも知れない。

然し其頃の百姓にはそんなことを知りやうな筈はないから山留が大熱病に罹つて、「お許し……」と云ひ續けて狂ひ死に死んだと聞ては一同の者は神經の爲めとは思はぬ、「さては天狗様に殺されたのぢや」「そうだ、天狗様が彼の籠の印を見て、昨夜山留の家へ來られたに相違はない」「天狗様は靈物と云ふが矢つ張油斷は出來ぬわい」「眞實だ、だから俺れは昨日注意をしてやつたのだが……」注意どころか自分が間接に殺したやうなものだ。

さア斯ふなると珍らしいことを吹聴したがるのは人情、此の噂は一村だけでは納まらず隣り村なぞへは其日の内に傳はる、小倉の城下へ出て行つたものは

自分が見て来たやうなことを云ふ、小倉の城下でも夫れを聞いた町人から出入先の邸へ行つて話をする、邸の主人公は城内へ出仕をして同僚同士で互に初耳を誇顔に語る、それがバツと一同の耳へ這入ると血氣に逸る若侍連中の中には、「夫りや、面白い、拙者が退治致してくれやう……」と一時は氣張つて見るもの、さて山留が山へ登つた、天狗様に殺された、イヤ八裂にされたなど尾に鱗をつけて聞いて見れば遠に生命が大事と見えて、「君子は危きに近寄らずだ」などと躊躇をする、一人が躊躇をすればお附合と云ふ譯ではあるまいが總体鋒先が鈍つて、「如何さま御道理、我れくの命は、我れくの物にして我れくの物ではござらん、祿を給はつて居る以上は主君の御爲めにこそ捨つべきものぢや、決して天狗如きに捨てべき生命ではない」などと瘦我慢を張つて旨く逃れる先生もある、此んな連中は平常も此んなことを考へて居るから其場に望んでも拔道は中々旨い、自分から飛び出そうとす

るものはないが城内での噂は次第に高くなつて遂には大守小笠原侯のお耳にも這入る、當家は後年二刀流の元祖宮本武藏と云ふ名人を出した、大守は中々勇しい御氣質である、此んなことを耳にしては、「夫れは怪からん、世の中、天狗などとはあるべき筈はない、何者かの悪戯と思ふが兎もあれ予が領内に於て、然も城下近くに左様な怪しきものあるを打ち捨て置くは他家への聞にも面白からず……」と次席家老の宮本伊織と云ふのに其處置をお計りになられた。

○多勢は足手纏ひで御座れば

宮本伊織と云へば一寸判らぬが、是れこそ二刀流の元祖として名を知られた宮本武藏正名の祖父に當られる老人、剛膽で思慮分別のあることは當家中では随一と呼ばれたほどであるから次席家老とは云へ、小笠原侯には常々非常に信

頼せられて何か問題のあることに必ず先づ此の伊織に御相談になられるのが例であつた、伊織は小笠原侯の思召を聞いて、「御道理なる仰せ、元より埒もなき儀とは存じますれと聊さか存し寄りもござりますれば萬事某しに御一任下されますやう」と言上をするを小笠原侯にはニッコと笑ふてお許しになる。

相手が人を八裂にする天狗と聞きながら事もなげに引き受けやうとする伊織も大膽なれば、「フム、其方なれば間違ひもあるまい、萬事宜きに取計らへ、……」と仰せられたま、何事も聞き訊そうともせられぬ小笠原侯の其大星も一通りの並び大名では及びもつかぬことである。

さて容易ならぬ事件を軽く一口の下に引き受けた宮本伊織は邸へ引き取る和家人を以て招き寄せたのは村田重藏と云ふ人、武藝は一流に秀でたと云ふ程ではないが三十前後の血氣盛りで骨格は逞しく強力な處から同じ家中でも是れに匹敵するものは多くない程、父祖の代から小笠原家に仕へ祿高百二十石を頂戴

する近侍ではあるけれども、剛直な性質が禱して先般主君より御不興を蒙り昨日今謹慎中の身分であるが外ならぬ伊織の招によつて恐るゝ出向ふてきた。

「ハ、ツ、御家老には相變らず御健勝、祝至極に存じます」と敷居越にペタリと平伏したのは身分の相違だけではない、伊織は夫れを軽く受けて、「オ、早速によくも來られた、夫れにては話も出來かねる先づ是れへ……」

「ハ、ツ、恐れ入りまする」「イヤ、決して懸念をせられぬやう、實は先般其方の御謹慎を仰せ付けられし以來、氣の毒に存するものから何んとか致してお許しの頂けるやう計らひ遣はさんと機會を待ち居つたが、此度其方の力次第にて漸やく一つの手段ともなるべき儀が出來致したぞ」「ハ、ツ、某し如きもの、儀に就き、左程までの思召し只だ、辱けなく存じまする、元よりお咎めをお許し頂だけますとござりますれば如何様の儀かは存じませぬ

と不肖ながら身命に代はて致しまする」「オ、勇ましき決心、元より主君に於せられても一時御立腹の餘り殿しき御沙汰を仰せ出されたりとは云へ、既に其方の本心も御承知、と申して今更ら事なくお許しにされることも出来かね居る折柄であれば此度の功を首尾よく遂げたる上は此方より宜なに取成であらふぞ」「ハ、ツ、夫れに就き此度の儀と仰せられますは」「フム、餘の儀ではない、其方も豫て存じ居る足立山に近頃毎夜異形の者現はれるとのこと、下々の噂にては天狗なぞと噂もなきことを申し居るとのことではあれど此方の察する處、或ひは山賊の類かとも思はれる、山賊とても元より大したることはあるまい、就ては其方是れに向ふとあれば三十名の小役人を添はすにより首尾よく退治致すが宜しからふ」「ハ、ツ、某し身に取り此上もなく有難き仰せ身命に代はまして必らず討ち拂ひまするなれども人数の儀は、固く御辭退仕まつりまする」「ナニ、人数は不要とか」「切角の御厚意にはござりますれど

かへ反つて足手纏ひとも相成りますれば某し一名を以て打ち向ひ必らず役目を果たすでござりませう」「フム、足手纏いとあれば強て勤めは致さぬが萬一の儀がわつては相成るまい、若し多勢にて足手纏ひとあれば屈強なるもの、みを選り探つて差添はん」「イヤ、夫れには及びませぬ、一名なりとも差添の人数ござりましては其者の爲めに心を奪はれツイ、不覺を取るものにてござりまするに、より、生半差添のござりまするよりは某し一名にて打ち向ふ方誠に心易く覺はまする」「フム、夫れなれば其方の勝手にて如何やうとも致すが宜しからふ、なれども昨今の噂の如き天狗なぞとは元より噂がなきことではあらんも其様子を聞くに相手は一人二人の如き少数ではあるまいと心得る」「例令何十何百の者がござりませうとも、死を定めて参りますれば少しも恐れることはござりませぬ、が此上御家老への御願、某し萬一不幸に致して其者の爲めに一命を捨るまするやうの儀のござりましたる際、萬一某しに寸功にてもお認め下さ

りますれば祿高の高下は兎も角、悴を以て我が村田家の家名を再興のお取成し願ひ上げまする」其儀は其方より申す迄もない、萬事此方が確かに引受るであらふ」ハ、ツ、有難く存じまする、就ましては是れより早速仕度を致したく、勝手ながら是れにてお暇を給はりたく存じまする」フム、して自体何日頃出掛る存念……」申す迄もございませぬ、明夜を待つ迄もなく今宵直ちに出掛まする」ナニ、今宵とか、夫れは餘りに性急……」斯様の儀は一時も捨て置く譯にはなりかねますれば……」フム、然らば心をして参るやう」畏まりました」

重藏の大膽極まる振舞を伊織は左程までも氣遣はねば重藏は又深く決心する處があつてか別段精しく様子も尋ねず、事もなげに引き受けて立歸る間もなく草鞋脚絆に足固めして我が邸を立ち出で漸やく目ざす足立山の麓へ着いたのは短い秋の日のトツブリ暮れた頃であつた。

○叔父さん何處から来た

さらでも淋しき秋の夜に、搗て、加へて天狗騒ぎの一件から在所では誰れ一人戸外に出て居るものなく家の戸は堅く閉して燈火の光さへ外には洩れぬから其寂しさは一層身に滲みわたるが決死の重藏にはそんなことを庇とも思ふことつちやない、勇氣が頼に加はつて木の間に洩れる月の光を便りに道なき山路を辿りながらツン／＼と上る内に噂の通り根こそぎ引き抜かれた木の所々に轉がつて居るのを見るが、更らに夫れらしいものにも出會さねば怪しい音すら聞くことも出来ぬ、「ホ、ー、さては我が勢ひに恐れたと見ゆる、とれ此邊で一服してやらふ……」一本の轉がつた松の木に腰を掛けてツツと様子を窺つて居ると遙かの方にピユーツ、ピユーツ、ドシンと只ならぬ音、「はてな、風の音でもない様子、さては……」と音する方へ訝かりながら遠がに忍び忍んで歩

みを運び、木立の影からソツと覗いて見ると、月の光りで確と判らぬが、打ち見た處では漸やく十五六歳とも見ゆる一人の少年が長さ六七間もある松の木を両手で引ツ掴んで、「ウーン、ウーン………」と云ひながら五六度振り廻してドシーンと彼方へ投げ付け、更らに一本の木に手をかけて、「やツ………」と力を入れると根元にメリ／＼と音がして横になる、そいつをグツと引ツ掴んで、「エイツ………」と土から引ツて抜き、「ウーン、ウーン………」と云ひながら又もや振り廻してはドシーン………、續いて他の木に手を掛ると云ふ右様で見て居る内に二三本は引き抜かれ、今しも四本目に手をかけて、「やツ………」と引き抜かふとする謙を見かけて重蔵はツカ／＼と立現はれさま。「やア曲者ツ、斯く云ふ拙者は小倉の城内より其方を退治致さん爲めに参つたものであるぞ、さ、速かに正体を現せツ………」と云ひながら大刀の柄に右手をシツカと掛け鯉口寛げてシリ／＼詰め寄らふとすると、彼方の曲者は少し

も驚ろいた様もなくツロリと此方を見て大音一聲、「馬鹿やー………」と吐鳴つたまゝ、平氣の平左で引き抜いた木を、「ウーン、ウーン………」と振り廻して居る。然も其振り廻すのは別段重蔵目がけて打つて掛らふとするのでもなく、今迄と同様五六度振り廻してはドシーンと外方へ投げ捨て、又もや別の木に手を掛けたから重蔵は稍張合抜きの体、「コリヤツ、其方は拙者の参つたのに氣がつかぬか、其方は自体何者ぢや………」と再び聲をかけて見たが一向に見向もせぬ處から今は堪わかねてかサツと其側へ馳せ寄ると見る間に右の腕をグイツと引ツ捉へ、「コリヤツ………」と睨めつけた、處が相手は怒つて手出しもしそんな風もなくニタリと笑つて、「叔父さん、お前は何處から来た」「なにツ………」張合の抜けた重蔵は今も呆れざるを得ない、手持無沙汰でホカンとして居ると重ねて云ふ、「俺れを武士にしてくれんか」「フム、貴様は自体何

「ぢや」 「俺れか、俺れはお父さんの子の嘉アちやんだ」 「お父さんの子の母ちやん……コリヤツ、馬鹿なことを申すな、母ちやんは母ちやんだ、貴様は人間か何者か」 「人間とは何ぢや」 「己れ武士を愚弄致すか、正体を現はせツ」 「己アそんなことは知らん、八釜しく云ふと打つてやるぞ」 「愈いよ怪しからん奴ツ……、最早勘辨相成らん……」

張合の抜けた重藏は呆れて更らに怒つた、大刀を抜くまでもなく腕に覺の柔道の一手を以てドシンと投げて倒れる上から賺さずグツと乗りかゝるを、下から、「ウーン……」と刎ね返して、「叔父さん、お前は牛より強いな、一つ相撲を取らふ」 「己れツ……」 相手が両手を廣げて組んで掛らふとするを重藏は、一何をツ……」と一聲、再び手先を掴んで肩に掛けドシンと取つて投げる間もなく大刀スラリと引き抜きさすまバリツ……と切り下げやうとする後から、「やア待て重藏……」と云ふ聲に、「エ、ツ……」 思は

ず振り向く處へノソリくと現はれたのは思ひもよらぬ宮本伊織だから驚ろいた、「お、ツ、貴郎は御家老……」 「フム、まづ待て、彼れなる者、妖怪變怪の類にてはあるまじき様子、仔細はあらん早まるな」 「ハツ……」 と思はず頭を下げたが遽かに思ひ返したか今度は伊織を目がけて、「己れツ……と云ひさまサツと斬つてかゝるを此方は早くも身を躲し、「コリヤツ」何と致す、此方は宮本伊織であるぞ、血迷ふたか」 「黙れツ、其方如きに程らかされる此方と思ふかツ……」 取り直した大刀を今度は横に拂ふを身を飛び退つて「コリヤツ、此方は妖怪變化の類ひにはあらず、其方の安否を氣遣ふの餘り態々是れに參つたのを知らぬか、先づ鎮まれツ……」 と云ふ聲終らぬ内、重藏の手許へ躍り込みさま持つたる鐵扇で利腕パチリツと打ツ叩き、「アツ……と萎む處を賺さず足をわけてドンと太股を蹴つたから堪らない、伊織は家老とは云へ城中切つての利者、重藏は家中でも相當に出来るとは云へ伊織には敵す

ることが出来ぬ、思はずヨロ／＼と前に倒る處を襟上ムンツと引つ摺んだ、
「重藏、此方である、何うちや判つたか」「ぎッ、残念だッ……」と重藏は
齒切をしながら口惜がつて居る、彼方の方では格別逃げ出す様子もなく、カラ
／＼と笑つて、「馬鹿やー……」

伊織は其方に目をつけて、「コリヤ／＼、其方は自体何れから参つた」「俺
れか、俺れは此の下の在所だ」「フム、在所の者とあれば昨今の噂を聞かぬこ
とはあるまい、見れば年端もゆかぬ様子、自体何んの爲めに態々是れに参つた
「ウン俺れか、俺れは武士になりたい」「ホ、ー、武士になりたい……夫れ
に致せ態々是れに参るに及ぶまい、殊に昨今は此の山中に怪しき噂さへあるを
聞ぬことはあるまいか其方は怖くないか」「怪しき噂……、ハ、ハ、ハ、天狗
か、天狗なれば俺だ」「なにッ……」「在所の奴は馬鹿だから俺れのことを
天狗だとぬかしくさるのちや、けれども俺れは天狗ぢやないぞ……」「フー

△……………」
伊織は訝かしげに其顔をツツと睨んで、「ホ、ー、すれば其方は武士になり
たいとか」「ウン、俺れの親父カズんは信州の武田と云ふ豪い大將の家來であ
つたのだから俺れも豪い大將の家來になるつもりで毎晩此處へ稽古にくるのぢ
や」「ナニ、武田家の家臣……フム、さてはいよく仔細ありげに思はれる
望みとあれば武士に致し遣はさんでもない、兎もわれ其方の家まで案内を致せ
「フン、案内をしてはやるが今頃は寝て居るぞ、明日の朝まで待つてくれ」
「待てと云へば待たぬでもないが、一日遅れ、ば一日の損ぢや、如何あらふと
も案内を致せ」「ウン、夫れなれば伴つてやるが其叔父さんを助けてやれ、可
愛そうちや」「イヤ、よく申した、コレ／＼重藏、乃公を判らんか、宮本伊織
ぢや、本日其方に此處へ参るやふ申し付けた伊織であるぞ、コレ／＼可内、重
藏は何んとか致して居るやうちや、彼處に谷があるやうちやから、一杯の水を

遣はせと云ふ聲に後に従がふた一人の下僕は、「ハ、ッ……」と谷の方に走り去らふとするのを重藏は、「エ、ッ、さては貴郎は眞實の御家老にござりませしたか」「ホ、ー、小倉の城内に宮本伊織は二人となき筈……」「でッ、御家老、場所が場所にてござりますれば前刻來の無禮平にお許しを……」「ハ、ッ、氣がついたか、夫れなれば頂上……」

○瓜の蔓には茄子は生らぬぞ

其少年と云ふのは云ふ迄もない嘉一郎であつたのである、嘉一郎は伊織と重藏の話を側で聞いて居つたが言葉の切れるのを待つてニタリと笑い、「叔父さんお前たちは此處へ何をしに來たのか、松茸を採りに來たのなら此の上の方にゐるぞ」「ホ、ー、松茸などは別に入用はない、兎もあれ是れより其方の家へ案内を致せ」「ウン、それなれば件つてやらふ……」と塵打拂ふて先に立つ

と兩名は是れに續いて山を下り漸やく嘉一郎の家の表まで來たのはまだ夜明に間のある頃であつた。

「叔父さん、此處で待つて居つてくれ、俺アお父さんを一寸起すから」「お、如何にも待つて居るであらふ」「よし、直に開けるぞ……」と云ひ捨て、ブイと家の横手へ廻つた嘉一郎は木の幹をスラ／＼と攀ち上つてヒラリと扉を飛び越え、裏口からソツと這入つて父の様子を見ると、晝の疲労の爲めか破れ行燈の光りに照らされながら前後も知らずに寝て居る。

「お父さん、オイお父さん一寸起してくれ……」二度三度云ふ内にフト目を覺した嘉藏は訝かし氣に嘉一郎の顔を眺め、「オ、お前は何をして居る、見れば着物も着て居るが何うしたのぢや、何故早く寝ん」「お父さま、何うかお目をお覺し下さいませ、私しより改ためて申し上げることがございます」「ナニツや……ア、お前は夫れだけのことを云へるか……」「恐れ入ります、

つね々、在所の者より馬鹿息子などと申され居りましたは私に少しく考がへがござりましてのこと。夫れに就き長々と御心配をお掛け申しましたる罪何卒お許し下されませうやう」「エ、ツ……………」と親の嘉藏は思はず飛び起ると其前に平伏した嘉一郎は、「切角お寝みの處をお起し申し上げて誠に相済みませぬとお父さまに一寸お逢ひ致したいと申される御人がござりますれば……………」「ナニ、乃公に……………」今頃自体誰れぢや、何者ぢや」「決して御心配には及ばぬ、實は小倉御城内のお武家にございますれば……………」「なツ、なツ、何ツ、御城内の方が今頃……………」又夫れをお前は何んとして知つて居る」「委しいことは後にてゆる／＼申し上げます、兎もあれ餘りお待たせ申すもお氣の毒にござりますから私し一寸お開け申しまする」「フム、……………」

餘りのことに嘉藏は呆れて居る隙にスタ／＼と小走に表の方へ駆け付けた嘉一郎は入口の戸をガラリと開けて、「お武士様、お待せ致しました、さア何う

ぞお這入り下さいますやう」「フム、然らば許せ……………」伊織は先になつて兩名はズイと這入ると間狭の家だから忽ち嘉藏の目につく、「やツ、貴君方は……………」「オ、其方は當家の主人かと、夜中にトンダ邪魔を致す、此方は小笠原家の宮本伊織と申す者ぢや、決して怪しきものではない、懸念を致すな」「ゲエーツ……………」そツ、それでは御家老さまでございますか、是れは／＼トンダ失禮、さ、先づ是れお通り下さりませ、そツ、何うもお見かけの通り障し……………」「アイヤ／＼決して構はれぬやう、實は餘の儀ではない、卒爾ながら是れなる小供は其方の倅とか……………」「さツ、左様でございますか何か御無禮を……………」「イヤ／＼、左様の儀ではない、其方には宜い小供を持たれたの……………」「ヘーン……………」「今宵計らず手並を見受けたが實以て非凡なる力量、斯様なる田舎で朽ち果てさすは惜きものぢや、夫れに就き其方に相談致したきは餘の儀ではない、何うちや鐵を捨てさせ劍を持たしては……………」「めツ

滅相な、瓜の蔓には茄子は生りませぬ、蛙の子は矢ッ張り蛙で終りませぬば、
 ……「如何さま一應道理なる申し條ではあれど、土の中にも黄金がある、
 巖の中にも球はある、黄金も土中に捨ておいては天下の寶ともなるまい、球も
 巖の中にあつては光も出ぬものぢや、子を見ることが親に如ずとか其方は此の土
 の中の黄金、巖の中の名玉を認めぬことはあるまい」「とッ、何う仕つりま
 して黄金とてころではございませぬ、球なぞとは勿体至極もなきこと、セメテ土
 か巖くらいなればまだしも、此の界限では馬鹿息子だの馬鹿者なぞと申されて
 居ります塵芥にも劣つたるものにございませぬ」「ハ、ハ、ハ、ハ、大賢は愚に
 近く大勇は痴に似たりと申すこともある馬鹿息子とは一層床しふ思ふぞ……
 と云ひながらシロリと附近を見廻すと其片隅には百姓家に似合ぬ一櫃の鐵櫃
 と長押には一振の槍の掛けられてある、伊織は夫れを見てニツコリ笑み、「時
 に卒爾にはあれど其方の名は何んど云ふ、又是れなる小供は何んど呼ぶとか、

……「恐れ入ります、お名乗を致しますやうなものではございませぬか
 わたしは常村の水香百姓嘉藏と申しますもの、又忝は嘉一郎と申します」
 「ホ、一、嘉藏どのとか、見受る處腹からの百姓ではなき様子、昔は定めて
 由緒あらん、殊に彼れに掛けたる槍は拵へと云ひ恰好と云ひ只人の持つべきも
 のではなき品、先づ包まず語つて聞されい」「恐れ入ります、何として私が
 左様な……」「イヤ、誠を申したりとて決して悪ふは致さぬ、兎もあれ
 包まず語られるやう」「ハ、ッ、仰によりまして申し上げませぬも無禮にござり
 ますれば誠に烏呼なる儀ではござりませぬ……」「フム……」「お話を
 申し上げます前に先づ是れを御覽下されませぬやう」
 フツと座を立つて長押の槍を取り下し、恭々に伊織の前へ持参するが早
 いか賺を覗みてバ、ン………韜を飛ばすと見る間に、「妖怪覺悟ッ」とサツと
 鋭とく突きかゝるを伊織は早くも身を躲し、「コレ、何んとする、聊爾ある

まいぞ……」と手にした扇子をキツと構ゆる側から重藏は又刀の鯉口寛ス
 げて今にも嘉藏を目がけて斬つてかゝらん有様、と見た嘉一郎は大變な驚ろき
 「お父さま……」云ふ間もなく槍持手先に飛びついて、「お父さま待つて、
 ……」
 「コリヤ放せツ、其方は何んにも存せんのぢや、是りや放さんかつ、
 ……」と振り放そうとするが嘉一郎は松の大木でさへか引き抜かふとする大
 力だから父ながらも嘉藏如きが如何に氣張た處でペリペリ動きもするこつちや
 ない、すると此方では宮本伊織はニツコと笑んで、「コリヤ〜嘉藏とやら、
 思ひ違ひを致すな、此方は紛れもなき宮本伊織であるぞ、又是れなるは家中の
 村田重藏と申すものであるが何を以て妖怪などと申す、夫れには定めて仔細は
 あらん……」
 「黙れ〜」ツ、御家老ともある御大身がお供も召されず態
 々之れにお出向になられる筈はなく、よしお出向になると致しても斯かる夜中
 殊に昨今怪しき風説のある折柄何んとして……」
 「ハハハハハ、さては其方

は何事も存せんとか……」
 「ナニ、存せんとは……」
 「ハツ〜〜〜」
 伊織は笑ひながら嘉一郎の顔をツロリと見た。

○是れから馬鹿は廢にする

伊織の様に嘉藏は益々怒つて持つたる槍をバツと嘉一郎の手に殘し伊織目が
 けて無手のまゝ飛び掛らふとするを、「あれツ……」と一聲嘉一郎は其後
 からムンツと抱へ、「お父様 此のお武士は乃公をば武士にして下さるのぢや
 そんなことせずと……」
 「馬鹿ツ、お前は何も知るまいが近頃足立山に天狗
 が出るなぞとの噂がある、察する處此奴等は其正体かも知れぬから此の乃公は
 退治てやるのぢや、己れ妖怪、何れは出向ふて退治てくれん存念だつたを貴様
 の方からよくもうせた、今は斯く水呑百姓とはなつて居れ、嘗ては武田家にさ
 るものありと知られたる山縣三郎兵衛の郎黨竹内嘉兵衛の一子嘉藏と知られ

ぬかつ、……コレ、嘉一郎、何故放さぬ、ざつ、残念ぢや……」
 口惜そうに身体を藻掻を宮本伊織はボンと小膝を叩いて、「ボ、さては
 其許には左様なる人であつたとか、ハ、ハ、ハ、竹内氏とやら先づ心を落付ら
 れよ、足立山の怪しもの、正体、其許には存じられぬとか」「云ふなツ、そ
 う云ふ貴様こそ……」「ハツ、ハツ、ハツ、燈臺元暗しとは其許のこと、
 其正体こそ夫れなる嘉一郎なりと存せんか」「なにツ……」「此方元より
 夜中是れに出掛ける要はなければ、昨日主君よりの仰を受け、此方の眼鏡を以て
 是れなる重藏に退治の事を命じたりとは云へ、心許なく思ふにより寤かに
 後をつけ参つたのである」「エ、ハツ……」「然るに世に噂する天狗とやらを
 引ッ捕へ見れば其主こそ之れなる嘉一郎であるが其許は同じ一ツ家に住居して
 夫れを知らぬとは何たる、迂闊……」「エ、ハツ、天狗の正体が……」「云ふ
 聲終らぬ内に嘉一郎はニタリと笑つて、「お父さま、私は毎晩足立山へ行つて

居るのを御存じでございませんか」「ナニ、お前が……フーム、そりや初耳ぢ
 や、夜々中彼の淋しい處へ全体何をしにゆく……」「ナニニ、お父さんが何
 日も云ふて居る通り武士になつて家名とやらを立たいから腕を強くしに行くん
 ぢや」「夫れでは乃公の時々躡す愚痴を判つて居つて……」「夫れくらい
 のことは判つてるよ、馬鹿息子とか何とか云はれて居るのでお父さんの御心配も
 知つてるが、馬鹿ぢや無つたなれば一生百姓で暮さねばならんから……」
 「ナニツ……」「田吾作どころの豆三や掠兵衛どころの作吉なぞと遊んで居
 つては武士になることは六かしからふ、だから誰れも相手にせぬやう馬鹿にな
 つて居つたんぢや」「エ、ハツ、お前がそんな分別があつたか、やれば此お父
 さんが恥かしいぞ」「ナニニ、お父さんに知られるくらいなれば他の奴にも知
 られるだらふから寢て居る間も馬鹿になつて居つたよ、けれども此の叔父さん
 が愈いよ武士にしてやると云ふから之れから馬鹿は廢めにするぞ」「フーム、

さては天狗との噂もお前であつたか、如何に晝の疲勞が激しいとは云へ、毎夜出てゆくを知らずに寝入り居つたとは乃公も餘程年を老つた……が夫れに致せ御兩名は……」「ホ、ホ、前刻申したる通り此方は宮本伊織、又是れなるは主君の近侍村田重藏と申すぞ」「ハ、ツ、前刻來存せぬこと、は申せ重々の無禮、平にお許し下さりますやう」「アイヤ、怪しき風説のある折柄、時ならぬ時刻に参つたる此方等兩名であれば不審に思ふは道理至極、決して咎めは致さぬぞ」「ハ、ツ、御寛大なるお言葉、何とも申し上げやうもございませぬ」「就ては竹内氏とやら其許に於ても夙に竹内家の再興を望まれ、又是なる嘉一郎に於ても自から夫れに志すとあれば幸ひのこと、何うちや此の嘉一郎を此方に預けくれまいか、其思慮骨格を見込んで所望を致す、元より此方へ引取るに於ては行末は天晴家名を擧るものと致し遣はすであらふぞ」「ハ、ツ、如何に願ふとも夢にも及ばざる御情、竹内嘉藏……否、水吞百姓、お

言葉に甘へ一命に代わて宜敷お願ひ仕つります、就きましては彼れなる鑑是れなる槍は某の主君より拜領の品にござりますれば水吞百姓を以て朽ち果まする某しには要なき品、悴生長の節まで御手許にお預り置のほど是又願ひ上まする」「オ、其儀も心得た、然らば夜の明るを待て嘉一郎を城下へ召し伴れ参るぞ」「有難ふ存じまする」
喜こびの色を満面に浮べた嘉藏は其場へヘタリと平伏して厚く禮を述べ終つて嘉藏がポカンと持つて居る槍を静かに受取つたと見る間に穂先をグツサと腹に押し込んだから、一郎は元より伊織、重藏の兩名も驚ろいた、「お父さま……」「竹内氏、何んと致される……」「嘉藏殿お氣が狂はれたか……三方から介抱しやうとするを堅く押し止めた嘉藏は苦痛を忍んで、「御ツ、御家老様……如何に心得違ひとは申せ、御姓名を承はりながらお向申しましたる此の穂先をお申し譯の爲めに斯くの次第にござりまする」「是れは何んとし

て逸まつたることを致された、其儀なれば此方に於て何等心と致しては居らぬと申し聞けたではござらんか」「ハ、ツ、夫れのみならず悴の一身定まりましたる上は最早此世に要なき身体にござりまする、本来ならば主家滅亡の際に捨つべき筈を今日までオス〜と生き長らへましたる某しにござりますれば今は惜からざる一命、御大身の御前にて果しまするはセメテもの響と心得まする、只だ此上のお願ひ、悴嘉一郎の行末、何分にも宜しくお願ひ仕まつりまする」「フム、其儀は懸念無用、宮本伊織確と引き受けたぞ」「ハ、ツ……」

○昨日から一通りの人間になつた

伊織の考がへでは夜の明けけるのを待つて嘉一郎を引き付け城下に歸る筈でわつたが嘉蔵の身に意外な出来事があつた爲めに夫れもなりかねる處から後の始末を嘉一郎に詳細と申し聞け重職を供に小倉の城下へ立歸ると早速小笠原侯

へ委細を言上に及ぶ、小笠原侯に於てはツク〜とお聞き取りになつて見ると嘉一郎の所作は、一時世間を騒がしたとは云ふもの、別段悪意を以て行なつたと云ふのではなく、騒いだのは畢竟在所の者等が自分勝手にやつたことだから嘉一郎を咎むべき筋はない、尤も足立山の樹木を勝手氣儘に引き抜いたのは現今なれば官林何んとかと云ふ罪名もつくだらうが其頃にはそんなことは無つた、殊に嘉一郎は弱年のこと、剩さへ弱年に似合ず非凡の力量あつて體ては武士になりたいと云ふ思望を聞かれては常々武道を好まれる御氣質だけに反つて伊織の計らひを喜ばれ、「此後は目を掛けて遣はせ」と云ふやうなことで上々の首尾、それから一時謹慎を仰せ付けられてあつた村田重職も是れを機會に赦免され、元々通りに出仕と云ふことになつた。

一方嘉一郎の方では其翌朝になると相變らず馬鹿者になつて在所中を、ワア泣きながら廻つたから村の人々は驚ろいた、「おやツ、何うしたのだらふ

馬鹿息子め泣いてけつかるせ」「ホー、是りや妙だ、彼奴め滅多なことに泣く奴ぢやないが何うしたのだらふ」テナことから其諺を尋ねやうとするが今日ばかりは例の、「馬鹿やーい……」も吐鳴らす益々大聲で泣き叫ぶので、「是りや可訝しい、若しや嘉藏さんの身の上は何か變つたことがあつたのぢやあるまいか」と註かりながら其家へ駆け付けて見ると嘉藏は血だらけになつて倒れて居るから、「やア是りや大變だツ……」と忽ち村の誰れ彼れに告げ知らす、すると在所の人達は親切なものだ、都會なぞであると隣に葬式があつても此方では酒でも飲んで騒ぎまくると云ふやうな人は珍らしくないが在所ではそんなことはない、殊に一人の息子は馬鹿だといふので、「嘉藏さんも氣の毒ぢやそうぢや〜、誰れに殺されたのかは知らんが息子は彼れだから薩ッ張り判らぬ」「フン、其下手人も下手人だが、死骸を彼の儘に捨て、おいては馬鹿息子一人ぢや何うすることも出来まいからセメテ仕上の濟むまではチヤ

ーンとしてやりませう」「そうぢや〜、平常の好誼もあるから捨て、おく譯にはなるまい、やれば南無阿彌陀佛……」テナことから誰れも彼れもソロソロと詰めかける、嘉一郎は村中を廻つてヒョッコリ歸つた頃には廣くもあらぬ家の内は在所の人で一杯となつて、嘉藏の死骸はチャーンと棺桶に納められてゐると云ふ仔末、夫れから引續いて坊さんの回向、葬式萬端を初め其他一切のことは一同の人々等が寄つて群つて濟ましてくれる、一同の手前では馬鹿と云ふことになつて居るから口へ出しては流石に禮も云はぬが心の内で深く悦こんだ嘉一郎は四十九日の間は佛前で泣き明し、さて五十日の朝になると鐵櫃を背に負ひ、遺物の槍を手に突いて手製の草鞋で足を固めテク〜と名主の家へ出かけると折柄掃除中の下人はフト夫れを見て、「やツ、馬鹿息子ぢやないか、オイ、一寸見い、馬鹿息子め、何を思つたか芝居の眞似をしてるそ」「エツ、ホ、一、是りや面白い、おやツ、ニタ〜氣味の悪い笑い様をして居

るぢやないか、彼奴氣が違つたのぢやあるまいか」「フーム、違くない、併し馬鹿が氣を違ふと云へば大分御念が入つてゐるなア」「だが嘉藏とんが不意な死にやうをしたものだから馬鹿ながらも氣が違つたと思へば氣の毒だな」「眞實だ、おやツ、此方へやつて来たぞ、彼奴馬鹿力が無茶苦茶に強いから氣を付けるよ」「そうだ、其上氣遣ひ力でも出されては堪つたものぢやないからなア」などと附近構はず大聲で吐鳴り散して居ると嘉一郎は其側へ寄つて何日に似氣ない町重に頭を下げ、言葉さへも歴然と、「是れは太平とんに悟助とん、お早ふでさいます」とやつたから兩人は顔を見合せて、「おやツ……」と驚ろいておるを此方は言葉をついで、「私も是れ迄は皆さんに御迷惑を掛けました、亡なつたお父さんのお蔭で昨夜から一通りの人間になりましたから御安心下さいませ」「エツ、一通りの人間に……そツ、そいつア妙だ、それぢや是れから馬ツ……ぢやない、立派な嘉一郎とんのぢやない」「左様でございます

處でお父さんから名主さまへお傳へをするやうと申されましたことがございまして一寸名主さまにお目に掛りたふでさいます」「何んだ、旦那様に逢いたい……オイ、夫りやお前本氣かい」「無論ですだが」「本氣にしては芝居ぢやあるまいしそんな鏡櫃や槍なんかを持つて居るのは可笑しいぢやないか、旦那様は今の先お目覺の處だが一体何んの用だ」「夫れはお目にかゝらぬと云ふことは出来ません」「そツ、夫りや切角だが不可ねへ、旦那様は今朝からお忙しいから……」「ナニ、一寸話をすればよいのです、夫れども何うしてもお取次をして下さいませんか」「まツ、まツ、一寸待つてくれ、そんな目付で睨まれてはたまつたものぢやない、仕方がないから取次ではやるがお逢ひになるか何うか判らんぞ」「夫りや仕方はございません、ですが此の在所の爲めになることですから是れだけはお傳へ下さい、それでもお逢ひ下さらねば私に考がへがございます」「まツ、又だ、大体お前の目付は何うも虫が好

かぬわい、兎も角も待つておれ……」

一人の下人はスタ／＼と走り込んで折柄裏庭をブラついて居る名主の前へ飛んで行つた、「だッ、旦那様 大變でございます」

「何んだ太平、朝ッばらから騒々しい」「へエ、實はその……参りましたので」「参つた……誰れが参つたのぢや」「その……馬鹿が人間になつて氣違ひで……」「コレ、其方の申すことは一向判らんが馬鹿が何うしたと云ふのぢや」「へエ、その鎧櫃と槍をば引ッ擔けまして……」「何うもお前の云ふことは判らぬ鎧櫃と槍が何うしたと云ふのぢや」「それがその、人間になつた馬鹿……」「ハ、ハ、ハ、お前は少しく逆上て居るやうやな」「めッ、滅相な、逆上して居るのは私ぢやでございます、其人間に成つた馬鹿で……」「さ、其人間になつた馬鹿とは何んぢや……」

丸ッ切り云ふことは判らぬが、一村の名主でもしやうと云ふ程の人だから多

少の思慮がある、下人の云ふことを聞いて誇かりながらも、「馬鹿と云へば嘉一郎のことではあるまいか、嘉一郎が金子でも要ると云ふやうなことで、若しや鐘と槍を持つて来たのぢやあるまいか、此の村で鎧櫃や槍のあるのは嘉一郎の家の外にはない筈だから……」と斯んなことをフト氣付たから、「ホ、ホ、それぢや若しや嘉一郎でも参つたのではないか」「さッ、左様で……然も昨夜から人間になつたそうでございます」「ホ、ホ、人間は元から人間ぢやないか、まアよい、是れへ通してやりなさい」「へエ、だッ、大丈夫でございますが、少々變テコでございます」「何んでも構はん、昨日は嘉藏の四十九日だつたから夫れに就て馬鹿ながらも何か用事があるのぢやらふ、乃公も一村の束をする名主ぢや、在所の者が用事があつて来たのを逢はずに歸す譯にはゆかぬから」「ですが相手が……」「ま、何んでも宜しい、是れへ通しなさい」「ハ、ハ……」

敵は雲野風右衛門

嘉一郎は太平の案内で裏庭へ通つて見ると名主は椽側に腰を打ち掛けて待つて居る。そこで手にした槍を傍の軒に立てかけ、背に負ふた鐘櫃をソツと軒石の上に下してツカ／＼と其前へ進み、跪いて、「名主様、お早ふございませ」と手を突いたから名主は意外の面地、「オ、嘉一郎……」と一言云ふたま、口をアングリさせて居る。「名主様、私が斯様に言を申しますと定めて御不審がございませうが、是れも亡き父のお蔭でございませう」「ナニ、嘉蔵さんのお蔭とか……」「ハイ、昨晚の夢に父が現はれまして漸やく一通りの人間に直してくれました」「フーム、夫れは何にもせよ結構ぢや、併し見受る所鏡櫃に槍を持つてゐるやうぢやが夫れは何んとする考がへぢやな、若しか金子でも入用だから夫れを抵當にするとも云ふのかい」「いや、お金でござ

いますれば別段差當り不自由は致しませんが是れから敵討に参るつもりでございませう」「エツ、敵討……」「ハイ、其敵は是れも昨晚父から教へてくれました夫れに就て實は名主様へ御相談に参つたのでございませう……」「ホ、ー、嘉蔵さんの敵が知れたか、夫れは結構ぢや、處で敵は何者ぢや、眞逆土地の者ではあるまい」「無論土地の者ではございませぬ、名前は雲野風右衛門と申しまして……」「コレ、一寸待ちなさい何んと云ふ名だと……」「ハイ、雲野風右衛門と申されました」「雲野風右衛門……ホ、ー、化ツ体な名ぢやな、矢ッ張り武士か」「左様でございませう」「フーム、武士とあれば如何に方自慢のお前でも中々容易に討ち取れぬぞ、して其武士は小倉の御家中か何うぢや」「夫れは判りませんが、私は兎も角も是れから小倉へ出掛まして都合によれば敵は何處に居りませうと探ねまして討取る筈でございませぬ、就ましては父から申されたこともあり、且は長々御厄介になりましてお禮やらお暇

乞に参りました」「エッ、フム、イヤ中々其心掛けは感心ぢや、氣をつけて立派に敵を取つて歸つてくれ、是れまでは馬鹿だとか何んとか云はれたお前がよくも夫れはどになつてくれた、乃公の村から敵討をするものを出したと云へば他村へ聞へて乃公の顔もよい、まて〜聊かちやが乃公の心として饒別を進せよう」「イヤ、一寸お待ち下さいませ。夫れよりも父から申し付られたことを先づお話致しまする」「フン〜、それもわつたな、嘉藏どんが何んと言ふた」「ハイ、私が出立を致しますと彼の家は差當り空くことになりませから是れまで村の方にいろ〜と御厄介になつたお禮と申しては失禮ですが兎も角も諸道具萬端を添て名主様に進上するやう、又是れは萬一の用意に残してあつた金子ですが是れも村の方一同へ進じるやう名主様にお渡しをしると斯様でございます」と云ひながら懷中から一包の金子を取り出したから名主はいよ〜面喰つた。

「コレ〜、夫れは不可ん、如何にも其志は村の衆に代つて乃公から禮を云ふて置くが、お前も尾首よく望みを遂げて歸つたなれば忽ち住まねばならぬ家ぢや、又小倉の御城下で旨く望みが遂げられたなれば兎に角、今お前の話しのやうに行先を探す爲めに萬一旅にでも乗り出すとなつて見れば第一に入用なは路銀ぢや、だから悪いことは云はぬ、夫れだけ聞けば此金は乃公の方へ受けたと同様ぢやから持つて行くやう、又家の方はお前の歸るまで乃公が確と預かつて置いて進せる」「其お言葉は嬉しふでございますが夫れでは私がお父さまへ不孝になります、お父さまの教へに背いては草葉の蔭から子とは思はぬぞ〜と嚴しく申されましたから只今申し上りましたことだけは何うしてもお聞き頂かねばなりません」「さ、其ことは乃公も嬉ふは思ふが、今云ふて聞いた通りぢやから此方へ貰つたも同様、決してお前を不孝な子にはさ、ぬ、兎も角も是れを持つて行つせ」「そりやなりませぬ、假令何うあらふともお父さまの云ひ

付は脊くことはなりませんから……」何うもお前は固意地ぢやな、はてさて……オ、それでは斯ふしやふ、如何にもお前の今云ふた通り確かに乃公の方へ貰つて置くぞ」フン、夫れ聞て安心ぢや、左様なれば名主様、是れから行つて参ります……」アコレコレ一寸待て、何うも氣の早い奴だ、乃公の云ふことがまだあるぞ」エツ、何んぞ用事か」フン、外ぢやない、乃公も一村の名主として見れば、村の衆の親のやうなものぢや、處で親が子の旅へ出立をするのに知らぬ顔も出来ぬから是れを餞別として進めることゝする、な、是れなればお前も快よく受け取つてくれるぢやらふ」

名主は上分別と云はぬばかりに差出すのを嘉一郎は忽ち大喝一聲、「是れは名主様にやつたものぢやない、村の衆一同にやつたものぢや、夫れを名主様が勝手にすることがあるものか」「やッ、違ひない、是れは乃公が悪かつた、待て……」名主は手文庫から一兩の金子を取り出して紙に包み、「夫れ

では之れを乃公の心として受けてくれ」と差出すを嘉一郎はニタリと笑んで、「切角のお心、有難く頂きます」と受け納め 鎧櫃を脊に槍を手に持つて早々立ち去つたが後見送つた名主は嘉一郎の置き去つた包を何氣なく披いて見ると小判を無雑作に五十枚入れてあつたから餘りのことに、「おやッ、此の大金が……」と口をアングリさせたまゝ暫らくは呆れて居つた、元より五十兩と云へば其頃では中々の大金だから水呑百姓の分際では夢にも及ばぬことではあるが、嘉藏は水呑百姓とは云へ、此地へ逃がれた時には何れ主家の爲めに旗揚をしやうと云ふ氣があつた處から其時の用意にと残して居つたのを、嘉一郎が此地を出立するに就いて家の内を取片付た際、計らず見付たものではあるけれど金子を塵芥はどにも思はぬ氣性から之れまで牛を殺した償ひに夫れとは云はずに名主に托して置き去つたものと思はれる。

○叔父さんは馬鹿だな

さて住み馴れた在所を後にした嘉一郎はドン／＼と道を急いで目ざしたのは小倉の家申でも次席家老の宮本伊織の邸であつた。何分にも田舎の小供のことだから何處が何處とも勝手は判らず。彼方此方で尋ね／＼て漸やく城の一廓内にゐると云ふことを聞た處からスタ／＼と其方へ向つて城戸口の御門を通らふとするとフイと其姿を見た門番は驚ろいたも道理、十五六とも見ゆる小供が百姓其まゝのツンツルテンの着物に繩のやうな帯を占め背には其風体に似合しからぬ大きな鎧櫃を背負ひ、手には一本の槍を持つて居る刺さへ其鎧の穂先に鞘さへ箆めず拔身のまゝだから愈いよ以て捨ておかれぬ。「已れ小供とは云へ白晝拔身の槍を提げて大切なる御門を通行するは怪しき奴」と云ふので、「それツ……」と上役の下知を受けた二三の小役人は、手ん手に六尺棒を

以てバラ／＼と駈け出すと見る間に行手を遮つた。「コリヤ／＼何れへ通る」
 「俺れか、俺れは宮本伊織様の方へ行くのぢや」
 「ナニツ、御家老のお邸へ……」
 「フン、其宮本様の家は何處ぢや、叔父さん知つて居れば教へてくれ……」
 「控へツ、其方は自体何者ぢや」
 「俺れは足立山の側に住んで居つた竹内嘉一郎と云ふものぢや」
 「ナニツ、夫れが御家老さまの方へ何を致したる」
 「何をしに行かふとも構はぬぢやないか、そんなことを此處で云ふた處で仕方がないからなア」
 「黙れツ、申さぬとわれは通すことは罷りならぬ、歸れツ……」
 「そりや無茶ぢや、俺れが用事あつて行くのに叔父さんが止めると云ふ法はゐるまい、叔父さんが通さぬと云ふても俺れは通るぞ」
 「控へツ、無禮者ツ、貴様の其持て居るものは何だ、此處を全体何處と心得て居る」
 「アハ、數父さんは馬鹿だな、俺の持てるのは槍ぢや、又此處はお城の入口ぢやないか」
 「已れ、いよ／＼以て怪しからん、左様の儀は此處に於て存して居るわ

い、小供と思ひ許しおけば我れ〜を嘲弄致すかそりや」「無理ぢや、叔父さん
 んは尋ねるから己ア教へてやつたのぢやないか、嘲弄とは何か知らぬが、まア
 怒るな」「控へッ、第一槍を持參するとわれは何故穂先に鞘を箝めぬ、太
 平の世に御城内を抜身のまゝにて持つて通るとは何んだ」「エッ……」云は
 れてヒヨイと見ると鞘がないから、「アッ、ゑらいことをした、途中で落した
 らしい、チヨツ、仕方はないわい」と腰に挟んだ古手拭を取つて穂先に巻きつ
 けた、「是りや己が悪かつた、之れなれば構ふまい」「併し此の處は大切なる
 御門であれば無暗と通すことは相成らぬ、兎もわれ御家老の方へ何んの用がわ
 つて通る、御家老ともあるべき御人は其方如きに御用のあるべき筈はない」
 「筈はなふてもチャーンと約束をしてゐるのぢやから通さぬと云ふても俺れは
 通る」「ナニツ……」「愚圖々々云ふな、時刻が遅くなる」
 嘉一郎は遮ざるのも構はずン〜通らふとしたから小役人等は怒つて支

やうとすると、其六尺棒を擲つて、「そんな意地悪をするものぢやない」と
 云ひながら地上へグツと押へ付けた拍子、檜の木の棒も筈でもヘシ折やうにボ
 ツキと折れたから役人等は大變な驚ろき、「おやツ……」と呆れて居るのを
 見向もせず前にゐる一人をグイツと突き除けて悠々と歩み出したが其力は例
 の非凡の強力ときて居るので流石に氣味が悪いと見ゆ、強ても争はず其内の二
 人はどは嘉一郎の後から附いてゆく。
 嘉一郎はそんなことは一向平氣だ、反つて幸ひと思つたかヒヨイと後を見返
 りながら、「ねね叔父さん、其宮本と云ふ御家老の家は何處ぢや、意地悪をし
 ないで教へてくれ」「黙れッ、左様の儀は其方如きに教へることは相成らぬ」
 「だつて俺れは是非に用事があるのぢやからなア、夫れでは村田重藏と云ふ叔
 父さんの家は何處ぢや」「ナニツ、村田殿……コリヤ〜、貴様は村田殿を
 知つて居るか」「知つて居るから尋ねて居るのぢや、御家老の家を云ふのが嫌

なれば村田の叔父さんの家を教へてくれ、何方でもよいのぢやから」「フム、是りや可笑しい……御同役何んとしたものでござらふ、眞實用のあるものを強て教へずとあつて後にてお咎めを蒙るやうの儀があつては相成らぬからなア」「されば……」「教へた處で別段差支へもござるまいから、とてもことに御家老のお邸を申してやらふではござらんか、尤も念の爲め御門番へまで御注意を致して置けば我れはお役目に係はることはござるまい」「如何さま夫れもそうでござる、然らば教へて遣はそう」「フム……コリヤ……一寸待て」「ウン、教へてくれるか」「如何にも……」「夫れなれば何處ぢや早ふ云ふてくれ」「オ、然らば教へて遣はすが亂暴を致しては相成らぬぞ、宮本様のお邸はな、此の前方の辻を左へ曲つた處にある大きなお構へが夫れぢや」「左りへ……フン、それぢや彼の松の木の見わたる處か」「そうぢや、彼方だが御門は左りへ曲つた處にある」「そうか、そりや有難い……

……とテク、走り出したから此方の兩名、「オイ、一寸待て……」「何んぢや、何か用か」「フム、用があるから呼んだのぢや、貴様走らすとゆるりと參れ」「ナ、判つた上は已ア少しも早く行きたいから……」「だが待て、此方が先方の御門番へ通知を致してやるまで行つては相成らぬぞ」「ヘーン、そりや何かそんな規則があるのか」「まア、規則と云へば規則だ」「ナツ、ナール程、已に話に聞いたことがある、武士が他人の邸を訪ねる時には先觸と云ふものがあつたのか叔父さん等兩人は俺れの先觸をしてくれるのかい、そりやエライ濟まん、氣の毒ぢやなア」「チヨツ、糞面白くもない、大名じやあるまいし誰れが貴様のやうな奴の先觸をするものか」「だつて俺れの行く先へ廻つて其事を知らすのなれば先觸じやないか」「勝手にしろ……御同役馬鹿々々しいではござらんか、御家老の方へ申し入れるだけは廢しに致そう、……」「如何にも馬鹿々々しふでござるが後にて萬一お咎めの受けることがあ

つては一大事でござれば致し方はござらん、矢ッ張り御通知だけを致しておかねば相成るまい。「フーム、それもそうでござるかなア」兩人は馬鹿々々しいやうな氣がしながら仕方がないから嘉一郎にゆるりと来るやう申し付け、兩人は足を急がして宮本伊織が邸の門番まで、「小供ではあるが見る處中々油斷のならぬ者が斯様々々の風体にて今に之れへ参るでござらふから御油斷さつしやるな」テナことを云ひ残して自分の詰所へ引つ返した。

○己れが手傳ふてやる

嘉一郎はそんなことには頗着はない、是れから武士になるチョツ鼻から先觸付で家老の邸へ向ふとあれば幸先宜しと云ふやうな考がへでノソリノソリと宮本伊織の門口へ差掛ると、城戸口の門番から聞いて居る當家の門番ソレ來たと云はぬばかりに二三人其前へ突つ立つた。「コレ、其方は何んだ」「己れ

は足立山の方から來たものじや、宮本の叔父さんの家は此處だらふ」「ナニ、宮本の叔父さん……コリヤツ、無禮なことを申すな、御當家は御家老のお邸じやぞ」「フン、其御家老の宮本の叔父さんだらふ、俺ア叔父さんと約束がわつて來たのぢや、お前等に用はないわい」「己れ無禮な奴、待て、通るとはならぬぞ」「ならぬと云ふた處で己は用事があるから通るのぢや……」「何んな用か知らぬが今はお留守ぢや」「エツ、留守か、そいつア仕舞つた、何處へ行つた」「申す迄もない、御殿へ出仕を遊ばされて居るぞ」「御殿へ……フーン、それぢや俺れに案内をしてくれ、用事が忙しければ手傳ふてやるから……」「馬ッ、馬鹿なことを申すな、御家老の御用を貴様なぞが手傳ふことが出来るか」「そうか、俺れに出來ぬか、夫れなれば仕方はない、力仕事なれば何んでも手傳ふてやるがなア……」「生意氣なことをぬかすな、併し貴様は殿様へ何んな御用があるのぢや、此方から取次いでよいことなれば申

しておけ、お歸りになられた節言上を致してやるから……」「そりや不可ん
 俺れが直々遭はねば判らぬこつちや、夫れちや歸るまで此處で待つてゐるぞ」
 「オイ、そんな入口に居つては邪魔になる、待つて居るとあれば特別を以
 て此方へ入れてやるが穏和くせんと不可ぬぞ」「よし、悪戯をせぬから待たし
 てくれ」「然らば此方へ來いッ……」

門番は隠居老爺の捨てどころと云ふくらい、事さへなければ他に仕方のない
 老人でも勤まるものであるが、其頃は随分浪人の亂暴者なぞが大身の邸へ出
 掛て云つては難題を吹つ掛け無心を云ふ奴も少く無つたから従つて隠居老爺な
 らずでは勤まらぬ、素破と云はゞ躍り出して取つて押へやうと云ふ氣力のあるも
 のを置かねば間に合ぬと云ふので何處をも血氣盛りの腕ッ節に筋金でも入つて
 ありそやな人間を置いてあつた、が何れは腕ッ節に筋金があつた處で何事も
 ない時には眞實の隠居役同様、頗る閑散無事に苦しむ處から何か變つた事

がわれれば慰さみにしやうと考がへて居る處へ變テコな風休をした嘉一郎がヒヨ
 ツヨリ這入つて來たのだから、「此奴怪しい奴……」と云ふよりも、「面白
 い、此奴を無聊嗜しに悪戯てやらふと云ふ考がへて番所へ呼び入れたのである
 呼び入れられた嘉一郎の方では結局幸ひと槍を裏手に置いて草鞋を解くと其
 儘無遠慮にツカ〜と上り込んで、鏡櫃も傍らへドツサリ置いた、門番は夫れ
 をチロ〜と眺めながら、「オイ、貴様大層なものを持つて居るが夫れに
 何が這入つてゐるのぢや」「ウフツ、馬鹿だなア、お前だつて武士の片割で居
 つて、是れを知らぬのか」「無論其容物は判つて居るが中に何が這入つて居る
 と聞くのぢや」「容物が判つて居れば中も判つて居るぢやないか、俵の中へ大
 根や燕を入れぬからなア」「ハ、ハ、ハ、此奴一本參つた、併し何か、夫
 れでは彼の中に眞物の具足が這入つて居るのか」「そうだ、具足に偽物がある
 ものか」「成程、それでは随分と重いだらふが何處から持つて來た、貴様の瘦

腕うででよくも持もたれたな」「フン、彼あれくらいのものを持もてぬやうでは何なんになる
 ものか、已おれア在所ざいしょから脊せお負おふて來きたわい」「在所ざいしょから……フーム……」と
 呆あきれたも道理どおり、鏡よけい櫃びつに具ぐ足そくをチヤンと入いれては輕かるくも五六貫かんめ目め、重おもくて十貫じゅ
 ばかりのものすらある、是これを如何いかに剛ごう力りきとは云いへ小供こどもの瘦やせ腕うででは一寸ちよつとやソツ
 とで脊せお負おいそうでもないからである、「フーム、貴きさま様さまは一体たい幾いくつ歳さいぢや」「已おれか、
 已おれは十歳じゅさいよ」「ナニ十歳じゅさいだ……馬ば鹿か云いへ、少すくくも十四五じゅうごだらふ、何どうしても
 十歳じゅさいには見みぬぬぞ」「見みぬねば見みぬるやうにしておいてくれ、已おれア嘘うそを云いふの
 は嫌きらいぢやから」「成なる程ほど、此こ奴やつも一本ほん參まつた、併しかし貴きさま様さまは小供こどもに似に合あはず中なか々々
 力ちからが強いやうだが、此この基こ盤ばんを片手かたてで携たげることが出で來きるか」「基こ盤ばん……
 夫それを何どうして携たげるのぢや」「何どうして……ハ、ハ、ハ、ハ、生意なま氣いきなことを
 云いふな、片手かたてで持もつて疊たたみを離はなすことが出で來きるかと聞きくのぢや」「ウフツ……
 叔父おぢさん、お前まへは何どうぢや」「ハ、ハ、ハ、ハ、此こ方ほうは此こんなものぢや、見みておれ

……」
 門番もんばんの一人ひとりは基こ盤ばんの片隅かたすみを片手かたてで引ひツ摺つみ、「ウン……」と力ちからを入れてケ
 イと持もち上げた、何どうぢや、貴きさま様さまは力ちから自じ慢まんでも是これくらいのことことは出で來きまい」
 「ウフツ、叔父おぢさんの力ちからは夫それだけか」「ナニツ……」「そんなことことは在所ざいしょ
 の小供こどもは誰たれでもすらすら」「馬ばツ、馬ば鹿かなことことを申まをせ 如何いかに在所ざいしょの小供こどもが
 力ちから強ちからだと申まをしても是これはどのことことを出で來きると思おもふか、夫それでは貴きさま様さま遣やつて見み
 る」「フン、やるはやるが盤ばんが厚あついから己おれの指ゆびは下したから上うへまで届とかぬわい」
 「ハ、ハ、ハ、旨うまいことをぬかしよる、厚あついので饒しの俵わたらふ、ハ、ハ、ハ、ハ、」
 「だつて俺おれはモツトらしいことをやつて見みせるぜ」「ナニ……」「叔父おぢ
 さん此この上うへに座すわつて見みる」「エツ、此この基こ盤ばんの上うへにか、とツ、何どうするんぢや
 「何どうでもよいから一寸ちよつと乗のつて見みる」「フム……」と訝いぶりながら云いはれるま
 へにソツと乗のつてビタリと座すわつた」

○動いちや危険い

嘉一郎は夫れを見てニタリと笑い、「叔父さん、落ちては不可ぬぞ、よいか
 「オイ、一体何ないするのぢや」「まアよいから落ちぬやうに氣を付けて
 おれ」と云ひ切つて右手を碁盤の裏へ差しゐてたと見るとスーッと持ち上たか
 ら上に乗つて居る人は、「やッ、危ないッ……」と慌て、飛び下りやうとす
 るのを、「ナニ、大丈夫、動いちや反つて危険い、ッツとして居れ」「おッ
 降せ、判つた〜……」「待て〜、是れくらいで判るものか、動いては不
 可ぬぞ」

乗つて居る人は立つて居るのなれば直にも飛び降りることは出来るがビタリと
 座つて居るだけに夫れすら出来ぬ處へ、身体を動かせば臺の碁盤が、揺れる、
 夫れが又た甚だ以て無氣味な處から兩手で盤の兩椽を持つて、「わッ、危険い

降せッ……」ビク〜もので云ふて居るのを嘉一郎の方では面白半分、
 「動くな、動いては危険ぞ……」と云ひながらッツと片手で支へたまゝ、其座
 を立つて上り口の方へノゾリ〜と歩み出したから益々驚ろいて、「とッ、何
 處へ行くんぢや、もうよい、下してくれッ……」「ナニ、心配すんな、叔
 父さんは割に氣が小さいな、大丈夫だから安心をせい、已ア久しぶりで腕慣し
 をして見るのぢや」「まッ、待つてくれ、此方は御用のゐる身体ぢや、貴様の
 やうな相手になつて居る譯には相成らぬ」「八釜しく云ふな……」と云ふて
 居る内に庭へ下立つて門の處まで出かけて來たから盤の上ではいよ〜、大間誤
 付きにマゴ付き出した、「まッ、まてッ、待て〜、表へ出ては不都合だ、コ
 ヲ、是りやッ、降せッ……」「ハ、ハ、ハ、面白いなア……」
 いよ〜慌て出すのが嘉一郎の方では益々面白く感じた、門番が無聊晴し
 の慰さみにしやうと思つた相手から今は反つて玩弄にせられて居るのだからた

まつたものではない、其内に嘉一郎は相變らず盤を支へたまゝで表へ出てはプ
ラリ〜と彼方へ行つたり此方へ來たり行きつ戻りつ歩き初めたから通行の者
の目に付く、此邊は城内だから通行の者と云ふた處で大抵は家中の人か但しは
其家の仲間小者の面々だ。

「ホ、ー、何うも大變なことをやつて居るではござらんか」「フーム、見れば
小供のやうだが酷い力もあつたものでござるな」「如何さま……、おやツ、
彼の上に乗つて居るのは御家老のお邸に居られる御門番ではござらんか」「フ
ーン、違ひない、山田ぢや……、オイ〜山田ツ……」なんかんと聲を掛け
るものがあるから愈いよ恐縮の体、是れが爲め常は淋しい邸町も次第に見
物の人の數が加はる。

處へ本丸の方から此方へさして來か、つたのは外ならぬ宮本伊織の行列だ、
伊織には今日は何かの都合で刻限の來ぬ間に下城して來たものと見ゆる、城下

なれば先供の侍は、「片寄れ片寄れ……」と警戒の聲も殿かにかけて
人拂ひにも及ぶ處だが、丸の内だけに夫れもない、供の面々ユタリ〜と列を
立て、邸近くなるよとバラ〜と走り出した一人の先供は御門口から、「お歸
りーツ……」と聲をたてる、之れが碁盤の上で今まで夢中になつて、「コレ
ツ、降せツ、あツ、危険いツ……」と吐鳴つて居つた門番の耳へフイと這入
つたから、「おやツ……」と見ると紛れもない主人の歸りだから眞實以て吃
驚仰天。「やア、是りや大變……」と途には絶わかねたが無茶苦茶に飛ぶ
……より滑り落ちた拍子に腰骨をウンと打つて、「いツ、痛いツ……」
行列の方では夫れを見て見ぬ振で通つたが、「痛いツ……」と云ふ聲がフ
ト駕籠中の伊織の耳へ這入つたから訝しく思ふた伊織はヒョイツと駕籠の戸を
開けてツツと眺めながら「乗物待てツ……」と云ふ聲に、「ハハツ……」
と行列は忽ち止まる、「是れよ、彼れなるは何者か一應尋ねて參れ」「ハツ

……一人の家人はツカ〜と其側へ進んでフイと顔を見ると兼て馴染の門番山田だから、「やア貴公は山田ぢやないか、何んとした」
 「オ、是れは菅野様でございますか、何ともはや相済まぬ譯で……」
 「そッ、某しは一向その何んでございましてですが、エ、その……何が何を致しましたので殿へ宜しく……」
 「コレ〜、何が何したでは一向判らぬぢやないか、兎もわれ殿には一應尋ねて参れとの御意ぢや」
 「エッ、そッ、それは大變……けッ、決してお役目を疎かに致した譯ではござらんから何卒宜しくお取成を……」
 「左様の儀は兎も角、貴公にも似合ぬ大人氣なき業ではござらんか、自体如何致したのぢや」
 「さ、是れには……」と云ふて居る側から碁盤を其場へ捨て、ヒヨイと顔を出した嘉一郎は、「叔父さん、お前は何だ」「なにッ……やい、其方は何者ぢや、隔くろしい風体を致して何として此の御城内に紛れこんだ」
 「ウン、俺ア宮本の叔父さんに用事があつて来たんぢや」
 「エッ、宮本の

叔父さんとは誰ぢや、此の御家中に其方の如きものより叔父呼はりをされるやうなものはないぞ、早く出て行けい、まて〜致して居つてはお咎めを受けるぞ」
 「否だ、俺ア宮本の叔父さんと約束があるから来たのぢや、御家老とやら宮本と云へば直ぐ判ると云ふことだつたから……」
 「黙れッ、無禮者めッ御家老には其方如き者にお知邊はないわいッ……」
 「フン、お前なんか知らぬからぢや、八釜しく云ふない、今に叔父さんが御殿から歸つて来て見る、吃驚させてやらア……」
 「己れ益々怪しからぬ奴だ、然らば早く来い、殿には今彼れに居らせられるから召し連れてやる、だが萬一御存じがないとあつては其儘には捨て置かぬぞ」
 「殿か何か知らんが御家老の宮本と云ふお武士ぢやぞ」
 「オ、さア参れ」
 「フン……オヤッ、彼の駕籠に乗つてゐるのか、大分氣が利いてゐるなア」
 「控へッ、兎も角も早く参れ」
 「お、勿論だ……」
 嘉一郎は菅野に伴なはれて伊織の乗つて居る駕脇まで馳せ付け、ヒヨイと其

顔を見て驚ろき悦こんだ、「オ、叔父さん……」「ナニツ、お、其方は、
 ……」。「ハイ、嘉一郎でございます」「フム、よく参つた……コレ、
 此者を憫はつて邸へ連れて参れ……」「ハ、ッ……」と菅野が頭を下げて
 居る内に、「夫れッ……」とあつて行列は静かに門内へ練り込むと後を見送
 つた嘉一郎はニタリと笑つて菅野に向ひ、「オイ、叔父さん何うぢや、彼れは
 俺れの云ふ宮本の叔父さんぢやぞ」「フーム……其方は殿を知つて居つたの
 か、何うも妙だ……」「オイ、叔父さん、夫んな顔をしないで早く行か
 ふ」「フーム……」
 菅野は訝かりながらも嘉一郎を伴れて伊織の邸へ立ち歸つたが、馬鹿を見た
 のは門番の山田だ、其後を怨めしそうに眺めて腰骨を撫りながら澁々自分の詰
 所へ引き取つた。

〇何れくらいに打ませう

さて伊織の邸を訪ふた嘉一郎は其風体にては不都合とあつて伊織の厚意によ
 つて衣類萬端を整のへて貰ひ、村田重藏の邸に引き取られて是れから正式に
 剣道の修業をすることゝなつたが、何がさて其太刀は非凡なものだから剣を持
 つ術こそ初めてとは云へ其大刀先の鋭いことは一道りではない、最初は當藩の
 師範役池澤勝馬の道場へ弟子入をした、すると勝馬は左程までの大力とは知
 らぬから先づ稽古代の津森郷藏と云ふのに稽古をさせる、之れは獨嘉一郎だけ
 ではない、誰れでも弟子入をした當座は腕固めと云ふので流儀も何も云はずに
 稽古代へ無暗と打つてかゝるのは何處の道場でも同じことだ、そこで嘉一郎も
 いや／＼池澤の道場へ弟子入をすることゝなると稽古代の郷藏は例によつて腕
 固めの稽古代となる。

「さ、此竹刀を以て拙者に打つて掛るのちや、竹刀は少々重いかも知れぬが持ち慣れたれば何でもないから暫らくの辛抱ちや」「ウン、辛抱ぐらいは何んでもない、フォーム、是れを持つのか……ハ、ハ、ハ、ハ、是れぐらいのものは少しも重くはないが……」「持つた時には左程に思はずとも次第に重くなつてくるから夫れを辛抱せねばならぬ」「やツ、宜しい、それで持つのは斯うですな」「そうちや、さ、夫れを以て拙者の頭を目がけ方の限り打つてくるのちや」「エツ、力の限り……大丈夫でございますか」「ハ、ハ、ハ、ハ、そんなことは心配せずと早く打つて来るがよい」「では打ちますせ、宜しいか」「念を押すともよい、夫れより打ち外しをせぬやうに充分見當をつけねばならぬぞ」「さア、夫れでは宜しいか、打ちますヨ……やツ、ウン……」力を極めて打ち込んだ奴を郷藏は鬨り半分、「はい来たツ……」とヒヨイツと身を懸すと太刀音激しくピユツ……と風を切つて道場の板の間をバチリツと打つ、

其勢ひが餘りに激しかつたので丈夫な道場の一寸板を五寸ばかりも打ち破り竹刀の先は籬のやうに干切て飛んで仕舞つたから稽古代の郷藏は青くなつて、「まツ、待つた、其方は大變な力だな、そんなものを真面で喰つてはたまつたものではない」「ヘーン、是れぐらいで……それでは力の限りを入れたなれば大變ならふな」「な、何んだ、今のは力の限りではないのちやと……」「無論です、身体は小さくとも力はまだ有ります」「そツ、それはいよいよ大變だ……」と郷藏はタツタ一度の太刀打を見ただけで御免を蒙つて先生に慄ひ、其話をする、池澤先生には上段の間で夫れをツツと見て居つたのだから是れも内心では非常な驚ろき、「フォーム、何うも大變な奴だ、竹刀を以て道場の板敷を叩き破るとは酷い奴だ」「さツ、左様でございます、就ましては某し如きは到底稽古が出来かねますから彼れだけは何うか先生のお手で……」「コン、情ないことを申すものではない、無論何うしても貴公

の腕で六かしいとわれれば此方直々に手を取つて遣はさねばならぬが、夫れでは貴公の箔も落ちる道理、又當道場の掟を破ることゝなるから已を得ず稽古代を他の者に代わねばならぬ、そうなるも貴公も快よくなければ又當道場の看板にも抱はる道場ぢや、だから嫌ではわらふが最初は矢張り貴公の手を以て稽古を致してくれい、ナニ、如何ほど大刀打が強くとも是れを旨く外すれば何も恐れる處はない、相手が激しければ激しいだけ其激しいのを此方で利用すればよいのぢやから……」

「ハッ、先生のお言葉ではございませうが某しでは夫れを何うも旨く外しかねますので……彼の……彼の調子では悪く致しますと一命にも抱はりませうからその……箔が落ちませうと稽古代を他の人に代わられませうと夫んなことには代わられませぬ」

「ちよッ、貴公も夫れでは餘りに腑甲斐無ぢやないか」

「なッ、何と仰せられても已を得ませぬ、彼の者の稽古だけは眞ッ平御免を……」

よく〜庇古垂たと見れて郷藏は何んど云ふても承知をせぬから池澤先生仕方がないと見れて自ら竹刀を取つて道場に下り立つた、

「當道場には例のなきことではあるが最初より此方自から稽古を致して遣はす、彼方に別の竹刀があるから何れなりとも持つて來るがよい」

「畏まりました、併し先生、劍道の稽古を致しますには稽古ごとに竹刀を一本つゝ使ふものでございませうか」

「馬鹿なことを申すな、一本の竹刀を何年も持つ人がある程だ」

「左様なれば先生打つのに餘り力を入れては不可ませんなア」

「ナニッ……」

「只今の先生は力の限りと仰言りましたが、力の限り打つて参りましては一打ごとに取り替はねばなりませんまい」

「ウーム……」

「處で先生、今度も力限り参りませうか」

「ウーム……」

「先生は大丈夫でせうな、さ、参りますぜ」

「さて〜、ウン、それではその……最初から餘り力を入れるものぢやない、まアその一寸よい加減に参れ……」

「よい加減と申しませう……」

「ウム、その何だ、その一寸力を入れるだけでよいぞー」「畏まりました」
 「一寸だぞ、判つたな、さ、判つたなれば打つて参れ」
 池澤先生も内心ではビク／＼ものだが他の門弟の手前、眞逆に底古垂れる譯にはなりかねる處から細心翼翼用意周到、恰かも薄氷を踏むの心地でも云ふべき有様で立ち向ふ、「さア来た」「打ちますぞ」「念には及ばぬ」
 「よしッ……」と打つた奴で普通なれば頭の上をボンと打たして相手に勵ます處だが、相手は相手だから危険千萬とあつてヒヨイと横に飛んで竹刀の先で「やッ……」と受けるると其竹刀は嘉一郎の力が激しかつた、めにバチリッとなおき落された、けなればまだしも、其先は千切れて何方かへ飛んで仕舞つたから驚ろいたのは池澤先生だけではない。

○是れは怪しからん

自分より上手の者が或ひは相對のものなれば時のハズミで大刀を打ち落されることがあるが下も下、弟子入り早々の門弟に是れだから池澤先生大いに器量を下げた、と云ふてテレ隠しを云ふやうな卑屈な根性はない、「フーム、何うも其方は大變な力量だ、其力量を以て劍の使ひ方を覺れば恐らく天下に相手はあまるまい、是れまで何百の門弟を扱ふた此方も其方だけに手は以て教へることは相成らぬから明日よりは劍の使ひ方だけを教へること、致そう、今日は先づ歸らつしやい」と云ふことで其日は嘉一郎の稽古は天れだけにして引き取らず、さて翌日である、嘉一郎は翌日を樂しみにして定つた時刻より早いくらいに道場へ出掛て見ると其片隅に五斗儀が一俵吊り下げられてあつたが、池澤先生には嘉一郎の顔を見ると「オ、竹内参つたか、其許の稽古は是れだ、大刀も竹刀では宜くなからふから之れを以て打たつしやい」と竹刀の代りに樫の木で拵らへた木劍を渡した。

夫れを嘉一郎は受け取つたもの、何うして稽古をしてよいか判らぬから、
 「先生、是れで彼の俵を打つのでございますか」「如何にも打つのは打つのだ
 が、其儘で打つては死人を打つやうなもので稽古にはなるまい、それ、斯ふ
 やつて打つてかゝるのぢや、コレ、手當り次第に打つちやない、此の通
 り土器を五ヶ所に付けてあるから此奴を打ち破るのぢや、それ、此の土器はお
 めん、此の二つはお小手、残りの二つはお胴ぢや、動いて其許へ打つ突かつてゆ
 く處へ此の五ヶ所の内で何れなりと叩き破るのぢや、よいか」「フン、之りや面
 白、一つやつて見やふ、先生、モ一度俵を動かして頂きます」「よし、
 併し念の爲めに申しておくが、此奴を受け損ねた時には早く身体を旨く躲すや
 う致さねばならぬ、之れを假りに相手から打ち込んでくる劍と見るのぢやから
 ……」
 「宜しうでございます」「さ、夫れでは構を致せ……それ、其
 構は中段ぢや、最初稽古の内は中段に構ねば相成らぬ、さアよいか、打つ

付けるぞ、ヤ、ヒーフー三……それツ……」と合圖の聲と共に揺つた
 俵をツーツと引き上げて放した奴が嘉一郎の正面から勢ひ強く打つ突からふ
 とする間もなくピユツと打ち下した太刀先は苦もなく弾き返す、一面白
 いと再び元へ戻つてくるのを又もやピヨツと叩いたのは叩いたが、端の方
 を叩いた爲めに一方の端が左の肩へドシンと打つ付かる、俵は五斗俵、五斗俵
 は二十貫と相場のきまつたものだから、夫れに打つ付かれてはつゝまり廿貫の
 ものに打ん殴られたやうなものだ。
 普通の者なれば譯もなく二三間弾き飛ばされる處だらふが嘉一郎は、「ウン
 ……」と持ち堪へた……と云へば嘘だ、如何に豪傑であらふとも不意に二
 十貫もあるものに打つつかられてはツツと持ち堪へることの出来る筈はない、
 之れには遠がの嘉一郎も、「アツ……」と一二尺タチと成つて漸やく踏
 み止まつたが忽ちクラツとなつて、「糞ツ……」木劍を振り上ると見る間

にビユツと打ち下すと其勢ひで釣つた細引はアツリツと切れ、板の間にドシ
ンと地響を傳へて落ちた拍子に俵は壊れて其口から米がバラ／＼と飛んで出
る。

池澤先生初め其他の一同は此体を見て愈いよ呆れた、「竹内、何うも其方
は恐ろしい奴ぢや、此の調子で毎日一俵づ、打つ壊されて居つては堪つたもの
ではないぞ」「ナーニ、先生御心配なさいますな、外の事なれば兎も角、俵に
繩を掛けるのは何んでもございませんから打つ壊すことに私が繩で繕ひを致し
ませう、何うか是れから繩を御用意下さいませ」「フォーム、其方は旨く繕ひが
出来るか」「大丈夫でございませ、細工は流々仕上を御覽下さい」「ホー、
然らば……」と云ふので早速繩を取り寄せて嘉一郎に渡すと嘉一郎は附近に
散亂した米を拾ひ集め、そいつを壊れた口から入れてクル／＼と繩をかけた
「何うです先生、之れなれば大丈夫でございませう」「フォーム、其方は中々

旨い」「旨い筈だ、之れが私の得意なもの」「エ……ツ……」
を上へ釣つて貰ひたふでございませが、私は背が足りませんから」「ヨシ／＼、
コレ／＼金田、貴公御苦勞だが、彼の梁へ此奴を通してくれ、梯子は納屋にわ
るから……」

金田と云ふ門弟は裏の納屋から梯子を取り出して天井の梁に掛け、池澤先
生から渡された頑丈な緒を其上に通す、すると池澤先生は他の四五人の門弟
を呼んで例の俵を差し上さそうとするのを嘉一郎は見て、「先生、それなれば
他の入の力を借りるには及びません、私一人で大丈夫でございませから」「如
何に其方は大力でも此奴は六かしからふ、結び付けるのにはグツと差上げねば
なるまいから」「ナーニ、御心配下さいませ、大勢でヨチ／＼やるより一
人の方が結局仕事は仕易ふでございませうから……」
「フォーム、だが一人で持て
るか」「先づ御覽下さいませ……」と云ひながら右手を俺の眞ん中へグイと

掛け何んの苦もなくヒヨイと差上げた、それと見た一同の面々は餘りのことに呆れては居つたが嘉一郎にして見ると在所に居る頃、二俵の五斗俵を擔いで二里の道を小倉の城下まで出かけて来たことに比べたなれば牛の尻に鼠が止つたはどにも思はなんだであらふ。

さて用意が出来ると再び稽古に取り掛る。俵は壊れかけやうとすれば早速飛び掛つて繩をかける、繩をかけては又もやブツ叩く、二度三度繰り返してやつて居る内に俵の破れから中の米は小米のやうに打ち砕かれ四方へバツ／＼と勿ね飛ばされる、側に稽古をして居つたものこそ災難だ、相手と睨みこつことをやりながら、「さア来いッ」「エイッ……」なんかと氣合を計つて居る真つ最中、頭からバラ／＼と小米を振りかけられるばかりなればまだしも、目の中や鼻の穴へ飛び込まれては愈いよ大變、「あッ……」之りやたまらん、一寸待つた」「ツフム、やッ、拙者の鼻の穴へも這入つたぞ、ハツクシヨン……」

折角打ち込まふとして居る勝負の瀬戸際でハツクシヨンでもわるまい、處が本人の嘉一郎の方では何處が風吹くと云はぬばかりに相も變らずバサツ／＼と打つ叩きながら四方へ小米の雨を降らして居るから、「オイ／＼新弟子、貴公は無遠慮な男ぢやな、少しは遠慮をせい」「遠慮とは……」「外ぢやない貴様が打つ叩くことに斯様に小米が飛ぶぢやないか、此んなものを飛ばされては此方では眞實稽古なんぞは出来たものではない」「左様か、併し私の方では先生のお言葉によつて稽古をして居るのですから別に飛ばそうと思ふて打つて居るのぢやないのです」「だから少し遠慮をしろと申して居るのぢや、大体貴様は此方から先方を向いて打つから其勢ひで此方へ飛んで參るのぢや、先方から此方を見て打つて見る、さすれば飛んだ處で壁へ打ツつかるだけだらふから」「成程、それでは左様に致そう……」とわつて嘉一郎は先方側へ廻つてバサツ／＼と打つて居つると今度は格別此方へは當らないから、「それ見る

それなればよいぢやないか—「成程……」

小供ながらも今までは多少氣兼をして居つたのが最早之れなれば他に迷惑を及ぼさぬと見ては次第に持前の力を振ひ出す、二度三度四度五度と打ん殴る迄は何事も無つたが、力の振り方が激しいにつれて繩の弱ることも速だ、バサッ……と力を極めて叩いた拍子に丈夫な繩も前刻來の弱りでアツツリ切れ、ば殆んど干切れくになつて居る藁は繩のお蔭で漸やく持つて居つたのだから一支へもない、アチくツと一時に干切れて中の米は關を切つた水のやうにザツと二三間は溢れ出た、最早小米を打つ付けられる憂はないと安心をして試合最中の二組三組不意に此奴を頭から打つかけられたのだから大變、顔と云はず身体と云はず鬚のテツペから耳、鼻、口まで米の粉まぶれで、「アツ……」と云ふたまゝ、勝負どころではない、「こッ、之れは怪しからん……」

「とッ何うも不都合だ……」怒つて見た處で元々嘉一郎の方で惡氣があつてしたて

とではないから仕方はない、と云ふて道場は之れが爲め米の粉たらけとなつたから試合も出来かねると云ふので其日の稽古はそれ切りで休むこととなり、剩つさへ其お蔭を蒙つて一同の面々は道場の掃除をせねばならぬこととなつたので大變な不平、「怪しからん、先生が竹内如きものを門弟に致される上は拙者共は最早是れへ通ふまい」と云ふやうな動機さへ口にするやうになつたから先生も捨て置れぬ。

○根氣よく土俵を相手に

澤山な我樂多門弟を仕込むより將來見込のある者只だ一人を仕込むたいのは池澤だけでなく誰れしも心は一つだが、多勢の家の中の士弟を教へねばならぬ役目を帯びて居る悲しさには一同の弟子が退場となつては一大事、殊に嘉一郎は村田の邸に居つて次席家老の言葉が、りであるとは云へ、元を洗へば當藩に關

係のなき者、其者一人の爲めに多勢なる當藩の子弟を失ふ譯には相成らぬとわつて池澤先生は其日の夕刻に村田の邸を訪づれ委細を語つて、「斯様の次第でござれば何卒悪からず思召さる、やう願ひたい、と申して彼の嘉一郎の様子を見るに修業を盡まば將來は天晴天下の名人とも成べきかと存するにより、此のま、武道を打ち捨てざるは誠に惜き次第、就ては此後御邸内に於て斯様々々なる方法を以て手並を練られるやうお計らひになられるが宜しきかと存する……」と云は、今日限りで道場へ通ふことを廢めてくれいと体のよい破門の宣告だ、腕伯が過ぎるとか師匠の言葉に背いた、めに破門を喰ふ例は随分と澤山にゐるが、力が強すぎる爲めに破門せられたなぞは古今を通じて他にゐるまい、況して僅か弟子入りをして二日目に破門を宣告されたと云ふに至つては愈いよ振つておる。

重藏に於ても譯を聞いて見ると道理だから其後は池澤から教へられた通り邸内

で米俵を相手に稽古をさせた、尤も今度は米俵と云ふても中には米の代りに土を入れた、如何に金錢には頓着をせぬ武家でも毎日一俵二表づ、の小米を拵らへられてはたまつたものではないから土表に仕代たのだ、併し此の方は米よりも重量がツツとゐるから大力の嘉一郎にとつては結句幸ひと悦こびながら一年二年と根氣よくやつて居る内にツンツンと目に見えて腕が固まる、そうなるも益々勵むと云ふやうな有様で早くも三年経つた、處が或夜のことである、宵の程から少しく可訝しく感じた腹工合が眞夜中頃になると、シクシク痛み出して便通が頻りと催して来た、是れが兩親の手許に育てられた小供であればそとまで氣がつかぬが他人の内に厄介になつて居ると思ふと十二三歳でも多少に後先を考がへる、「今頃ガタ／＼音をさせては折角寝んで居る人に氣の毒だ」くらいの考がへはゐるから成るべく足音を静めて兩戸なぞの閉閉も注意をして便所に出かけた。

尾籠な話だが、此んな時に限つて滅多に快く通じるものではない、夫れも氣の小さい只の小供なればビク／＼もので直ぐに引ッ返すが十歳ぐらいで淋しい山中へ出かけた程の嘉一郎だからそんなことは少しも氣にはせず、ツツと氣を洗めながら便通を待つ所在なさに折柄の月影を幸ひ、雪隠の小窓越しに見るともなしに庭の植込を眺めて居ると、稍隔つた彼方の塀の上へ黒いものが現はれたと思ふとヒヨイと此方へ飛び下りた、「ホ、ー、可訝しいぞ……」怪しみながら夫れでもチツと氣を落付けて様子を考がへて居ると又もやヒヨイと飛び下りる、續いて今一つ、メて三つの怪しい影が此方へ下りたから、「ホ、ー、さては夜盗の類ぢやな、今宵は當家の御主人もお泊り番であるからお留守中に間違がわつては云ひ譯はない、よし、一つ腕試しに彼奴等をフン縛つてやらふこんな考がへで直に飛び出そうと思ふたが、「さてよ、此ま、飛出しては面白くない、先年も俺れのことを天狗だなんて騒いだことがあるから何んな奴等か

知らんが今日も一つ吃驚させて言葉も出ん内に張り飛ばしてやらふ」と小供なちよつと狂言染みた氣があると見ぬ、寢衣にして居つた浴衣の着古しを頭の上からスツホリ引ッ被り、兩の手先を拳固にして兩の染口へ半分ほど出し現はし、そいつを浴衣の上から恰と双方の頬の邊りをチャーンと揃へて押へ、ノンリ／＼と歩み出して曲者の方へ歩みを進めた。

曲者の方だつて、村田の家は小身ながら有福と云ふことを聞き知つて這入る氣になつたもの、相手が武士と云ふのでアマリ氣持が宜しへない、ビク／＼もので忍び込んだのだから、絶えず附近に心を配りながら足音を忍んで雨戸の方へ近付内にフト嘉一郎の此の姿が目についた、「おやツ……」幽かに照す月影だから確とは判らぬが、何んだか白い變テコなものが大きな目をむいて進んで来る様子に驚ろいて、「ばツ、化物……」と逃げ出そうとするど嘉一郎は怪しげな聲を振り立て、「己れ逃げては噛み殺すぞ」とやつたから三人の

奴は驚ろいたとも驚ろいた、へたくと腰を抜して其場へ平駈張り、「ゆッ許せッ……」兩手を合す間もなく躍りかゝりさまバチリツノノと横面目がけて打ん殴つた大力に三名共、「キヤッ……」と悲鳴をわけてブツ倒れて仕舞つた、嘉一郎は其体を見てニツタリ笑ひ、其儘悠々と自分の寢床へ這入るゝ間もなく白河夜船の高野。

○水呑百姓の忤です

夜が明けると庭先の掃除をしやうとやつて来た下僕はフイと見ると三名の覆面の武士は揃ひも揃ふて血吐嘔を吐いて死んで居るから驚ろいた、「おやッ、ゑらいこつちや大變だ、ひッ、人殺しーいッ……」大聲たて、喚きまくつたから一同の家人何事だらふと駈け付けた、「オイ、甚助、朝ッばらから何うしたんだ」「とッ、何うも斯ふもない、ひッ、人殺しだッ……」蒼白な顔で慄

へながら指さす方を見ると是れだから遠がに驚ろいた、「フム、是りや大變だ是りや何者だらふ」「此奴は無論泥棒に相違はあるまいか何うして死んだのだらふ、おやッ、横ッ面が曲んでゐるぞ」「フン、此奴の頬の骨が砕けてゐらア」「何んにしても豪いこつちや」「そうだ、兎も角も此儘に捨て置けぬわい、何うしやう」「何うしやうたッて、今に旦那様がお歸りになるだらふから旦那様に申し上げた上のことにしやう」「それもそうだな」なんぞとツイ立騒いで居る處へ、主人の重蔵は昨夜宿直であつたのだから其日はお休みとあつて朝の内に歸つて來ると此の騒ぎだから是れも遠がに驚ろいたが、假令曲者にしても下手人がなくてはならぬ筈と考がへる間もなく側に居る嘉一郎の顔をフイと見ると一同の者等が立ち騒いで居るに引き換へ嘉一郎一人はニタリと笑つて居るから、「コレ、嘉一郎、此の者等に其方が手を下したのでわらふな」「フン、叔父さん、人間は醜いな」「ナニッ……」「牛なれ

ば一打ちでは一寸死ぬが此奴等はソツと叩いたゞけで死んで仕舞つた也」「フム、自体何と致したのぢや」「實は昨夜夜半頃に急に大便がしたくなつたら斯様々々で……」と委細を語ると重藏は驚ろきもし喜びもした、「フム夜陰に乗じ然も覆面を以て人の邸内に忍び入る以上は何れは怪しきものに相違はない、如何に打ち殺すともお咎めはあるまいがなれども一應お届けを致さねば相成らん」と云ふので早速掛り役人へ届け入れる、役人の方では一通りの檢視を遂げたが元より嘉一郎の一身には一切お構ひのある筈はない、けれども其噂はバツと家中に擴がれば小笠原侯のお耳へも這入る、小笠原侯には嘉一郎の事に就て先年宮本伊織から委細をお聞取りになり、其育て方に就ても伊織へ御内命があつたはとだから此事をお聞きになると早速伊織を御前へ召された一時に伊織、先年其方に養育方を申し付け置たる嘉一郎とやら申す者、此度聞き及ぶに三名の曲者を取り控いたとやら、察する處最早天晴なる手並と成り

居るであらふが、何んどある」「ハハ、ツ、其後重藏の方に預け居りまするが何分にも小供に似合はぬ大方とござりますれば」「フム、其者當年何歳とやら申したな」「ハハ、骨格非常に逞しくござりますれば見る處十七八歳ともござりますれと當年十三歳に相成りまする筈」「ナニ、十三歳とか、然らば予が小姓として召し抱へ取らせんと思へば兎もあれ一應目通りを申し付けへ」「ハハ、ツ、畏まりましてございまする」

伊織は主君のお言葉を承はつて我が子か孫でもお取り立てを頂くやうな思ひで喜んで御前を引き退り、直ちに其旨を重藏に傳ねると重藏も喜んで、「さては嘉一郎の出世の時節到来……」とあつて翌日附き添ひの上登城、小笠原侯のお目通りへ出る、侯には嘉一郎の様子をツツと御覽の上、「兎もあれ予が目通りに於て手並を見せるやう」と所望をせられる、そこで重藏から平素の修業は斯様々々に致して土俵を相手に致させ居りますればとのことに、

「然らば土俵を……」とわつて早速近侍に命じて其用意に取り掛らせる。
 斯ふなると重藏も力瘤を入れ、又伊織も心中では、「旨く手並を御覽に
 入れ、ばよいが……」とツイ〜氣を張つて待ち受けるはどだから當の本人
 嘉一郎に於ては尙更らのことだ、お庭先に用意の出来るのを待てツカ〜と下
 り立ち、吊られた土俵をソツと上げ試みてニツコと笑み拜借の木剣を取つて
 氣合を定め、「エイツ……」と打ち込む勢ひに眞剣でさへ容易に斬り込み難
 い土俵が半はともザクリツと切り込んだから主君を初め見て居る面々思はず、
 「アツ」と驚ろくを見むきもせず、用意の繩を取るが早いかサツと跳り掛つて
 キリ〜ツと切り口を旨く結つて仕舞つた早業は目にも止らぬほど、夫れと見
 て非常に御感心なられた小笠原侯には、手並は判つた、近ふ參れツ〜とお召
 しになり、小供に似氣なき天ツ晴なる手並、其方は當年何歳とか「ハイ、
 十三歳でございます」フォーム、十三歳としては中々に逞ましき骨格、其方の

姓名は何んど申すとか「ハイ、私は御城下の近在に居りました水吞百姓の
 倅嘉一郎と申します」「ホ、ホ、水吞百姓の倅とか、ハ、ハ、ハ、面白い奴ぢ
 や。
 お口では其正直を喜ばれて面白いと云はれたが御内心では失策だと思はれ
 た、戦國なれば兎も角、太平の御世に如何に非凡の手並であるとは云へ、氏素
 性もない水吞百姓の倅をお側近く召し使ふことは幕府の聞へ、さては他家への
 聞へも面白くない、尤も其素性は先般伊織から言上をしたから小笠原侯には
 御存じであるが、一同の家臣中に嘉一郎の出身地を知つて彼奴は土百姓の倅だ
 蛙切りだなんぞと云ふやうなことがあつては面白くないと思はれた處から列座
 の中でお尋ねになり、「私の祖父は武田家の山縣に仕へた竹内嘉兵衛と申しま
 す者……」と云はせやうとの思召しであつたのだが、其アテがボカンと外れ
 た刺さへ、郷士の倅とでも云へばよいものを殊更ら水吞百姓と自から銘を打つ

たのだから尙更ら酷い、と云ふて非常に残念に思はれた處からツク〜と其顔を御覽になつて、「ホ、ホ、如何さま聞き及ぶに其方の親は百姓を致して居つたとあるが、腹からの百姓ではない様子、殊に當城下へ参る節、何か傳へられし品々ありと申すが何うちや」左様でございませう。私の祖父は竹内嘉兵衛と申して信州の武田侯一方の將、山縣家に仕へました趣、聞き傳へ居ります父より私に傳へられました品々と申しますのは其祖父の着けましたりと申す一領の鎧と一筋の槍にございませう」「フーム、竹内嘉兵衛と申せば天晴なる豪傑、さすれば其方は取りも直さず其豪傑の血を受けたものぢやな」と重ねてのお言葉、此處で、「ハ、ハ、ツ……」とでも云ふて仕舞へば「明日より予が側小姓として召抱へる」とでもお言葉のある筈を嘉一郎は「恐れながら……と前置をして、「祖父嘉兵衛は如何やうの豪傑にござりましたかは存じませぬと其血を受けましたは父にござりまする、父は水呑百姓と成り果まして私は其

水呑百姓の血を受けましたるもの、白き紙は一旦墨にて汚れますれば白紙とは申しませぬ道理、豪傑の血を受けたと仰せられましたは只だ〜お塊かしき次第にござりまする」
是れでは水呑百姓に裏書をしたやうなものだ、何れほどの慾目からでも召抱へると云ひかねる仔儀だから小笠原侯には其言葉の終るのを待たず「よい〜判つた、暇を取らず、ゆる〜休息を致せ」と、聊さか御不興氣に座を立たれた。

○蟻が芋虫を引くやうだ

肝腎の主公が座を立たれては一同の面々も頗ぶる手持無沙汰の体で一人立ちふたりた途には伊織と重藏、夫れからポカンと呆れて居る嘉一郎の三名を残したま、他に一人の影もない、伊織、重藏の兩名も月夜に釜を抜かれた体で道が

に大落膽の氣味だ。折角主君の思召に叶ふた嘉一郎の仕官も是れで水の泡になつた譯だから無理もない、と云ふて更らに考がへたのは嘉一郎の身の上である、如何に強力頼丈ではわれ僅か十三歳の孤兒同様の者を殊に其父臨終の際、伊織が後來のことを引受けた言葉を思ひ合すれば主君へ推舉の絆が切れたとは云へ無情に突き放すこともなりかねた處から兩名相談の上、セメテ一人前の身となるまで仕立わけやうと云ふので、相變らず重藏の邸に置いて土俵を相手に尙も修業をさすこと三年、早くも十六歳の春を迎へた時には身の丈六尺五寸、力は百人力、劍道は他人と試合をしたことはないから確とした標準は判りかねるとは云へ、今は二俵の土俵を前後にアラ下げて是れを一本の木劍で自由自在に手軽く扱ふことが出来るやうになつたから血氣盛りの慢心と云ふ譯ではないが自分ながら天下に敵のないやうな氣も出る、剩つさへ一般家中の者等は嘉一郎の姿を見ると尾を巻いてコツソリ通ると云ふ右様となつては益々鼻が

高くなる。そうなると思ひ餘つてフト浮んだのは武者修業であつた、「他藩の若侍ひが武術途には思ひ餘つてフト浮んだのは武者修業であつた、」他藩の若侍ひが武術修業と云ふことで時々當城下へも來る様子、成程彼ア云ふ風に諸國を廻國して見れば随分腕の立つ相手にも出會す筈だ、家中の人々等は何うしたとか一向自分を相手に立合れぬのだから何日まで經つても土俵ばかり相手にせねばならぬ、土俵を相手にするくらいなれば在所に居つて土俵をやりやつて居る方が勝だ、宮本殿なり當家の村田殿に今日まで厄介をかけ、何一つ恩も酬はず此地を出立するは心苦しく思はぬではないが、此上長く居れば尙更らに厄介を掛ける道理、さうだ思ひ立たが吉日と云ふから早速村田殿に其お話をしやうとあつて其日重藏の歸郷を待つて其事を語ると、重藏に於ては如何さま修業の爲めとあれば夫れも宜らふ、併し夫れに致せ一存を以て取り極る譯にはなりか

ねればと云ふので兩名打ち連れて宮本伊織の邸を訪ねた、伊織は其事を篤と聞き、「如何さま武道修業の廻國は武士として誰れしも致すことであれば夫れも宜しからふ、就ては其方も今では天晴なる骨格、最早元服を致さねばなるまい幸い是れに村田も來られたことではあり此場に於て此方烏帽子親となつて元服を致して取らせる」と云ふので元服の式を行ひ、名乗を忠常と與へて竹内嘉一郎忠常と云ふことになつた

嘉一郎は望みが叶ふて天へも昇る心地では是れ迄の禮を述べ、お禮の印までとあつて宮本家へは親から傳へられた一筋の槍……タツタ一筋の槍とは云ふもの、是れは武田信玄から山縣三郎兵衛へ武功によつて授けられたものを三郎兵衛から更らに嘉兵衛の武功を賞して與へられたものだから名槍に相違はない、又重藏へは是れも寸志として鎧一具を贈ることとなり、伊織からは改ためて武士に付き物の大小一揃と路用として若干かの金子を、重藏からは、一振の短

刀と身の廻りの衣類萬端を受け、其翌朝勇みに勇んで小倉を出立、兎も角も中國筋に向はふとあつて大里の濱まで來ると便船は一艘もなく、五六艘の漁船は折柄の大干潮の爲めに何れも水際から二十間ばかり岡にうちわけられ、其内の一艘を今しも七八名の漁師等「〜」と騒ぎながら海の中へ突き入れやうとして居る處である。

嘉一郎は夫れを見て何思ふたかツカ〜と其側へ進み寄り、「ハツ〜」
 貴様等存外弱い奴だ、夫れくらいの船を一艘出すのに七八名も蟻が芋虫
 へ群つたやうに其様は何だ、ハ、ハ、ハ、ハ、貴様なんか鯨でも見るものなれば
 慄い上つて仕舞ふだらふ……」云ひながらカラ〜と笑つたから船頭の内で
 も若い奴は怒つたの怒らぬぢやない、「オイ〜お武家、如何に口が横に切れ
 てゐるからと云ふて豪そうに云ふもんぢやないせ、フン、糞面白くもない、此
 船はヨボ〜の駄ん平や傳馬とは譯が違ふわい、當然なれば十人掛らねば出

ぬ船だ、それに蟻が芋虫に群つて居るとは何だ、兩ンてを差して人を斬ることや
 は旨いか知らぬが力は別だ、己だつて此の大里の濱では人に知られた宮相撲
 だ」「ハツくくく、宮相撲なれば鍋蓋山とでも名乗るだらふ」「なにッ
 ……」」「取つたら仰くからさ、ハ、ハ、ハ、ハ」「是りやツ、豪そうなことをぬ
 かすな、夫れちや己れは何うだ、俺が鍋蓋山なら己は鍋釜川たらふ空威張ばか
 りで取らぬ先から仰ぬいておるから」「ハ、ハ、ハ、ハ、貴様は力が弱いが謎は旨
 いな」「ナニッ、力が弱い、それちや己や此の船を俺れに變つて動かすことが
 出来るか」「動かすこと……何艘だ」「なにッ……」「何隻を動かすかと
 聞んぢや、一隻ぐらいなれば片腕でも面倒だから」「やい、く、く、大きなこ
 とをぬかすな、片腕で何うすると云ふのぢや」「判つた話ぢやないか、貴様な
 んかは七八人で海へ突き入れやうとするんだらふ、夫れを拙者は片腕で譯なく
 突き入れてやると云ふのぢや」「ナニ、片腕で……馬ッ、馬鹿なことを申す

な………オイ、兄弟何うだ、此のお武士が俺れ等八人でも六かしい奴を只だ一
 人で然も片腕で出すそうだ、一つ見せて貰はふぢやないか」「面白い、お武士
 一つお手並を見せて頂きませうか」「そうだ、我れくは何うせ蟻みたや
 うなものだらふからお武士に眞正の人間の手並を見せて貰はふかい………」と
 一同の漁師は嘉一郎の言葉に憤慨たか船を押す手を止めて、云ひ合したやうに
 嘉一郎の側へ進み、罷り違へば喧嘩でも始めそうな權幕凄まじい。

○拙者は嘘は嫌ひぢや

嘉一郎は漁師等の言葉を聞いてニッコと笑ひ、「ホ、ホ、望みとあらば如何に
 も見せてやる、併し只では張合がないから嫌だ」「フン、それちや貰をくれる
 とぬかすのか」「イヤ、左様のものは望みとあれば貴様等に拙者より與へ
 んでもない」「金が要らん、はて……フーン、判つた、それちや斯ふだらふ

萬一旨くいつた時には俺等の首をくれると云ふのだらふ、面白い、其代り平駈張つた時には俺れ等も意地だ、お前さんの生命を貰ふぞ」「ハハハハハハ、如何にも拙者の生命は與へるが其方等の生命を呉れとは云はぬ、蟻のやうな者の生命を取つた處で何んにもならぬからな」「そツ、その、蟻とぬかすのは憤慨わい、俺れ等は……」「オイ、長藏待て、まア夫れはお武士の腕前を見た上で何んなどと云へるわい、兎も角もお武士、お前さんの望みは何んだ」「オ、餘の儀ではない、拙者の力によつて首尾よく船を下した上は大儀ながら赤間關まで渡して貰ひたい」「エツ、それだけか、其代り出来なんだ時にはお前さんの生命だぞ、出来ぬからと云ふて逃げ隠れはすまいな」「ハハハハハハ、拙者も武士だ、一旦口外致した上は金輪際違へぬわい」「面白い、それぢや下して貰はふかい」「よし、見て居れ、蟻共ツ……」「まツ、又蟻だ……」「
「オイ、長藏、黙つて居れと云ふのに……」「だつて憤慨わ……」

「さ、夫れが今に敵を取れるのだから……」「フォーム……」
長藏と云ふ奴はヨク、氣が短いと見えて又しても憤慨のを側の者等がいろと宥めて居る内にツカ、と船の側へ進んだ嘉一郎は、「さア蟻共よいか片腕だぞ」「判つてゐるわい、下せるものなれば八釜しく云はないで早く下して見ろ」「よし……」とニタリと笑つた嘉一郎は片手を船の小舷に掛けて「ウン……」氣張ると船は小箱の椽を掴んで上げたやうに軽く宙に浮いた、「さア、斯ふして持つて行けば底も損むまい、序に何うだ貴様等此の中へ乗つては……」「とツ、何う仕つりまして……」「ハハハハハハ、蟻のやうな奴は何疋乗つても同じことだ、乗らんか」「めツ、滅相な」「氣の小さい奴等ぢや夫れでは浮けるぞ」と云ひ様片手に提げたま、岸邊へツカ、と歩んで水の中へチャポンと浸けたから漁師等は驚ろいたの何んのぢやない、「とツ、何うも存じませぬことですから悪口を申し上げまして誠に申し譯はございません」

「まッ、眞實でございます、時々兩ンゴを看板にして大威張りに威張り散らすお武士がございますものですか……南無金剛童子様々……」
 「わッ、私もお許しを……南無不動明王様……」
 動明王の名を稱へて居る者もある。

「さア、處で約束だ、向へ地まで渡してくれるか」「へエ、向地どころではございません、お武士のお伴でございますれば假令野島の沖へでもなア岩公「そうだ……、彼れだけのお腕があれは海賊ぐらいは底の木ツ葉だ……」と云ふのをフィと耳に挟んだ嘉一郎は聞き咎めて、「コレ、一寸待て、此の近海に海賊があるのか」「へエ、何うも其奴の爲めに私共は漁場を失なひますれば上行の通ひ船は何日も酷い目に逢されますので」「ホ、ソリや面白、近くなれば其處へ案内を致して見んか」「エツ、それではお武士様は其奴をお退治下さいますか」「さア、退治ると云ふて拙者は別段剣道を習つた

と云ふ譯ではないが、武術修業の爲め廻國致すものだから先づ腕試しと云ふ譯で一つやつて見やふ、處で其海賊の棲家と云ふ奴は何處かに有のか」「へエ、それが野島が棲家でございまして島の上から見張でも致して居りますと見ゆ漁船には滅多に参りませんが荷船と見ますと最後、上行の船でまア、免れたものは是れまで餘り多くございませぬ、又我共のやうな船は別に何を取られたと云ふ譯ではございませぬが、野島と申しますと徳山の濱邊にございまして漁場としては申し分はございませぬだのを、海賊が彼處へ棲家を構へました以來は邪魔になりますと見ゆまして一切漁船の立寄のを止めて仕舞ひました「成程、夫れなれば兎も角も拙者を其野島とやらに案内を致せ、其方等は拙者を捨てたま、元へ引つ返しても苦しふない、拙者は海賊の爲めに萬一命を果せば夫れまでぢや、萬一首尾よく退治を致した上は何うせ海賊の船もあらふから夫れに乗つて島をば逃れ出よう」「エツ、夫れぢやお武士様眞實でございま

すか「お、元よりのことである、拙者は嘘は大嫌ひぢや」「やツ、面白い、なア兄弟、お武士様が彼ア仰つて居られるのだから我れは捨て、けぼりには出来まい、殊に其海賊の爲めに我れは漁場も縮められて居るのだから今日のは頭領だけだと云ふこつちやから其奴だけお武士に願つて後は我れで片付けやう」「そりや面白い、此の様なお武士様が味方をして下さりや無論願つてもないこつちや、オイ岩公、一寸一同を集めてくれ」「おツと承知……岩公と云はれた一人の漁師は腰につけた竹法螺を口にわて、「アツツ、アツツ……」と二度三度吹き鳴すと見る間に遙か彼方の松影から青銅色した漁師仲間が三々五々ツイ〜云ひながら此方へ出かけてくる数は二十、三十、四十、凡て其數五十人近くもあつた。

「なツ、何んだ〜」「オイ〜、何うしたんだ……」口々に喚くを此方の

一人、「外ぢやない、是れから海賊退治をやるんだ」「エツ、海賊退治……」「ウン、此のお武士様が尻を押して下さるのぢや、イヤ違ふ、此のお武士様が退治して下さいのぢやから我れ〜がお手傳をするのぢや」「エツ、此のお武士様が一人でか」「そうだ〜、飾り人形のやうな奴が五十も百も居るよりは此のお武士一人の方が何れは力になるか知りやしない」「ヘーン……」「ヘーンとは何んだ、此のお武士様は只のお武士とは違ふわい……」と冒頭をして一隻の舟を苦もなく携たことを詳しく語ると根が單純な氣性の漁師仲間だけに、「フーム、夫れだけの御人なれば大丈夫だ、オイ一同の奴何うだい、此のお武士のお供をして野島へ出掛けやう、嫌な奴は嫌だとぬかせ、其代りに此後野島の漁場へ勝手に來せることは出来ぬぞ」「誰れが嫌な奴があるものか無論出かけるさ」「そうだ〜、嫌と云ふ奴は此後仲間から除外だ」「フンそれぢや早く用意をしろツ……」

○上々の首尾だせ

漁師連中は中々團結力がある、忽ちの内五十餘名は満場一致を以て原案に可決……と云ふと六かしくなるが兎も角も海賊退治案が通過をした、そこで得物々々を用意して二隻の船に乗込むこと、なつた、普通なれば一隻に七八人は定員だが、夫れは畢竟漁をする時のことで今度も漁と云へば漁だが魚を漁るのぢやなくて海賊を捕るのだとして見れば大層な綱なんかも要らねば又餘りに船数が澤山あれば目立つ恐れもあり且つは一隻の船に多数乗合して居る爲めに素破と云ふ場合、手ん手に櫓を取りや速方を充分に出すことが出来やうとの考がへから嘉一郎の發案によつて二隻に制限したのである。

「さアお武士様お乗り下さいませ、ソロ／＼出かけてませうから」 「よし／＼、處で何うちや、其野島とやらに見張の奴が居るとすれば漕ぎ付けるのは一通

りぢやあるまい」「へエ、夫りやそうでございますな」「フン、それでは何うだ、二隻とも漁に出かけた途中、難船にでも遭つて吹き流されたやうにしては……」「なツ、成程、そりや丁度都合がようございます、一昨日の晩に大變な荒風がございましたから……なア兄弟、お武士様の仰言る通り荒風の爲めに吹き着けられたやうな風をして野島へ着けやう」「フム、そりや宜からふ、……」と是れも異議なく可決、其内一同の面々は二隻の船に別れて乗り込む、嘉一郎は總指令官と云ふ格で其内の一隻に乗つた、用意全たく整ふを待つて、纜を解く、漕手は何れも小供の内から手馴れた屈強な荒男だ、敵の間近くなるまでは差支へがないと云ふので手ん手に力瘤を入れて櫓を持つから舟は矢を射るやうに水を切つて進む、早柄の瀬戸や檀の浦は見る間に過ぎて漸やく周防灘に差し掛つた頃、一人の船頭は、「モシお武士、是れから間もございませんせ……」と云ふ聲につれて俄かに用意に取り掛つた、今まで數人で漕いで

居つた櫓は一挺に減らす、得物は船底へ入れて人数の數もスワと云へば大部分は窮屈ながらも同じく船底へ這入る支度をする、二隻の船は繋ぎ合してサモ難破したらしく櫓すら一挺だけ外して是れも隠した、此んな支度をする内にも追手を受けたお隆でツン／＼と進む内、遙かの方に小さい黒い影が見え初めた、「それ、彼れだ／＼」「彼れへ吹き流されるのだぞ」「そうだ／＼、潮行を見て旨く流し込め」「おツと承知だ……」此んな話が船頭間に取交されるにつれて嘉一郎の胸は遠がに躍らんでもない、何分にも生れて以來敵らしい敵に向ふのは初めてだもの……

船は流れに添ふて益々進む、黒い影と見たのが近寄につれて一つの島であることが判つた、と見る間もなく其島影からツーツと飛び出した一隻の小舟、此方へ望んで矢のやうに向ふて来る、「そーら、やつて来た」「フン／＼、早く隠れる」「オット／＼……」豫て定めた人数だけを殘して其他は船底へ隠れ

た、嘉一郎も武士姿が目立つては宜しくないとは是れも同じく船底に這入る、船底と云ふても荷船とは違つて漁船だから普通なれば生洲に使ふ處だ、今日は底の栓がシツカと指して居るから水の氣はないが、漁船として使ふ時には是れに水を満たして捕つた魚を生きながら圍ふ處だから其窮屈なことはお話にならぬ程だ、だがそいつをチツと我慢をして様子を窺ふて居る内に相手の船は次第に近寄つて来た様子、聴て、「オーイ、其船何んだツ」と吐鳴る聲聞けたと思ふと上に残つた船頭はサモ悲しそうに、「一昨日の晩の荒氣で櫓を取られた漁船ですから何うかお助け下さい」「成程、それでは難破をした漁船だな」「左様です一昨日の荒風の爲めに酷い目に逢つたのです、五隻連だつたのが散々になつて今はヤツと御覽の通り二隻繋ぎとめました、第一食物はなく飲水はな

く……」「エハイ、勝手にしろツ……」「アモシ、一寸お待ちを……何分にも……」「其處どころか、そんな世話どころぢやないわい……」云ひ

捨てたまゝ、ギイ／＼と彼方へ漕ぎ返した様子、聽て船頭は船板をめぐつて、
「ハ、ハ、ハ、上々の首尾だ、旨く行つたせ……」と云ひながら次第に近寄
る小島を目掛けて方の限り漕ぐ内に漸やく一つの岸に着いた。

此時までに船頭の身扮と改めた嘉一郎はヒラリと舳から岸へ飛び上り、小山
を上つて附近を見ると島は餘りに廣くもあらぬ様子、稍わつて濱邊傳ひにスタ
／＼と歩を進めて舟と見る舟の大きいのは叩き壊す、小さい舟は遙か水際
離れた岡へ引ツ張りあげ、島をクルリと一周する筈でフト行手を見ると挟いな
がらも入江となつた中に飾りたてた五六隻の舟と七八隻の漁舟とも通ひ舟とも
つかぬやうか碇泊して居る、其岸の方に番所やうの建物すらわつて、其建物の
裏手には土所に似合ぬ立派な建物が目についた。

「ホ、ホ、さては彼れこそ海賊の棲家、さて……」と云ひながら考がへて傍を
見ると磯邊のことだから二抱へ三抱へもわりそうな岩がコロ／＼轉つて居る、

夫れを見てニツコと笑んだ、「ホ、ホ、是れこそ風強……」と云ひながら幸
はひ傍にゐる小高き土地の處までそれを二十個ばかりも運んだが、聽て其一個
を右手に擱んでグイツと差わけ、彼方の舟を的にビユーツ……と投げかける
と覗ひ違はず小舷にバリ／＼と當つて見る間に傾いて仕舞つた、「是りや面
白い……」又もや擱んで此奴も投げるとバリ／＼と……三四個を投げた奴
が何れも見事に的に當つて沈没させると番所のやうな處から慌て騒いだ様で五
六人の奴が飛び出した、今度は其奴を見かけてビユーツと投げた奴が二人の頂
邊からドシーンと落ちてキヤツ潰れて了へば例の奴等は驚ろき慌て、元來た方
へ引ツ返す、嘉一郎はそんな奴には目も掛けず尙も舟に向つてビユーツ……
ビユーツ……と投げかける岩には一つも空はなく何れも是れもバリ／＼と、
バリ／＼と小舷を砕く、舟底を破る、舳先を挫く、其當り處こそ違へ目的は一
つだ、其一つの目的が旨々と遂げて今は一隻も残らず沈んで仕舞つた、そうな

ると今度は建物の屋根を目掛けてビュツと……投げる、如何に頑丈な建物でも何十貫、何百貫と云ふ大岩を屋根から打つ付けられてはたまつたものではない、投げるごとにグララツ……グララ……ツと屋根を打ち抜いて下へ落ちた様子、夫れと同時に、「ワァー、ワァー……」と関の聲やら悲鳴やら判らぬ聲が聞えて、バラ……ツと蜘蛛の子を散らすやうに何十人とも知れぬ奴が右往左往に亂れながら飛んで出る、そいつを見がけて相も變らずビュツ、ビュツと打つ付けることに二人三人、多きは七八人も一時に打つ潰されて倒れる、夫れが爲め免れた奴は逃げ場を失なひマゴ……して居る處へ嘉一郎は米揚箆はとも大ききのある小岩を一つ……て兩手に引ツ掴んで、打ち振り打ち振り飛び出して、「海賊共覺悟をしるツ……」と云ふまもなく手當り次第コツン、ビュツ、バチリツ……と張り倒す勢ひに、「われはツ……」益々驚ろき逃げ惑ふ彼方から漁師の一隊手ん手に得物を打ち振つて、「是りや糞ツ、

……」
 「己れツ……」ビュツ……と打つて掛る、何日もなれば大刀打ち振つて又向ふ筈を、嘉一郎の餘りに恐ろしい勢ひに最初から度膽を抜かれたと見えて今はブル……慄ひて、「おツ、お助けツ……」
 「生命ばかりは……」
 なぞと手を合す奴もある。

○オーイ早く来いよ

窮鳥懷中に入らば獵夫も是を捕へずの譬へ、嘉一郎も今海賊の憫れツホイ姿を見ては強て是れを打ちかねた處から、兩手に掴んだ二つの小岩を下シーンと傍に投げ捨て、舟の纜の綱をアチリツ、アチリツと五筋六筋引き千切り生き残つた海賊共を片ツ端から犇々と引ツ縛つた、何うせ真正の縛り方ではない、米俵を縛るやうな有様に兩手もこめて胴体ともにグル……縛りだ、「己れ逃げては承知をせぬぞ」「どツ、何うかお助け……」「ピリ……慄へに慄る

へて居るのを見て、「コレ〜、漁師の蟻……」又蟻だ、けれども此の手並
 を見ては蟻と云はれても蚤と云はれても仕方がない。「へエ……」
 「此奴等を逃さぬやうに致しておけ」「もツ、勿論でございます、併しお武士様只だ一
 人で此んなことをやつて仕舞つては私達の手出しやうもございませぬ」
 「何うせそうでないか、貴様達は蟻だ、蟻は荷物を運ぶだけが役目だ」「何ッ
 何うも是れには恐れ入つた、處でお武士様、是れから何う致します」「フン
 兎もわれ一應家の内部を調べて見るのぢや」「なッ、な〜るほど……」「一兎
 も角も此奴等を逃がしてはならぬぞ」「御念には及びませぬ、逃げ出しました
 ならば夫れこそ幸ひです、早速叩き殺してやりませすから」「ハ、ハ、ハ……」
 嘉一郎は愉快氣にカラ〜と笑つて番所のやうな建物を初め其裏手の家を詳し
 く調べて見たが他に一人の者も居らぬ様子に元の處へ引つ返し、捕へた海賊の
 奴等をクツと睨めつけて、「コリヤツ、其方等の首領とも思へるものは一人も

居らんぢやないか、又た盗み取つた品らしいものが一向に見付らぬが何處に置
 いてある、包ます云へ隠し立をしては許さぬぞ」と云ふ言葉に次いで糞尻取つ
 た漁師の面々、オツと幸わいとばかりに、「さア、ぬかせツ……」「ピシヤリ
 ツと得物を以て一人が打ツ叩くと他の面々もズラリと並んだ奴を思ひ〜にピ
 シヤリツ〜と打ツ叩く、中には至極念入りに五ツ六ツも續け打ちにやるもの
 もあるからたまつたものではない、「まッ、申し上げませ……おツ、お許し
 ……」「フン、然らば申して見る、首領は倒れた奴の内にもあるのか、又
 盗んだ品は何れかの空藏に秘し置きあると申すのか、何うぢや」「ハッ、そッ
 その何でございます、此の島にはございませぬので……」「ナニ、此の島に
 ないとか、然らば何れにある、案内を致せ」「そッ、その……案内と申して
 ……」「コリヤツ、案内を致さぬに於ては……」「ちよッ、ちよつとお待
 ちを……そッ、その場所は此處ではございませぬので……」「此處でなく

「何處だ」「へッ、その……是れからズウと東の方に大島と云ふのがござい
 ます、其大島の鼻にある島で……」「フム、それでは此處は出張か」「さッ
 左様で……此處はその……西から参る舟の見張場所……」「夫れなれ
 ば其島へ案内をしろッ……」「へッ併し舟が……」「ボ、ー、舟が……
 成程此處の舟ぢやなくては都合が宜しくないな、惜いことを致した、夫れなれ
 ば打ち壊すぢや無つたが……さて……」と云ひながら、繩を引き千切
 つた時に岸へ乗りあげた舟を、一々調べて見ると其内割合に破損の跡いのが一
 隻あつたのを幸わい、そいつをグイツと引きあげて漁師に向ひ、「何うだ、是
 れを急場の間に合ふやうに繕ひが出来まいか」「左様でございます……なア
 兄弟、何うだ」「フン、一つやつて見やう、是れくらいなれば我々に出来ぬこ
 とはわるまい」「それもそうだ、それではお武士様、一つやつて見ませう」
 「左様か、然らば早々に致してくれ」「畏まりました」

僅かのヶ所に大勢が寄つて群つてコッ、やり出したのだから忽ち其の内
 繕らひが出来上つた、そこで引ッ縛つた海賊の内二三人だけを舟に引き連れ、
 漁師も半分だけ此方に止めて嘉一、郎諸共、二十五人餘りの者が乗り込んだ。
 「さア潜いだ」「お、ッ……」兩側に四人づつ、俗に云ふ八斑櫓で以て捕虜
 の水先で方の限りエツサ、と漕ぎつける、舟は海賊の用舟だけに舟足は中々
 に早ければ漕方では手馴れた男が八人の呼吸を揃へてやつてゆくのだから飛
 ぶやうにサッ、と水を切つて走る、漸やく一つの島影を見付た頃、其島を離
 れた二三隻の怪しき舟が此方へ向ふと思ひの外、船先をクルリと返して東の方
 へ一目散に漕ぎ行く様子にフト目をとめた嘉一、郎は、「オイ、是れから彼
 の舟を追ふのぢや」「エッ、彼の舟……」「そうだ、定めて何處かに荷舟を
 見付けて追ッかけるものと心得るが兎も角も其奴を助けてやらふ、一つ氣張つ
 てシツカリやつてくれ」「やッ、心得た、そ、れ右梶だ……」と云ふ聲に梶

を取つて居つた一人はグイーツと梶を動かすと今まで鳥を目掛けて走つた舟は
 今度は怪しい船を目掛けて一目散、彼方も中々船足は早いが此方は夫れ以上
 だ、共に同じ方向に向けて進む内、次第に間近くなつてくる、と見る間に彼方
 は舷先を左に向けたと思ふ間もなく俄かに速力を早めて小島の彼方に隠れ去
 つたから嘉一郎は、「夫れツ……」と氣を焦燥れば、漕手も心は同じくこぐ
 手を一層に早めて忽ちの内に島を通り越し、フイと見れば怪しい船は三隻と
 もに美しく飾り立てた一雙の立派な大船目掛けてこぎ付けた處だ、云ふまで
 もなく其船に躍り込んで仕事を初めやうとするに相違はない、然も此方の船を
 仲間と思ふてか、オーイ、「早く来いよう……」なんかと呼んで居る。
 嘉一郎は是れを見ると一層に焦燥り立つた、それツ、間違のなき内に早くツ
 ……「お、ツ……」漕手の漁師は益々力を入れる、船は矢を射るやう
 にヒタリと大船の舷に着いた、大船の中では今しも海賊が入り込んだと云ふ

ので上を下への大騒ぎ、乗手は侍で、もゐるか大刀を引き抜いて斬つて向へ
 ば海賊の奴等も負けず劣らず手ん手に得物を取つて討つて向ふ、敵か味方か早
 くも血に染んで倒れたものすらゐる様子に、少しも猶豫ならずと躍り込んだ嘉
 一郎は海賊と思ふ奴を目ざしてバチン／＼と手當り次第に張り倒した。

○さア接家へ案内しろ

「是れはツ……」驚ろいたのは海賊だけではない、最初矢張り海賊の同類と
 思ふてか斬り付けて掛つた侍も口アングリ、「やツ、其方は……」
 、「ハ、御安心さつしやい、拙者は豊前の住人、竹内嘉一郎と申す者でござる
 斯くの如き風体致し居るに就ても仔細のあること、兎も角お化怪のせられるや
 う夫れにて御覽せられい」ゴフム……」と云ふたま、半信半疑で大刀引き
 抜いたま、キロ／＼と眼を光らして居る。

嘉一郎の方では夫んなことには目もかけず言葉の内にも海賊と見ては少しの
 會釋もなく、近寄る奴は張倒す、引ッ掴む、引ッ掴んだ奴は彼方の方に戦ふて
 居る奴を目掛けて手玉に取つてアツ付ける、斯ふなると手玉に取られた奴も助
 からねば當られた奴は尙更らること、兩人共にアツと衝突をした拍子二三間刻
 ね飛ばされて水中へドンブリツと世話入らずの水葬だ、見る／＼内に二十人は
 その奴はバタ／＼と倒れて了つたから其中でも臆病な奴は元の船へ逃げ込まふ
 とヒヨイと覗くと三隻は何時の間に解き放したか遙か彼方にアカリ／＼と浮い
 てゆき、只だ一雙だけ残つてゐるばかりである、突嗟の場合中を見る間もなく
 地獄に佛とホイと飛び込んだ拍子、思ひも寄らず、其上から、「コン畜生ッ、
 ……」と手軽く打ッ叩かれる、「おッ、おい、乃公だッ……」
 「驚も鷹も
 あるものか是れでも喰へッ……」と又もやビユツ／＼……、「ッ、痛い
 ヲ……」ヒヨイと見ると見なれぬ漁師がガヤ／＼四方に立つておるから、

「やッ、お前は……」
 「何がお前だ、殺つて仕舞へッ……」
 「可悲そうに四
 方から手ん手に打ッ叩かれてヒヨ／＼になつて居る處を、手取り足取り水中見
 かけて譯なくドンブリと打ちこむ。
 船中では乗合の武士等は俄かに強くなつたに引き代へ生残つた海賊共等は右
 往左往と逃げ場を求める爲めに走り廻り、遂には自ら海水に飛び込む奴もゐる
 と是れも漁師の面々、「それ行けッ……」と其側へ船を漕ぎ寄せるを、味方
 の船と見て飛び乗らふとする處を頭からボカリ……アツと云ふ間もなくドホ
 ンと水に沈んで是れもお駄佛、又船上に駈け廻つて居る奴は嘉一郎嫌さず躍り
 かゝつて張り倒す、蹴飛ばす、是れも譯なくバラリ／＼と打ッ倒れ、今は其陸
 すら見なくなつたと思ふ頃、船艙の方から不意に躍り出た一人、長さは僅か三
 尺ばかりだが太さは一握りにも餘る鐵の棒を兩手に持つて頭上高く振り上げ
 、やア仕事の邪魔立致す徒者、此上は海賊の張本燧灘右衛門直々に引導渡

の儀は既に張本を是れにてお討留め頂きたる以上、最早其許態々御出張致されるには及ぶまじきこと、存ずれば、何卒某し等と共に一先づ廣島までお供を仕つりたふ存ずる……」

「お志は辱しけなふでござれど、夫れにては俗に申す佛造つて魂入れずの譬もござる通り、切角ながら是れにてお別れ申す」「如何さま其儀もござれど、さりどては残念……」と暫し思案の末、

「して其住家とは何れでござるとか」「左様、彼れなる捕へたるものに案内致さす筈ではござれば拙者は確と存せぬと聞き及ぶに大島の鼻にござる小島と……」

「やツ、左様でござるか、尙前刻承はりたれども何分にも突発の場合でござつたれば、甚はだ恐れ入れを其許御姓名改めて承はりたく存ずるが……」

「ハ、ハ、ハ、ハ、お尋ね頂いてお名乗致す程でもござらんが、拙者は前申したる通り豊前の住人にて竹内嘉一郎と申す者」「アツ、左様でござるか、辱けなふ存ずる、拙者は加州家の服部御酒之丞と申す者、是れを御縁とし

て爾後御別懇に願ひ入る」「是れは……恐れ入つたるお言葉、兎もわれ右様の次第にて聊さか心急でござれば是れにて御免を蒙る、御縁もござらば重ねてお目に掛ることもござらふから」「誠に以てお禮の申し様もなき仔儀、然らば是れにて……」

船の面々は厚く禮を述べて居る内に嘉一郎は早くも小船に乗り移り、「夫れツ、早く……」と相圖の聲に、「オ、ツ……」と櫓拍子勇ましく捕虜の水先によつてサツサと向ふたのは一つの小島である、「モン、彼れが頭領の住んで居つた處で……」

「そうか、よしツ……さ、今一息だぞ」「おツと承知……」

「漁師等は勇み立つて漸やく其岸へベタリと船を着けると島から五六人の奴がタツ／＼と駈け付けて来て、「やア兄弟、早かつたなア……」とヒヨイと立止る處へヒラリと飛び上つた嘉一郎は突然力を極めてパツ／＼と二三人張り倒すと、残つた奴等は、「おやツ……」と驚ろいて尻餅をついた、そ

いつを逃がしも立てず忽ちちに引つ縛り、さ。「住家へ案内しろ」「とッ、何
うかお許しを……」。「八釜しく申すな」ホイと指先で弾いた奴は普通の拳固
ぐらいに應へる、「いたッ……」。「痛くば早く行けッ……」。「先の引ッ縛つ
た奴を船から下し、其奴と一緒に引ッ繋いで一人の漁師に繩尻を取らした。

○左様で御座いますか

縛られた海賊の手下等は仕方がないから嘉一郎等を其住家に案内すると、殘
つた手下は二三十人あつたが、何奴も嘉一郎の爲めにうち憐れられ、生殘つた十
餘名は是れも珠數繋ぎに縛られた、そこで嘉一郎はズラリと檢分をするとは是れ
迄掠め取つた金銀財寶はウンと山に積むはとわれれば、誘拐された近國の女は
二十餘名もある、夫れ等は夫れ々調べて居る内に夜に入つたから萬事は明日
のこととして一同は代り々寝床に着き、さて翌朝夜が明けると此邊の勝手知

つた二三の漁師に郡奉行へ届けに行かせ、別に二三の者を撰んで野島に残した
面々や且つは大里の家々では心配をして居るだらふからとわつて此の方面へ委
細の話を告げに行かせた。

郡奉行と云ふた處でオインレと直に行ける處ではない、此處から大島へ渡つ
て其大島の中途、久賀と云ふ處まで行かねばならぬから、役人が其届を聞て
出張して来た時は其日の夕方だ、其時には嘉一郎も身扮を改めてある、「や
ッ、此方は大島の郡奉行、磯部兵馬と申す者、此度海賊を退治致されたとか
申すは其許とか」「是れは態々と御出張御苦勞に存する、如何にも拙者は豊前
の住人竹内嘉一郎と申す者でござるが、フトせしことより一同の者を討拂ひ
申した」「此方は郡奉行と致して當今まで捨て置きしは實以てお恥しき次第で
はござるが、何分にも在所確かならざる爲め今日まで手を付ける譯にも相成ら
ず、實以て汗顔の至り」「イヤ、お言葉恐れ入ります、尙張本と申す者は斯

様々々の次第にて加州俣の船に生捕のまゝ、残し置てござるが、其他手下のものにて生残りしものは悉皆引つ捕へてござる、兎もわれ御檢分の上お受け取り下されたふ存するして」「彼れに居る漁師体の者は……」「彼れとても海賊退治に就ては一方ならぬ力を盡くしたるものでござるぞ」「エツ、左様……かイヤ、各々には御苦勞でござつた」「へッ、左様でございますかい……」「漁師等は上役人から町重に禮を云はれるのは初めてだから怪訝な顔してウロウロして居る、其内に郡奉行は下役人を従へて一通り檢分が終ると、「竹内氏を初め御一同の方々には御迷惑ではござらふなれども一應岩國まで上申致さねば相成らぬにより、兎もわれ陋ろしふでされど此方役宅までお出掛を下されたふ存する、尤も早々早船を以て差立てる筈でござれば……」どの言葉は辞むことは出来ぬから、夫れでは拙者はお供を仕つるが是れなる等者は日々に職業を持つたものでござれば……」「如何さま其儀は充分に察し入る、

元よりお咎めを待つと云ふ譯ではござらんから夫れでは其許一人だけにて……」「オ、夫れなれば頂上、然らばお供を仕つる……」そこで郡奉行は幾分かの金子を一包みとして、「是れは當座の褒美として此方の計らひを以て與へる、尙上より追て沙汰もあらふから一同の姓名を申し殘し置やう」「セツ、姓名と云ふと……」「ホ、一、其方等の名前ぢや」「ハ、ン、名前か、俺ア大里の濱の善兵衛ぢや」「俺ア岩公だ」「俺ア佐次兵衛の忤の佐次郎だ……」なんぞと云ふのを奉行は一々手帳に書き止めて此島には數名の下役人を止め、野島の方から漁師が立歸れば是れも姓名を聞き置やう下役人に申し聞け、誘拐された女は天れく國許へ送り歸すやうぬかりなく取計らひ嘉一郎を伴なふて引ッ返せば、漁師の面々は又悦び勇んで大里に歸つた、尤も此の者等には其後小笠原俣の手を経て莫大な褒美を賜はつたと云ふことである。

さて加州家の家臣服部御酒之丞の一行は無事廣島へ着いて使者の趣を萬端滞りなく済まし、一方細付……ぢやない、鐵の棒で縛つたまゝの海賊の張本を掛り役人へ引き渡して藝州侯へも委細を言上すると藝州侯には又大變な驚ろきと悦びでチャンホンになつた「フォーム、海賊の噂は先刻來聞き及び居るにより近海を嚴しく取調べさせて居つたがはてさて危険きことであつた、夫れに致せ嘉一郎とやらは賊の棲家に向つたとか」「御意にござりまする、其向ひましたる棲家とは、大島とやらの鼻にある離れ島とのことでござりましたが、……」「大島……フム、すれば岩國の領地であるな、棲家に向ひしとわれは何れは上役人に届け出るは必定、さすれば岩國に於ても早速城内に迎へ入れるに相違はゐるまい、左程の勇士を予が耳に致しながら其儘捨て置くは残念殊に此度の事もわれは尙更らること……」「さあつて早速使者を岩國の領主吉川侯へ差立てる、又服部は夫れでなくとも結納を滞りなく納めたこと

を本國へ通知をせねばならぬのだから、此度の海賊に到達たことやら、竹内に助けられたこと、其竹内は非凡な大勇士であること、此度の役目を無事に果すことが出来たのも其竹内のお蔭であることなどを委しく急使をたて、本國へ通知をした。
話代つて久賀の郡奉行、磯部の邸へ一先引き取つた嘉一郎は磯部の言葉によつて岩國へ通知の使ひが歸るのを待つて居るに其翌日、其使と共に岩國の城内から兩名の家臣が使者となつて立ち向ひ、「此度のお骨折に就て主君にも非常なる喜び、就ては是非とも城内へお迎へ申せこのことでござれば……」この言葉に兩名に伴はれて岩國へ出掛て見るに大守吉川侯には中々の御機嫌手厚き待遇を以て此度の功を擧げられる、此處で二日三日と滞在をして居る處へ今度は藝州侯からの使者が届いた、此の使者は嘉一郎へ直々ちや無い、吉川侯へ當てゝの使者だ、「此度御領地内に於て海賊を退治致した竹内嘉一郎と云

ふ勇士は御城内へ定めてお呼び迎へになつて居られること、心得る。就ては當方よりも同人へ對し是非に其功を擡はねばならぬことがあつた。何うかお引き渡しを下されたい」と云ふやうな意味であつた。

吉川侯には嘉一郎を見れば見るほど天晴の骨格だから成らば何日までも止めて置いて自分た家臣にしたいと思はれて居るだけに他家へ出したくは無いが、相手は外ならぬ藝州侯と云ふので頭から斷ることは出来かねた。そこで使者の方では宜い加減な返事で一日二日と引き延し、一方では家中で評判の美人を撰んで妙な内意を含め、嘉一郎の側に附け置いて怪体な關係を結ばせやうとした。嘉一郎は見る處二十歳前後の血氣の若者であるから其側に美人を附け置けば猫に鱈節、磁石に鐵粉、忽ち喰いつくか吸いつくに相違は無い斯ふして吸いついたなれば最後之助、其引力によつて嘉一郎を繋ぎこめやうとしたのであるが、嘉一郎は本年取つて漸やく十六歳、普通なれば戀の幼稚園ぐらゐに入門を

する頃ではわれ、性來の女嫌ひ、女を養育はどに思つて居る嘉一郎には是れが反つて有難迷惑どころか甚はだ以て苦痛に感じた、と云ふて此の苦痛を免れる爲めに當地を出立きやうと思へば何んとか斯んとか口實を以て引きこめ、夫れが爲めにツイ十日半月と日を重ねて居るばかりである。

とする嘉川侯の方では藝州侯の使者の手前、二日三日は何んとか斯んとかして云ひくるめたが半月も長引けば遂に口實が無くなつた、然も良策と思つた美人の策略も首尾悪く失敗に歸したと云ふので遂に我を折つて嘉一郎を引き渡すことになつた。

○是れこそ屈強な一策

引き渡すこと云ふた處で手放しては無い、藝州侯の御用が濟めば再び岩國へ引ッ返すやうと云はねばかりに二三名の供人を附けた、供人と云へば体裁はよ

いが嘉一郎は其儘他國に行くやうだつたならば残念と云ふので監視を附けたのだから云はゞ体のよい罪人同様だ、さて藝州侯の御前へ出るに斜ならぬ御機嫌、そこへまだ滞在中の服部は又先般の禮をいろ／＼と述べる、尤も服部は此度の御用が済めば兩三日滞在の上で本國へ立歸る筈であつたのだが、藝州侯から嘉一郎を迎へられるとわれば何れは當城へ来るには相違は無い、さすれば是非に面會をして先般の禮を述べねばならぬ、此際を外しては何日か又逢ふことは出来まいからと云ふやうなことから今日来るか、明日来るか、心待ちに待つ内に思はず日を重ねたのである。

嘉一郎は藝州侯の御所望によつて此處でも非凡の手並を御覽に入れた、其事を詳しく書いた處で格別面白くも無いから省いておくが只だ例によつて非凡な力量を御覽に入れたと云ふておく、藝州侯には其手並を見るに就けて吉川侯と同様、嘉一郎を召抱へたいと云ふお氣がムラ／＼と起つた、一成程、聞き

しに勝る大力、彼の者を是非に我家臣として召抱へたいものだ、と斯ふなることよしから、吉川侯から供人として附いて来た兩名が邪魘になる、と云ふて嘉一郎の供人と云ふのだから理由無しに歸れと追ッ歸す譯には成りかねて何か好き工風が……考がへられて居る折柄加州侯から服部宛に急使があつて、「此度、竹内とやらの助力嬉しく思ふ、其際の働きを聞き及ぶに世にも稀なる勇士と心得るから是非に對面を致したい、殊に此度の儀に就ても其儘に捨て置く譯にはな

るまいから其方歸國の際は町重に待遇て伴れ歸るやう、萬一其方に於て、廣島表出立後とわれば再び廣島に引ッ返すか、岩國へ出張してもよい、又當の本人が何れかへ出立後とわれば其行邊を尋ねて伴ひ歸るやう致せ、此儀必らず背くことは相成らぬぞ」と云ふやうな大變な殿命だ。

服部に於ては常々武藝好の主君であるから是れくらいの事は或ひは仰せられぬとも計はれぬと覺悟をして居つた、そこで早速其旨を藝州侯へ言上するこ

候には、「さてよ、切角我が手に入りかけてある嘉一郎を今手放せば加州家に召抱へられるに相違は無い、と云ふて兩家の間に縁邊が出来かけて居る折柄、是れが爲めに切角の縁談まで破約になつては大變と思はれた處から、いろ／＼と思案をせられた末、フト思ひ當つたのは吉川家から附き添へられた二人の供人である、「オ、そうだ、是れこそ兩人を追つ拂ふ屈強な口實ともなる、嘉一郎はまだ吉川家に仕官をしたと云ふぢや無し、嘉一郎の爲めに助けられた加州家から其禮を述べんために態々迎へに參つたさあれば吉川家に強て拒むことは出来ぬ筈だ、又嘉一郎が加州に行くのにまで何んの關係も無い吉川の家臣が供人として附き添へて行く譯は無い、フム、是れを以て兩名を追つ拂ひ、當家より改ためて嘉一郎の供人を添へ、一先づ加州へ遣はそう、加州家には當家と縁者の間柄もなる今だから、當家より附き添へたる家臣の手前、強て嘉一郎を自分の方へ召し抱へやうとはせられまい、ホ、ー、是れこそ兎も角も吉川家

の手を放す屈強な上策……」

藝州侯には虫のよい考がへを起されて先づ嘉一郎に加州侯からの旨を傳はると、嘉一郎に於ても吉川家の美人責が鼻について少しも早く其手を放れたいと思ふて居る際だけに是れこそ恰と幸ひさ一も二も無くお受けをする、そこで兩人の供人に其旨を語るに肝腎の本人が承諾だから強て引き止める機利も無い、已を得ず遮々ながら岩國へ引き上ると、是れでハツと一息つかれた藝州侯には家臣の内から宮崎、渡邊と云ふ兩名を撰び出した、此の兩名は家中の若侍、侍中の氣轉者だ、此兩名をソツとお招きになつて、「此度其方等兩名を嘉一郎の附添として加州へ差向けるは餘の儀では無い、前田侯には嘉一郎の様子を見て或ひは召抱へやうと云はれるかも知れまいから、其節は兩名の氣轉を以て嘉一郎は既に當家に召抱へる筈でわれは其儀だけは御免を蒙むりたいこの趣を程よく言上するやう、且つ前田侯の方にて御用濟みなれば嘉一郎を是非に

召し連れ歸るやう確と申し聞け置く」と申し渡された、兩名は是れによつて、「ハ、ッ、畏まりました」とお受けをしたもの、其内心の譯らぬ生きた人間を預かるのだから中々に責任は重いから御前を退るゝ大層な心配だ、「渡邊氏、何うも大變なことを仰せ付つたな、相手は御家中の人さあれば兎も角、武術修業の爲め廻國を致される御入ぢや無いか、何時何れへ參られるか判らぬものを我々に於て勝手に足止を致す譯には相成るまい」「如何さまなア、斯程仰せられるなれば主君より竹内殿へ前以てお召抱への儀をお申し渡しにされるが宜しそやなもので……」是れは道理なる話ではあるが、吉川家からの附添を道々返して間も無い折柄、剩さへ、嘉一郎の側には始終加州家の服部が附いて居るから遠かに藝州侯も夫れと云ひかねたのである、兎も角も宮崎、渡邊の兩名は此んな役目を仰せ付つて服部に伴れられ、嘉一郎の附添ひとなつて、加賀前田侯の本城たる金澤に向つた。

○鼻紙料に百石遣はす

さて一行は金澤へ無事に着くと、兼ねてお待ちかねの前田侯には早速嘉一郎をお召し出しになられ、先般の功を深くお喜びになつて様々とお手厚きお言葉を送る、次で服部から其非凡の力量であること、且つは藝州に於て淺野侯の御前で其手並を御覽に入れたこと云ふことをお聞きになられたから、「フム、然らば予にも見せてくれるやう所望を致す」そのお言葉によつて、此處でも五六俵の米俵を手玉に取つて御覽に入れた、さアそうなるゝ勇士好の加州侯には何うして指を喰へて見て居らふ、「フム、天晴なる若者である、嘉一郎さや、其方は豊前の住人さあるが小笠原家の家中さか」「イヤ、私は小倉の御城下より二里餘り離れたる足立山の麓に生れたものでございます」「ホ、一、すれば是れまで別段主取を致したと云ふ譯では無いさか、それは頂上

「……」と云ふお言葉にヒヤリとしたのは附き添ひの宮崎、渡邊の兩名だ。
「さア大變、エライことをした。是れなれば前以て嘉一郎までソツと話をし
置けば宜かつた」口では云はぬが心の内で思ひながら互に顔を見合せて居るこ
當の嘉一郎ではそんなことは知らぬから平氣の平左で、「御意にございませす、
小笠原家の御家老、宮本伊織殿、及び御近侍の村田重藏殿の御兩名にお引き立
てを頂戴しましたが別段主人として仕へたさ申す譯ではございません」キツ
バリお答へをしたから尙更らヒヤリして居るさ前田侯には愈いよ御機嫌の体
「ホ、一、それでは何うぢや、此後予に仕へてはくれまいか、祿は聊さかなが
ら二百石を興へる、尤も其方としては不足ではあらふが、予の家の掟として
新參召抱の節は二百石を限り致して居れば當分夫れにて辛抱致しくれる
やう、何れ追々に加増を致すであらふ」
さア事だ、愈いよ加州侯に先鞭をつけられた、萬一此處で嘉一郎がお受けを

するやうだつたら我れ、兩名主君へ申し譯の爲め切腹でも致さねば相成ら
ぬ、と云ふて此場合側から口を出すことも出来かねる、ハテ困つたさだ、嘉
一郎の返答如何によつて兩名の生死が岐れねばならぬさは情ない、南無や八幡
大菩薩、何卒我れ、の心を汲ませ給へ、嘉一郎の返答を我れ等兩名望みの通
りに致させ給へ……苦しい時の神頼み、宮崎、渡邊の兩名は必死となつて心
の内で神佛を祈つて居るさ夫れが天に通じたか、嘉一郎は暫し考がへて、「ハ
ッ」と手を支へ、「思召しは實以て有難くはござりませすれど、私は水呑百姓
の忤にございませす」 「なにッ……」 「多寡が卑しき土百姓の忤にござりま
すれば、尊さき御前のお目通り致すのも恐れ多き次第、況して百石の大祿を頂
戴致しまするご誠以て身分不相應の次第、何卒此儀御賢察の程願ひ上げま
する」ご御辭退申し上げたのでホツと胸を撫で下すさ、加州侯には夫れくらい
で庇古垂れるやうな方では無い、「ホ、一、面白い、豊前さ此處さは隔たりし

土地ぢや、然らば假令水吞百姓の悴たりとも包むは人情なるに、如何に正直なりとは申せ此場に於て尋ねも致さぬに殊更ら吹聴致すは存意のなくて適はぬこそ、又存意は無くとも夫れを露骨に申す心は殊の外予の意に適ふた、此上は假令水吞百姓の悴であらふとも町人の悴であらふとも差支へは無い、祿高に不足さわれば二百石の外に鼻紙料として別に百石を遣はすが何うぢや」

一度安心の胸を撫でた兩名の翠丸は又もやピンと上つた、「失策たツ、是れぢや如何な嘉一郎も參つて了ふだらふ、いよく切腹をせねばならぬぞ」思はずサツと顔色を變つてツツと嘉一郎の様子を見て居るこ、「ハ、ハ、ハ、不束なる私、二百石の大祿ですら身に餘りましたる程、何んさて不足を申し上げませう、なれども聊さか仔細のでざりますれば仕官の儀、切角の仰ながら慎しんで御辭退申し上げまする」「何んぞ云ふ、然らば予に仕へるが氣に要らぬさか、……」

「イヤ、誠に以て分に餘りましたる仰せ、決して左様の儀にはござい

ませぬ」「フム、然らば其仔細さやらを申せ、夫れ聞ぬ上は予も加州の前田ぢや、飽までも其方を家臣に致さねば置かぬぞ」「恐れ入ります、左様なれば仰せに従がひ言上致しますが……」と冒頭をして申し述べたのは自分は竹内嘉兵衛の孫であること、小倉で宮本伊織の厚意によつて村田の邸に養はれ、小笠原候に推擧をせられたのではあるが、飽までも武道を修業したき身がお小姓として取り立てられては夫れも適はぬ處から、一時の方辨として水吞百姓の件を云ひたてに御辭退申した、然るに此度計らず海賊退治の一件から岩國の吉川候、且つは藝州の淺野候にお目通りを許され、兩家に於ても召抱へやうこの内意のあることを察せんでも無いが、けれども夫れをお受をしては小笠原候よりも第一宮本伊織に對して相濟まぬ次第であれば萬一其お言葉の下つた時は切に御辭退申し上げる存意で居る、處へ又御當家より只今の仰せ、嘉一郎身に取つては誠に此上も無き有難き次第は云へ、今度は小倉ばかりでは無く、吉

川、淺野の兩候にまで申し譯の無き次第であれば何卒此儀御賢察を願ひ入る、
……云ふやうな意味であつた。

流石御執心の前田候も是れをお聞きになつては強てさも云ひかねて、「フム……」と吐息を洩らされるに引き代へ、此方の宮崎、渡邊の兩名は僅かに胸を落ち付けたが、まだ心配云ふのは主君淺野候の意に従がふ否かは兎に角、今一應廣島に首尾よく件歸るか何うかと云ふ問題である、出發の節、確と申し聞ける言はれた言葉に對し、只だ二人でホカンとして歸れば實以て申し譯は無、如何はとのお答めを蒙らねばならぬと考がへては是れも容易ならぬ大問題であつた。

○安藝だから安藝助

前田候には嘉一郎の言葉をお聞になつて御落膽の内にツーツと何事かお考が

へになられたが聽て、「フム、道理なる申し條、如何さま武士はそう有りたう嘉一郎、此上は強て申さぬぞ」「ハ、ハ、ハ……」其代り其方は今後如何やうの儀はあらふさも一切主取を致すまいな「仰せまでもございませぬ、神前に誓ひを立てましても其儀は固く致しませぬ」「フム、さるにても惜しき若者である、が何うぢや、今一つ予より其方に望みがある、是れだけは是非に聞いてはくれまいか」「恐れながらお望みを仰せられます……」「フム、餘の儀でも無い、其方を此儘手放すは如何にも惜しき心地のすれば今日より予が領地の加賀の二字を與へるにより、今日より嘉一郎を改ためて加賀之助と名乗りくれまいか」「ハ、ハ、ハ、仰せに脊き奉つりたる罪をお咎めも無く身に餘りなしたる御下命、冥加至極と心得まする」「フム、然らば此儀承諾致しければさか」「勿体至極も無き儀にはござりますれど、お許の下し置れます以上、謹しんでお受けを仕つりまする」「フム、予も夫れにてセメテもの満足ぢや、是

れを取らずであらふ」こ、お側にわつた備前長船の名剣を手づからお差出しに
なるこ、嘉一郎は、「ハ、ハ、ハ、ハ……」と慎しんでお禮を申し上げ、恭しく兩
手を延して受けやうとする處をサツと抜き打ちに眞向から斬つて下すを早くも
身を退つて、「是れは……」と身構へをする間も無くヒタリと鞘に納められ
た前田候には、「イヤ、見事である、それ之れを與へよ」近侍を以てお下げ渡
しになられる、「ハ、ハ、ハ、ハ、有難く頂戴を仕つりまする」「フーム先づ當分はゆ
るくご滞在を致せ」「ハ、ハ、ハ、ハ……」

加州候の御城内でお手厚きお待遇に預つたが此處でも餘りにお手厚過ぎて有
難迷惑に感じたが、夫れよりも實以て迷惑至極なのは藝州から附添ふて來た
兩名だ、自分等も嘉一郎同様手厚く待遇れては居るこ云へ例の重大問題がわ
るから氣が氣では無ない、兩名ヒソ／＼と相談の上、イツソのこ嘉一郎へ實
情を打ち明けやうかこまで考がへたもの、流石に云ひ出しかねて一日二日と過

す内、恰と三日目の晩に嘉一郎の方から火蓋を切つた、「御兩名には種々どの
御厚意嘉一郎……では無い加賀之助身に取つて何んともお禮の申し上げやう
もござらん、就ては拙者とても武道の修業に志す存念にござれば長々と當地
に滞在を致す譯には相成らず、何れ兩三日中に當御領主よりお暇を頂戴致す
心得でござるが、夫れに就き御兩名に申し上げねばならぬことがござる」「エ、
ツ、兩三日内に……」「さ、先づお控へ下されい、實は御兩名此度のお役
目、拙者に於てもお察し致し居る、就ては此地に於てお別れ致したきは萬々で
はござれど、夫れにては御歸國の上、主君の思召にも適はれまい」「マツ、
眞實お察しの通り、實は其儀に就き我々兩名より今日はお願ひ致すべきか、
明日は申し上げやうかと存じ……」「ハ、ハ、ハ、ハ、如何さま其儀も此程來の
御様子によつてお察し致さんでもござらん、と申して過日當御前に言上致した
る次第でござれば藝州候への仕官も存じも寄らぬ事ではござれど御兩名のお身

分に拘はる儀とござれば拙者一身を以て出来得ることなれば如何やうともお引
受を致すでござらふ」一ハ、ツ、辱しけ無ふござる、何をお隠し申そう實は廣
島出發の砌、主君より斯様々々の内意を蒙むり……」と思はず有難涙
を落して物語を聞た嘉一郎はニツコと笑み、「ホ、ー、其儀なれば御懸念御
無用、拙者御兩名にお付き合ひ申して今一應廣島まで参り、淺野候へ直々委細
を言上致すでござらふから……」一でござるか、竹内氏、何事も申さぬ、辱
しけ無ふでござるぞ」漸やく初めて肩の荷を下した心地、嘉一郎を拜まんばかり
の有様であつた。

其内嘉一郎の加賀之助から前田候へ其事を言上に及ばれると候に於ても元よ
り異存のある筈はなく、快くお暇を給はつたから三名打ち連れて再び廣島へ
立ち歸り、淺野候へお目通りを願つて仕官御辭退のこを言上すると候に於て
も事情を聞て見れば残念ながら仕方が無い、「前田家より其國名を取つて其方

の名を改めめさせたとわれれば予に於ても名乗を興へる、ナニ 其方の名乗は忠
常とか、ホ、ー、恩人たる宮本伊織より名付られたのであれば改ためる譯には
相成らぬと申すか、イヤ、決して苦しむ無い、今後は予の申し付る通りに改た
めい、さて、前田は加賀だから加賀之助……フム、予は安藝だから安藝
助……ホ、ー、之りや不可ん、名乗りに三字は可訝しいぞ、はてな……、
フン、之りやよい、コレ、嘉一郎……では無い加賀之助」一ハ、ツ……
「予は廣島の城主であるから廣島の廣の字を興へて廣國と名乗れ、よいか、竹
内加賀之助廣國……加賀之助廣國……フム、之りや不可ん、加賀之助廣
國と申せば前田の提灯を持つやうぢやな、さて、何か外によい名を考がへ
て遣はすぞ」

相手が辭退して居るのに態々頭を絞つて漸やく考がへがついたらしい、
「加賀之助、よい名乗が出来たぞ、之れなれば申し分はわるまい、忠常なぞと

たからお目通りへ何がて見ると淺野候には相も變らず斜ならぬ御機嫌。「オ、秋房、過般其方に約束を致したる品、本日漸やく出来に及んかたら下げ遣はす」「ハ、ツ……」「コレ、前刻の品を秋房に與へよ」「ハ、ツ……」と七八名の者がお受けの言葉と共にバラ／＼と座を立つたから加賀之助は訝かしく思ひながら待つて居る處へ、稍わつて其面々等は汗びだして擔ぎ出して來たのは一本の太き鐵の棒であつた、それを加賀之助の前へヤツトコサと置くのを待つて藝州候にはニツコと笑まれ、「何うぢや秋房、夫れなれば其方の武器として申し分はあまるまい、一應手に取つて改ため見よ」「ハ、ツ……」鐵の棒とは意外な賜物、成程之れなれば結構と恭しく兩手を掛けて押し戴き、よく／＼目を通すと握りの處は一握りに餘り、末は二握り以上もある太きで、横には竹内加賀之助秋房の八文字を太く黄金を以て象眼をしてゐる。「ハ、ツ誠」に結構なる品……」「フム、氣に適ふたか、然らば此場に於て使ひ試む

るやう」「畏まりました」をいつを竹刀でも携げるやうに片手で手軽く引ツ掴み、ヒラリとお椽先へ飛び下りて苧殻でも打ち振るやうにヒューツ／＼と振り舞したから藝州候を初め並居る一同の諸士は驚ろいた、其内にも候には驚ろきの内にも喜ばれて、「ボ、ー、見事々々、今後は夫れを以て其方の武器と致すやう、尙道中を致すとわれは如何はと有りとも不足を感じるは路用と聞き及べば之れを取らず」と別に百兩の金子を下げ渡されたから嘉一郎も非常な喜び、萬々のお禮を申し上げ、其翌日お暇を給はつて之れから愈いよ一本立の武者修業者に成り澄し、拜領の鐵の棒をドシン／＼と突き鳴して東に向ふ内に早くも東海道荒井の宿に差か、つた、荒井は現今で新居と書く、時は暮六つとは云へ春の日はまだ空高く照して居る、「格別強そらな相手も無い様子だ此んな土地に泊つても面白く無いから今一つ先方の宿へ行つてやらふ」と云ふので此の宿を通り越すと前は有名な瀧名湖がある、其海に接した處は水上一里

の所謂今切りの渡のある處だ、見ると大分乗合が乗り込んで今にも出そうとなつて居る折柄だから恰と幸わひとわつて、「オーイ、船頭一寸待てーッ、……」言葉をかけながらドン／＼走つて漸やく乗り込んだ。

加賀之助一人ですら弱年ながらも大兵な男だから二十貫ばかりもあるのに其お添物に何十貫とも知れぬ鐵の棒を引ッ拘へて居るのだから大きいと云ふた處で多寡の知れた渡し船のことだけに忽ち船走がグツと入れれば速力にも大いに差支への生じるは元よりのこと、夫れが爲船頭の顔が曲めば乗合の内にも急ぎの用を拘へたものなぞは口にてこそ出さぬが流石に眉を蹙めてシロ／＼と加賀之助の顔を見る、處が當の本人たる加賀之助には弱年だけにそんなことには一向心付ず、座席の挟い處から安座をかい膝の上へ手にした鐵の棒を眞ッ直に突き立て、座に就た、鐵の棒には竹内加賀之助秋房の金文字が歴然とゐるから何んのことには無い膝の上に紀念碑でも押ッ立てたやうだ、之れは加賀

之助にして見ると場所塞ぎにならぬやうな考がへてあつたのだが側から見るとサモ自慢らしくオツ立て、るやうに思はれる處から二三人隔て、彼方に居つた一人の若侍は夫れと見て心悪く思ふた様子、鼻の先でフ／＼と冷笑ふて、「世にも馬鹿な奴があつたものぢや、呆氣脅しに苧殻のやうな鐵の棒を持って彼の様は何んだ、地獄の赤鬼だつて今少し氣の利いた面をして居るだらふ、ハツ／＼、彼んな奴に限つて満足な奴はあるまい」と加賀之助の方をチロリと眺めながら云ふ言葉に此方は多少後先の考がへはあるとは云へ血氣の年頃だ、ムカ／＼と憤慨したが、間狭き船中ではあり乗合の者も多勢に居るから荒立て、は迷惑だらふと突嗟の間に思案を定めてキツと奥齒を噛みしめて居ると相手の方ではよい氣になつて、「ハツ／＼、臍甲斐無しの腰拔め、造り人形ちやあるまいし、彼の澄まし込んだサマは何んだ、子ツカラ有難く無い面付だわい」なぞと散々に悪口を云ふて居る。

夫れでも嘉一郎は少しも相手にならずチツと堪へ忍んで居る内に船は何時か舞阪の岸に着く、一同の乗客は何れも先を争ふて上陸を急ぐを彼の若侍はチツと見送つて別段慌てもせず悠々と上る、夫れを又見送つた加賀之助は之れも落付拂つて其後に續いた、時は日も既に西に沈まふとしの附近は次第に薄靄に包まれゆく暮六つ過、本来ならば最早此の宿で宿りを定むべき筈を若侍は何處を目めてか夫れらしい様子も無くアラリ／＼と足を進めるにつれて加賀之助も同じく歩みを運ぶ、其内に早くも舞阪の宿は外れて松原に出た、空には八日の月は淋しげに光を洩らして居るばかりである。

柔道が勝つか腕力が勝つか

加賀之助は前後を見合せて聽てキツと口を開かふとする時、彼方はツと立ち止つて振り向いた。「イヤ、夫れなる御人、前刻は船中にて無禮仕つた、折

柄の夕間暮、幸はひ通行の者も最早無き様子、此邊にて一試合お願ひ致そうかな」「フム……………」。「ハ、ハ、ハ、ハ、前刻は定めて御立腹の御事と存するが、並ならぬ御人を見て一手試合を望みたさの手段でござる許されよ」「エツ……………」さては……………」。「斯く申さば御不審御道理、何をお隠し致さん、拙者は紀州の家臣關口八郎の一子彌太郎と申す者、此度父の許しを受け武道修業の爲め諸國を巡歴致す存意にて國許出發の上、先づ中國筋を經廻り、是れより關東に志す途中でござるが、思はしき相手にも出逢さず、聊さか張合抜の折柄、フト前刻船中にてお見受け申せば並々ならぬ御格服、是非にお相手を願はんと存じられたれども船中にては到底叶はず、舞阪にお着の上は宿を求められるは必定さすれば萬一見失なふ恐れもあり、旁た誠に無禮には存じられたれども一時御立腹を致させ、是れへお誘ひ申さん爲めの手段とござつた、右様の次第にござれば前刻の無禮幾重にもお許し下されよ」「是れは御念の入つたる御挨拶恐れ入

りまする紀州家の關口殿と仰せらるれば關口流柔道の元祖として御高名をか
ねぐ承まはる處でござるが……」
「イヤ、左様仰せられては恐縮千
萬、尤も父は此の道に於て多少の覺はござらふなれども拙者はまだ、修
業中の身でござれば、晴々しくお相手を致しかねるでござらふ、して夫れなる
御所持の鐵の棒に記されたる御姓名は其許の……」
「如何にも、拙者は豊前
の住人にて前名を竹内嘉一郎と申せしが仔細わつて加賀之助秋房と改ため申し
た」
「エツ、さては嘉一郎殿とか、すれば周防の海岸に於て海賊を退治致され
たは其許とか」
「退治と申す譯ではござらんが先づ、張倒したまで、ござる
」
「ホ、左様でござつたか、夫れを承はるにつけ前刻來の無禮今に至つて
益々恐縮、仕つる、實は拙者岩國に參りし節、城下一般に其許のお噂を
以て持切の有様でござつたにより、是非に御面會を致したく心得居る内、藝州
表へ向はれ、次で加州に趣かれしとの事でござつたれば殘念ながら其機會も

でござらず今日まで打ち過ぎ申した」
「ホ、左様でござつたか、如何にも拙
者の改名も夫れが爲めでござる、又前刻呆氣脅しと仰せられし是れなる鐵の棒
は藝州侯より給はりし品……」
「イヤ、前刻の儀は只今お話申したる次第
でござれば一切お聞き流し下されたふ存する」
「ハツ、拙者とて
も氣に致して申したる次第ではござらん、お氣に支われな、何は兎もわれ是
れにてお目に掛りしを幸わい、一手御教示をお願ひ申し上げる」
「お、其儀
は拙者に於てこそお願ひ致したき處でござれば」
「然らば邪魔の要らぬ内にお
願ひ仕つる、が夫れに致せ其許のお得物は……」
「拙者は矢張り柔道が勝手
でござれば此儘にてお相手を致すでござらふ、なれども其許は何なりとも御懸
念なく……」
「エツ、然らば柔道を以て是れなる鐵の棒にて……」
「廣
言のやうではござれど柔道には得物の差別はござらねば何なりともお相手を致
す覺悟……」
「フム、然らば……」

加賀之助は鐵の棒を右手に持つてキツと身を構へやうとしたが、俄かに思ひ返してかドシンと傍へに投げすて、「アイヤ、是れにて參るまい、如何に其許は柔道の達人に致せ、無手を以て向はれる御人に對し、斯の如き得物を取つて打ち向ふは武士の恥辱、此上は拙者とても無手にて打ち向はん」「ホ、ホ、一、すれば其許にも矢張り柔道の一手を以て……」「アイヤ、拙者は柔道は存せんなれとも力を以てお相手致す、餘人は知らず生れて以來一回の劣れを取りしことなき此の腕でござれば腕の限り力を揮つてお相手を致す」「ホ、一、是れは一段と面白くござらふ、斯く申す拙者に於ては並々の力には一回も劣れを取りしことはござらねど、聞き及ぶ如き其許の非凡の力に打ち向ふは初めてござれば此の試合を以て柔道が勝つか腕力が勝つかを試すには此上も無き機會と存する、然らば御用意を致されい」「お、ツ……」

兩名は刀の下緒を取つて早速の早驟に綾取り、サツと別れて身構へをする

内にも、關口の方ではチリ／＼と進んで敵の虚を覘へば加賀之助は又荒鷲の小鳥に掴みかゝらん有様で、敵の寄り來るを頭からグワツと掴み潰さんばかりの勢はひ頗ぶる以て物凄しい、それでも暫しの間は互ひに、「ヤ、ツ……」「ヤツ……」呼吸を計つて居るばかりでわつたが、充分に相手を呑んで掛つた加賀之助は遂に痺を切らしてサツと飛び掛り様、ウンと力を極めて相手の肩口に掴みかゝるを早くもスツと身と躲した關口は、其利腕を取るが早いか肩に引ツ擔いでツドンと投げた。

是れには如何な力自慢の加賀之助も助らぬ、元來柔道と云ふ奴は力を以て向へば向ふはと、夫れを利用して投げなぞは殊に見事に極るものだから非凡の力を以て打ち向ふた加賀之助は自分の力で自分が刎ね飛ばされた、話は聊さか岐道へ外れるが、柔道家の語る處では死んだものよりも生きたもの、其内にも此方へ抵抗してくる奴は一番投げ易い、グニヤ／＼した奴なんかは何れはと

柔道の手を以て投げに掛けた處が中々旨く箝まるものでは無いそうだ、從がつて非凡な力のある加賀之助は非凡な投げを喰つたに相違はあるまい、と云ふて生れて以來土つかずの身だから是れが爲めに怒つたの何んのちや無いクル〜ツと起上るが早い、
 「己れツ……………」キツと相手を見るとニタリと笑つて突つ立つて居る様子に益々焦急つた、
 「こツ、小癩な奴ツ……………」タ、ツと夜及のやうに駆け戻り、平手でもつてピシヤリツ……………と其横面を打ツ叩いたやつが目く當れば如何な關口彌太郎も頭が木ツ葉微塵に挫けて往生を遂げる處だけれども弱年ながら一流を極めた腕前、サツと身を洗めて今度は加賀之助の帶際をグイツと握り、再び投げ飛ばそうとすると、
 「己れ、今度は罹るものかツ……………」今の投げに懲りたと思つてウツと力を入れて氣張つたから、何がさて大兵の頭体、彌太郎の腕には少々上りかけた、と見る間に、
 「糞ツ、今の返報だツ……………」グイツと反對に彌太郎の帶際をシツカと取つて頭上に高く差

上げて、今にも地上を見かけて叩き付けやうとしてフト考がへた、
 「さてよ、柔道者を相手に投げ付けなんぞしては其途端に肋骨を蹴り破ると云ふことを聞いたことがあるぞ、此奴ア迂闊に投げては險呑だ、兎も角も紀州の關口と云ふ奴は油斷がならぬと聞て居るから用心をせねばならぬ、と云ふて此儘下せばアベコベに又もや投げ付けるに相違はあるまい、はて厄介なことになつた、何んとしてやらふ……………」
 「兩手に差上げたまゝ、思案をやつて居ると彌太郎の方では差上られながら平氣の平左で、
 「霜一わアア、軍營にイ充ちて！エ秋氣イ潔しイ……………」なんかんと吟聲を初めた。

○生れて以來初めての失敗

暢氣と云へば暢氣、餘りに大膽千萬な有様に性れて以來弱音を吹いたことの無い加賀之助も是れに驚ろいた、
 「たツ、大變な奴だ、己れが勝つてるのか

買けて居るのか判らんで、夫れにしてもイヤノ、しい奴だ、はてな………フン
 そうだ、地上へ打つ付けるから横つ腹をお見舞しくさるのだから、此ま、で上
 の方へ放り投げてやれば真逆己れの腹まで足は届くまい、まて、夫れにし
 て用心に用心を重ねよと云ふことがあらず、投り上るにした處で、兩足と兩
 腕の端の方を成るべく攪んで故つてやらふと漸やくのことで思案を定めた處
 から、左りの手を彌太郎の足の處へ持ち添へて、「己れ殺ばつて仕舞へ………
 ツー云ふが早いか上の方へポイントと投げてサツと身を退くと同時、落ちて倒れ
 た上からギユツと踏みしめてやらふと云ふのであつたが、當て事と何んどやら
 の譬へ、ポイントと投げ上げたまでは豫定の行動ではあつたれ、其投げる拍子に
 額の處を手酷くドンと蹴られた、餘りの不意に思はずドシンと尻餅を搗く、
 すると彌太郎の方では加賀之助の大力を以て真正に投げ上げられては十間二十
 間は苦も無く昇る筈ではあるけれども、頭の上だけで投げやうとする處へ顔を

お見舞申されては充分に力の籠る筈は無い爲めに漸やく四五間高くポイと刎ね
 上られ、サツと落ちて來た、四五間と云ふても決して低くは無い、普通のもの
 なれば途中で氣絶をして仕舞ふが、落ちた拍子、地上へ頭突をもつて行つて碎
 けて死んで仕舞ふか何方にした處が生命仕事だ、處が此の關口流には猫返りと
 云ふ一手がある、是れは猫が屋根の上から飛び下るのを見て編み出したと云ふ
 一手で、眞ッ逆さに高い處から落ちて宙でクルリと轉覆返りをして旨く突ツ
 立つと云ふ方法だ、是れが關口流の一手專賣と云ふのだから譯は無い、何がさ
 て發賣元の手ヤキ、然も腕に於ては親の八郎よりも上手と呼ばれた彌太郎
 だもの、加賀之助の爲めに四五間も投げ上げらめた處で早速專賣特許の猫
 返りを以てスツクと突つ立つた、投げた方の加賀之助が倒れて投げられた彌太
 郎は無事に突つ立つたのだ。
 彌太郎は突つ立ちながら加賀之助の様子を見ると尻餅を搗いたま、呆れてシ

ツと眺めて居るから此方も強ては乗り込まぬ、ニツコと笑つて、「やツ、失禮を仕つた竹内氏、如何でござる」「フォーム……………」「今一手お相手を致そうか」「どツ、何うも不思議だ……………はてな……………」「ホ、ー、何んど致されて……………」「さ、是れまでは柔道の話を開き及ばぬではござらんが拙者の腕力を以て打ち向へば恐るゝに足らずと心得居つたは大變なる誤り、イヤ、何うも開口氏、其許のお手並恐れ入つた、柔道の奥の手初めて拜見を仕つた」

「イヤ、お褒めに預つては恐れ入る、がなれども柔を以て剛を制するは柔道の本意でござれば……………なれども拙者ども是れ迄屢々幾多の方々と出逢申した

が失禮ながら其許ほどの力を持たれし方にお相手を致すは初めてござる、殊に拙者を頭上に置かれしまゝ高く投げ上げられたるお手の内、中々以て常人の思ひも寄らぬことでござらふ」「何うして……………如何に投げ上るとも突嗟の間に拙者の額に手酷く當られし早技、是れを防ぐこと到底及びもござらぬ」「ハ

ハ、ハ、ハ、夫れこそ我開口流の一手でござる、眞劍勝負とあらば鼻根に當るべき筈ではござれど、試合とござるにより控へ申した」「エツ、鼻根に……………すれば一命はござるまい」「ハ、ハ、ハ、ハ、お言葉までも無きこと、只今のやうな場合とあれば如何に致すとも其許の一命はござるまい」「エツ、拙者……………の」「如何にも、萬一地上にお投げになれば肋骨に向ひ、天にお投げになれば只今の如く致して鼻根に向ひ、後にお投になれば後頭に向ふが法とござる、其内にも天にお投げになられし爲めまだしも其許のお伴僥でござつた、他の方面とでざれば元より注意は致す筈ではござれど急所を避けるに困難でござれば……………」「エ、ー、ツ、そツ、そりや何うも大變な處でござつた、併し開口氏、無手とあらば術をお施しになられるにも譯はござるまいが、得物を持って打ち向ふ時には何とござる」「ハツ……………」道理に二つはござらん、お望みとあれば今一應お相手を致さん」「ハ、ハ、ハ、ハ、ハ、夫れには及び申さぬ、が夫れに

致せさせても恐ろしきは柔道……」
遠がの加賀之助も思はず舌を捲て驚ろいた、尤も加賀之助の一生を通じて何百回か打ち向ふた内に、劣れを取つたのは僅か二回半ある、其最初の皮切りと云ふのは此時だ、是れだつて負けたと云へば負けたに違ひは無いが是れまで柔道と云ふことに深く心を置いて無つたからで無理の無いことである、何んな學者でも習はぬことは知る道理は無い、俗に習はぬ經は讀めぬと云ふ通り、お釋迦さまでも孔子でも英語や佛蘭西語でペラ／＼話をされた日には通辨なしで返事が出来るものか、夫れから今一回半の負け、半と云ふと可訝しいが是れは後年三代將軍の御前で天下の豪傑連をお召出しになつて大試合を開かれた節、加賀之助は澁川伴五郎と云ふ澁川流柔道の名人と組合せになつた、其時の勝負である、残りの一回の劣れと共に順を追ふて述べることを、したが兎も角も生れて以來初めての負けだから驚ろいたのも無理は無い。

○拙者の妙案は斯様だ

生れて以來、勝負に劣れを取つたのも初めなれば驚ろいたのも初め、又最も愉快に最も勝負らしい勝負をしたのも初めてな加賀之助は今喜こびの眉を開いてフト氣がつく上弦の月は何時か西の空に落ちやうとして居る。
「やツ、關口氏、今宵はお蔭を以て愉快でござつた、拙者生れて以來今宵は心地のよきことはござらん、夫れに致せ夜も大分に更けたる様子、兎もわれ引ッ返して舞阪の宿に宿を定めては如何でござらふ」「されば、假令僅かではござれと既に通り越したる處へ引ッ返すも何んとやら、夫れよりも夜をこめて濱松まで参るも一興でござらふ、聞き及ぶに舞阪より濱松までは僅か三里に足らぬ道程さか、ブラ／＼と参らば恰も夜明頃に仕着くでござらふから」「なツ、な／＼程、如何さま結構、然らば拙者もお供を仕つる……一と云ふので兩名

は其處を 出立、道中別に急ぎもせず、互ひに語り合ながらブラリ〜と行く内に、所謂意氣相投合したとでも云ふのか何方から云ひ出すとも無く話が纏まつたのは今後兩人は兄弟同様に親しむこと、苦樂艱難は相共にすること等を初め是れから先の武者修業は兩名同伴ですること、夫れから暇々には彌太郎から加賀之助へ柔道を傳へることなどは主も條件………と云ふと聊さか大袈裟だが兎も角此んな約條を締結した。

そこで同盟の出来た兩名は東海道を江戸に向ひ、夫れから五年の間に東山、北陸地方を初め奥羽地方までツラリと廻つたが、加賀之助は大力無双の所へ、彌太郎から仕込れる柔道は目に見えて上達をする、三ヶ年はどの間に自から一手を編み出して眞揚流と名付ける流儀さへ拵らへた。

僅か三ヶ年ぐらいで夫れだけ上達の出来そうな筈は無いが、教へる彌太郎の方では速成と云ふので枝葉を避けて急所々々ばかりを教へる。そこへ加賀之助

は武藝にかけては天性と云ふのか一を聞て十を知るの才がある、そればかりか性來の非凡の大力が大變な間に合つた、よく柔道をやる人から柔道は柔を以て剛を制する術だから腕力などは何うでもよい、夫れよりも敵の呼吸を計ることか肝腎だと云ふことを聞く、元より柔道の本意は夫れに相違はあるまいけれども夫れも至極堪能した人でこそ充分に其本意を發揮することが出来る、けれども生嚙りの先生が如何に柔を以て剛を制することは云へ、柔道の柔も知らぬ幕内の力士に打つ掛つて見た處がホイと一掴みに掴み潰されて仕舞ふのは今更ら云ふ迄も無く其例が澤山ある、處か加賀之助の大力は横綱の力士が束になつて突つ掛つても大盤石ヒクさぬせぬと云ふのだから大變なものだ、或は柔道よりも大力でもつて木ッ葉道場を捻り潰したかも知れない、遂には此の捻り潰された道場の先生や門弟などが何うも眞揚流と云ふ柔道は恐ろしい手だ、竹内加賀之助は恐ろしい名人だと此んな噂が夫れから夫れへと傳へて、加賀之助に一

面の識も無いものすら竹内加賀之助と云ふ人は恐ろしい人だ、加賀之助は實に天下の名人だと云ふ相場がチャーソンと極つて仕舞つた、氷は水より出て愈いよ冷やかなりと云ふ通り、斯ふなれば肝腎師匠役になつた關口彌太郎より加賀之助の方が評判が高くなる、評判が高くなるにつれて劍道や鐵の棒を振り廻すより此方が面白く思つて益々力を入れて腕を練る、腕を練るにつれて愈いよ名人にならざるを得ない譯である、夫れが爲め帯びた兩刀は以前からも餘り使はなかつたが其兩刀に少しも用事が無く、又鐵の棒も荷厄介と云ふ傾となつたもの、何さま藝州侯から拜領の品さあつて身の側を放したことは無い。

それはどの加賀之助が一人どころか一方では關口彌太郎、是れも柔道にあつては押も押れもせぬ名人だ、此の名人と名人の二人伴れの武者修業だもの何んな處へ行つた處で兜を脱ぐやうなことは金輪際有べき筈は無い、五ヶ年間の廻國で廻つた道場の數が一千の數を越へ、一回の劣れを取らなんだと云ふのと、なつた。

だから凄まじい、と云ふて廻國修業も偶に強い相手に出會してこそ樂しみもあるが、是れでは修業に廻つて居るのが道場破りに廻つて居るのが判らない、子ツカラ面白く無いぢや無いかと云ふやうなことから一先江戸に引き揚げることになつた。

處が江戸表にあつても劍道は盛だが柔道に於ては格別是れと目ざす程のものはないとあつて、「一向面白くござらんや」「如何さま、少しは腕の立つものがあつたらぬものだが是れぢや仕方は無い」「眞實だ、尤も諸大名の家中には少々くらいはあつたらぬが此方から名乗をあげて試合を申し込む譯には相成らぬから仕方は無い」「フム、名乗を上げると云へば昨今では何處の道場へ行つても我れれの姓名を名乗れば何日も留守を使ふから一向に張合が無い」「ハツ、く、く、く、よく、亂暴者と目ざされたかも知れぬなア……」

んかと語り合ふ内、彌太郎はフト思ひ出したやうに、「處で竹内氏、夫れに就

て拙者聊さか妙案が浮び申したが如何でござらふ」「ナニ、妙案、そりや結構、妙案とあれば何事でも賛成を仕つる、して其方法は……」「されば、夫れに就て先づ其許の御意向を伺はねば相成らぬ」「拙者の意向とか……はて、其許の御發案とあれば何事でも同意でござるぞ」

○其役目は拙者だ

彌太郎は加賀之助の言葉聞きながら言ひ出し悪そうに、「さ、それも一通りの儀とあれば進んでお話も致せるが何分にもな……」「夫りやいよく怪しからん、關口氏、其許と拙者の間柄は何事によらず一切包み隠しは致さぬ筈でござつたな」「何んとして左様に改まりしことをお尋ねになられる」「申す迄も無きこと、只今のお言葉、一通りの儀なれば話も出来るが此度のことは何分にも話が出来かねるとは何んとしたことでござる、其許と拙者の間柄に

は一通りも二通りもあつた筈ぢや無い、何事でも一切……」「まあさ、お静まり下されい、如何さま之れは拙者の失策、夫れでは申すが萬一お氣に召さぬ時には決して斟酌致されな」「オ、勿論のこと、斟酌致すなぞとは他人行儀だ、拙者は……」「判つた、何うも其許は言葉尻を取つて……」「之れは怪しからん、拙者は何も……」「ボイ、之れも拙者の失策、兎も角もお聞き下されい、斯様でござる、ウー、その……其許は風体落されることをお好になられまいな」「ナニ、風体を落とすとは……」「さ、是れも内情をお話致さねば相判らんが、其許も御承知の通り御府内では相手と致して好ましき者にも出逢ず、と申して諸國を廻國を致した處で木ツ葉道場を打ち破るの外に格別の妙案もござるまい」「勿論ぢや、夫れが爲め我々兩名は昨今手持無沙汰の折柄ではござらんか」「さ、其處でぢや、拙者の妙案と申すは一つ場所に居つて諸國の武士を相手と致し見る方法でござるテ」「ボ、い、そりや

面白い、然らば早速……」「まあさお待ち下されい、その何でござる、夫れをやるに就ては御府内に居る譯には相成らず又風体を此儘にては面白くない」

「成程、其處で……」「まづお聞き下され、諸國の武士は悉く當御府内に集まつては散じ、散しては集まるでござらんから其街道筋に待ち受け申すのぢや」

「成程、それでは伏兵を張つて敵の近寄を待ち……」「まあさ、お待ち下されい、伏兵なぞ申せば穩かならぬが、兎も角も武士の風体では面白くござるまい、そこで其許に御相談と申すは御當然に風体を落すのでござる」

「さ、其風体を落すとは……」

「左様、拙者の考がへにては街道筋の昇夫に姿を扮し、聊さか腕のわりそうな奴を目がけて試合を申し込まふと心得るが昇夫と云へば我々の目から見れば蛆虫のやうなものでござるが其許は卑しき風体なりとも致されるお氣がござるか」

「ハツ／＼／＼、夫れは面白い、大賛成でござる、拙者なぞは元を洗へば水吞百姓の悴でござるから夫れくらしいの

ことは何でもござらん、それでは之れより早速出掛やう、併し其許と拙者の兩人では普通の駕籠では餘りに輕くて……」

「先づ、先づお待ち下されい、元より我々兩名を以て一つの駕籠を擔いで面白くござらねば、又強ち昇夫になると申す譯ではござらん、只だ斯様に下人百姓の風体を致して強そうなる武士には試合を申し込み、威張り散す奴には膽ツ玉を引ツてぬいてくれやうとの考がへでござる」

「ホ、ホ、愈いよ面白いな」

「そこで兩名が一つ所に居つては妙でござらんから假令同じ街道筋たりとも少しく離れて居る方が面白からふかと存するが此儀も其許の御意見によつて如何やうとも致そう」

「なツ、なツ、なるほど、此方で膽ツ玉を引ツてぬかれてホツと安心を致す頃に又一つかハ、ハ、ハ、是りやいよ／＼以て面白い」

「イヤ、夫ればかりではござらん、兩名同じ斯様に居つては一人の相手に兩人ともに試合を致す譯には相成るまい、元より致せぬ事はござらんが、其許か拙者か兎も角後より打ち向ふ者は疲